

靈界物語 第五卷 靈主體從 辰の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五卷』愛善世界社

1993(平成05)年08月29日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説 そうせつ

嵐の跡 あらしあと

第一篇

動天驚地 どうてんきやうち

第一章 榮華の夢 えいぐわゆめ 〔二〇一〕

第二章 松竹梅 しやうちくばい 〔二〇二〕

第三章 臭黄の鼻 くさきはな 〔二〇三〕

第四章 奇縁萬状 きえんばんじやう 〔二〇四〕

第五章 盲龜の浮木 もうきふぼく 〔二〇五〕

第六章 南天王 なんてんわう 〔二〇六〕

第七章 三拍子〔二〇七〕
第八章 顯恩郷〔二〇八〕
第九章 鶴の温泉〔二〇九〕

第二篇 中軸移動

第一〇章 奇々怪々〔二一〇〕
第十一章 蜃氣樓〔二一一〕
第十二章 不食不飲〔二一二〕
第十三章 神憑の段〔二一三〕
第十四章 審神者〔二一四〕
第十五章 石搗歌〔二一五〕
第十六章 靈夢〔二一六〕

第三篇 豫言と警告

第十七章 勢力二分〔二一七〕

第十八章 宣傳使〔二一八〕

第十九章 旭日出暗〔二一九〕

第二十章 猿蟹合戦〔二二〇〕

第二十一章 小天國〔二二一〕

第二十二章 神示の方舟〔二二二〕

第四篇 救世の神示

第二十三章 神の御綱〔二二三〕

第二十四章 天の浮橋〔二二四〕

第二十五章 姫神の宣示〔二二五〕

第二六章	艮坤の二靈 <small>こんこん にれい</small> 〔二二六〕
第二十七章	唾の對面 <small>おし たいめん</small> 〔二二七〕
第二十八章	地教山の垂示 <small>ちけうざん すゑし</small> 〔二二八〕

第五篇 宇宙精神うちうせいしん

第二九章	神慮洪遠 <small>しんりよ こうゑん</small> 〔二二九〕
第三〇章	眞帆片帆 <small>まほ かたほ</small> 〔二三〇〕
第三一章	萬波洋々 <small>ばんばやうやう</small> 〔二三一〕
第三二章	波瀾重疊 <small>はらんちゆうてふ</small> 〔二三二〕
第三三章	暗夜の光明 <small>やみよ くわつみやう</small> 〔二三三〕
第三四章	水魚の情交 <small>すゐぎよ まじはり</small> 〔二三四〕

第六篇 聖地の憧憬せいち どうけい

第三十五章 波上の宣傳はじやう せんでん〔二三五〕

第三十六章 言靈の響ことたま ひびき〔二三六〕

第三十七章 片輪車かたわぐるま〔二三七〕

第三十八章 回春の歡くわいしゆん よろこび〔二三八〕

第三十九章 海邊の雜話うみべ ざつわ〔二三九〕

第四十章 紅葉山こうえうざん〔二四〇〕

第四十一章 道神不二だうしんふじ〔二四一〕

第四十二章 神玉兩純しんぎよくりやうじゆん〔二四二〕

第七篇 宣傳又宣傳せんでん また せんでん

第四十三章 長恨歌ちやうこんか〔二四三〕

第四十四章 夜光の頭やくわう あたま〔二四四〕

第四十五章 魂脱問答たまぬけ もんだふ〔二四五〕

第四六章	油斷大敵 <small>ゆだんたいてき</small>	〔二四六〕
第四七章	改言改過 <small>かいげんかいくわ</small>	〔二四七〕
第四八章	彌勒塔 <small>みろくたふ</small>	〔二四八〕
第四九章	水魚 <small>すゐぎよ</small> の煩悶 <small>はんもん</small>	〔二四九〕
第五〇章	磐樟船 <small>いはくすぶね</small>	〔二五〇〕

序文 じよぶん

この靈界物語は、全部五卷にて述べ終る豫定でありました。しかしなるべく細かくやつてくれとの筆録者の希望でありますから、第四卷あたりからややその方針をかへて、なるべく詳細に物語ることとしました。

それがため豫定の第五卷にて、神界、幽界の物語を終ることは、到底出来なくなつてきました。本巻の最初にあつて、一旦海月なす漂へるこの國を修理固成すべく諾、冊二神の、天の浮橋に御降臨遊ばすところまで述べるやうに考へてをりましたが、またもやガラリと外れまして、第六卷になつてやうやく天の浮橋に二神が立ちて滄溟を探りたまふ段に届くこととなします。

この物語は、去る明治三十二年七月より、三十三年の八月にかけて、一度筆を執り、これを秘藏しておき、ただ二三の熱心なる信者にのみ閲覽を許してみました。しかるにこれを讀了したる某々らは、つひにいろいろのよからぬ考へをおこし、妖魅の容器となつて歸幽したり、また寄つて集つて五百有餘卷の物語を焼き

棄てて了つたのであります。

それから再び稿を起さうと考へましたが、どうしても神界から御許しがないので、昨年舊九月十八日まで、口述をはじめることが出来なかつたのであります。そのときの二三の役員に憑依してゐた悪神の靈は、全然この靈界物語を覺えてしまつて、いまは開祖の系統の人の肉體に潛入し、現世の根本を説き諭すとの筆先の眞理を眞解するものは、某より外にないとか、日の出神の生魂だとか、常世姫の身魂だとかいつて、またもや邪神が支離滅裂なる物語を書き、この教を攪亂せむと考へてゐるのであります。私は某より一度その筆先を讀んでおくと、幾度も勧められました。

されど如何いふものか、腹の中の蟲がグウグウいつて拒み、これを讀ましてくれないのであります。これも神界の深き御注意のあることと考へます。世の中には否新しい信者の中には、開祖の書かれたお筆先でさへも、瑞月が作つておいて、開祖に書かしたものだらう、さうでなくては、アンナ田舎の老婆さまが、コンナ深いことを書く道理がないと言つて、筆先を半信半疑の眼で見る人が澤山あるく

らゐですから、萬一邪神の産物たる某の筆先を、一冊でも私が讀んだとすれば、
またもや原料を某の筆先から取つたなどと誤解する信者ができるかも知れないの
であります。

實際を言へば、某に憑依してをる守護神は、私の書いた靈界の物語を、ある肉
體を通じてあちらこちらを讀み覚え、さうして何もかも自分が知つてゐるやうに
言つて、某の肉體までも誑惑してゐるのであります。またそれに隨喜渴仰して金
言玉辭となし、憧憬してをる立派な人たちのあるのには、呆れざるを得ないので
あります。それゆゑ某の憑神の筆先にも、常世姫とか八王大神とか、その他いろ
いろの似たやうな神名が現はれてをるのも道理であります。しかし天授の奇魂を
活用して御覽になれば、その正邪と確不確と理義の合はざる點において、天地霄
壤の差あることが解るであらうと思ひます。

ア、私はコンナことを序文に一言も述べたくはありませぬ。されど靈界の消息
を知らぬ正しき人々のためには、どうしても注意のために申しおかねばならぬの
であります。

開祖の神諭にも、

「神の道は誠一つであるから、親子、兄弟、親類、他人の差別は致されぬぞよ」と示されてありますから、筆先の教示に従つて、一言注意をしておきます。またこの靈界物語について、立派な學者先生の種々の批評があるさうですが、それはその人の自由の研究に任しておきます。

ただ私は神示の儘、工作して口述するばかりであります。

大正十一年一月十四日 舊十年十二月十七日

於因幡岩井温泉晃陽館 王仁識

王仁

醜の魔神の現はれて 善の假面を被りつつ
誠の道を汚しゆく 言葉巧みな口車
うっかり乗るな信徒よ 外面如菩薩内心如夜叉

神かみの眞ま似ねする惡あく魔まの世界せかい うまい話はなしにのせられな

凡例はんれい

一、本卷ほんくわんは神界しんかい、幽界いうかいを網羅まうらせる靈界れいかい物語ものがたりの最終卷さいしゅうくわんと期待きたいしてをりましたところ、瑞月ずいげつ大先生だいせんせいの靈界れいかいに關くわんする蘊蓄うんちくは、全くまったく想像さうざう以上いじやうに豐富ほうふでありまして、つひに全體たいなかばの半なにも達たつせぬやうな次第しだいであります。しかのみならず、未だいま諾册なきなみにしん二神ごかうりの御降臨ごかうりんの臨前りんぜんのことで、全くまったく日本國にっぽんこくといふ名稱めいしやうの附ふせられない前まへの物語ものがたりであります。

一、ゆゑに日本國にっぽんこくに天孫てんそんが御降臨遊ごかうりんあそばして國土經營こくどけいえいを遊あそばすのは、ズツト後卷こうくわんに出ることと思おもひます。

一、神界しんかい、幽界いうかい、現界げんかいは共通きやうつうであるといふことと、神界しんかいにおける事象じしやうそのままが直ただちに現界げんかいに實現じつげんするのであると考かんがへるのは誤解ごかいであるさうです。

一、ただ吾人ごじんは、神界しんかいの神々かみがみの御心みこころも、現界げんかいの人間にんげんの心こころも同じおなじことであるから、

靈界物語において得たる教訓を、自己の心に較べ、身魂磨きの材料にすれば結構であるさうです。

大正十一年一月十四日

於因幡 岩井温泉晃陽館 編者識

總説 嵐の跡

かくも 國祖國治立命は、逆神常世彦以下の不従を征するにも、天地の律法を嚴守し、仁慈の矛を振ひて奇策神謀を用ひたまはず、後世湯王の桀を放ち、武王の紂を征誅するごとき殺伐の兵法をもつて、亂虐を鎮定することを好みたまはなかつた。

これに反し常世彦命らは、邪神に使役され、後世いはゆる八門遁甲の陣を張り、國祖をして辨疏するの餘地なからしめ、つひに御隱退の止むなきに至らしめた。狼獾の不仁なるも、また時としては神恩を感謝して獸魚を供へ、天神を祀り、

雛鴉すつあの惡食あくしよくなるも猶なほ反哺はんぼの孝かうあり、しかるに永年ながねん國祖こくそ大神おほかみの仁慈じんじに浴よくし、殊恩しゅおんを蒙かつむりたる諸神しよしんの神恩しんおんを捨すて、邪神じやしんの六韜りくたう三略さんりやくの奸計かんけいに乗のせられ、旗色はたいるの可かなる方ほうにむかつて怒濤どたうのごとく流れ従したがひ、國祖こくそをして所謂いはゆる「獨神すになり而隱身ましてすみきりなり也」の悲境ひきやうに陷おちいらしめた。

常世城とこよじやうの會議くわいぎにおける森鷹彦もりたかひこに變装へんさうせる大江山たいかうざんの鬼武彦おにたけひこをはじめ、大道別おほみちわけ、行成彦なりひこおよび高倉たかくら、旭あさひの奇策きさくを弄ろうし、邪神じやしんの奸策かんさくを根底こんていより覆くつがへしたるごとき變現へんげん出沒ゆつぼつ自在じざいの活動くわつどうは、決して國祖こくその關知くわんちしたまふところに非あらずして、聖地せいちの神人かみがみの敵てきにたいする臨機應變りんきおうへん的妙案めうあん奇策きさくにして、よくその功こうを奏そうしたりといへども、天地てんの律法りつぽふには「欺あざむく勿なかれ」の嚴戒げんかいあり、神聖しんせい至嚴しげんなる神人かみの用もちふべからざる行爲かうゐなれば、その責せめはひいて國祖こくそ大神おほかみの御位置ごゐちと神格しんかくを傷きずつけた。現げんに大道別おほみちわけ、森鷹彦もりたかひこ、鬼武彦おにたけひこらの神策しんさく鬼謀きぼうは、國祖こくその直命ちよくめいにあらず、國祖こくそは至仁しじん至直しちよくの言靈ことたまをもつて邪神じやしんらを悔くい改めしめ、言向ことむけ和やはさむとの御聖意ごせいより外ほかなかつた。しかるに血氣けつきに逸はやり、忠義ちうぎに厚あつき聖地せいちの神々かみがみは、律法りつぽふの如何いかんを顧かへりみるに違いとまなく、暴ばうに對たいするに暴ばうを以もつてし、逆ぎやくに對たいするに逆ぎやくを以もつてし、不知不識しらずしらすのあひだに各自かくじの神格しんかくを損そこなひ、

國祖の大御心を忖度し得なかつたためである。ア、されど國祖の仁愛無限にして責任觀念の強大なる、部下諸神の罪惡を一身に引受け、一言半句の辨解がましきことをなし給はず、雄々しくも自ら顯要の地位を捨て、隱退せられたるは、實に尊さのかぎりである。吾人は國祖の大御心を平素奉戴して、ある人々の言行の不穩と誤解の結果、吾身の災厄に遭遇することしばしばである。されど、心は常に洋々として海のごとく、毅然として山のごとく、動かす騒がず、すべての罪責を一身に引受け、もつて本懐としてゐるのである。すべて人に將たるものは、よく人を知り、人を信じ、人に任じ、その正邪と賢愚を推知して各自その處を得せしめねばならぬのである。しかるに部下の選任を餘儀なくして、誤らしめられたるは、自己の無知識と薄志弱行の缺點たるを省み、一言もつぶやかず、大神の仁慈の鞭として感謝する次第である。

ア、尊きかな、千座の置戸を負ひ、十字架の贖罪的犠牲の行動に於てをや。吾人は常に惟神靈幸倍坐世を口唱す。無明暗黒の現代を救ふの愉快なる神業に於てをやである。天下に二難事あり、その一は天に昇ること、その二は人を求むるこ

とである。ア、國祖大神の天國を地上に建設したまはむとして艱難辛苦をつくされ、神人を得むとして、その棟梁に最適任の神を得たまはざりしごとく、吾人またその例に洩れないのである。國祖大神は、聖地に清き高き美はしき宮殿を造り、至治太平の神政を樹立し、天下八百萬の神人の安住する祥代をながめて、歡喜に充せたまうたのも僅に數百年、つひに善神も年と共に惡化して邪神の容器となり、國祖が最初の目的を破滅せしめたるは、たとへば小高き山上に美はしき家をたて、その座敷から四方の風景を眺めて、その雄大にして雅趣に富めるを歡びつありしを、家屋の周邊に樹木の尠く、風あたりの激しきを防がむために、種々の必要なる木を植付けたるに、一時は木も短くして、風景の眺望に少しも障害なかりしもの、年を経るにしたがひ、追々と成長して枝葉繁茂し、何時しか遠景の目に入らぬやうになつたのみならず、つひにはその大木に風をふくんで、その木は屋上に倒れ、家を壊し、主人までも傷つけたやうなものである。世の成功者といはるる人々にも、これに酷似した事實は澤山にあらうと思ふ。現に吾人は、家の周圍に植付けられた種々の樹木のために、遠望を妨げられ、暗黒につつまれ、つ

ひにはその家もろとも倒されて重傷を負うたやうな夢を見たのである。されどふたたび悪夢は醒めて、さらに立派な家屋を平地に建て直す機會の到來することを確認するものである。國祖大神の時節を待つて再臨されしごとく、たとへ三度や五度失敗を重ねるとも、機會を逸すると、七轉八起は、神または人たるもの通常わたるべき道程であるから、幾たび失敗したつて決して機會を逸したとは思はない。至誠神明に祈願し、天下國家のために最善の努力をつくすまでである。現代の人々は、吾身の失敗をことごとく棚の上上に祭りこみ、惟神だとか、社會組織の缺陷そのものの然らしむる、自然の結果なりと思ふなぞの詭辨に依歸してしまつて、自己の責任については、少しも反省し自覺するものがない。宗教家の中には「御國を來らせたまへ」とか「神國成就五六七神政」とかいふことを、地上に立派な形體完備せる天國を立てることだとのみ考へてゐるものが多い。そして地上の天國は、各人がまづ自己の靈魂を研き、水晶の魂に建替るといふことを知らぬものが澤山にある。各自の靈魂中に天國を建てるのは、天國の住民として愧かしからぬ清き、正しき、雄々しき人間ばかりとならねば、地上に立派な靈體一

致ちの完全くわんぜんな天國てんごくは樹立じゆりつせないのである。

ア、されど一方いつぱうより考かんがふれば、これまた神界しんかいの御經綸けいりんの一端いつたんとも考かんがへられる。

暗黒あんこくもまた清明せいめい光輝くわうきに向むかふの徑路けいろである。雛鳥ひなどりに歌うたを教をしへるには、暗くらき箱はこの中なかに

入いれておき、外面ぐわいめんより聲こゑの美うらはしき親鳥おやどりの歌うたふ聲こゑを聞きかしめると同どう様に、一時いちじ大

本もとの經綸けいりんも、雛鳥ひなどりを暗くらき箱はこに入いれて、外そとより親鳥おやどりのうるはしき聲こゑを聞きかしむる大

神かみの御仕組おしぐみかとも思おもはれぬこともないのである。ゆゑに吾人ごじんは大逆境だいきやくきやうに陷おちつて暗

黒こくの中うちにある思おもひをするとき、かならず前途ぜんとの光明くわうみやうを認みとめ得えるのは、まつたく神

の尊たふとき御仁慈ごじんじであると思おもふ。いかなる苦痛くつうも、困窮こんきうも、勇いさんで神明しんめいの聖慮せいりよ仁惠じんけいの

鞭しもととして甘受かんじゆするときは、神靈しんれいここに活氣くわつき凜々りんりんとして吾われにきたり、苦痛くつうも困窮こんきうも、

却かへつて神かみの恩寵おんちゆうとなつてしまふ。たとへば籠かごの中なかに入いれられてゐる鳥とりでも、平氣へいきで

歌うたつてゐる鳥とりは、最早もはや【とら】はれてゐるのではない。暢氣のんきに天國てんごく樂園らくえんに春はるを迎むか

へたやうなものである。これに反はんして、天地てんちを自由じゆうに翱翔かうしやうする百鳥ひやくてうも、日々にちにちの餌えじ

食きに苦くるしみ、かつ敵てきの襲來しふらいにたいして寸時すんじも油斷ゆだんすることができないのは、籠かごの

鳥とりの、人ひとに飼かはれて食しょくを求もとむるの心勞しんらうなく、敵てきの襲來しふらいに備そなふる苦心くしんなきは、苦中くちゆう

樂あり樂中苦ありてふ苦樂不二の眞理である。牢獄の囚人の苦痛に比して、自由人の却て是に數倍せる苦痛あるも、みな執着心の強きに因るのである。名譽に、財産に、地位情欲等に執着して、修羅の争鬪に日夜鎬をけづる人間の境遇も、神の公平なる眼より視たまへば、實に憐れなものである。

神諭にも、

「人は心の持ちやう一つで、その日からどんな苦しいことでも、喜び勇んで暮される」

と示されたのは、じつに至言であると思ふ。一點の心燈暗ければ、天地萬有一切暗く、心天明けく眞如の日月輝く時は、宇宙萬有一切清明である。吾人は平素心天の光明に照らされ、行くとして歌あらざるはない。吾人の心魂神恩を謳ふとき、萬物みな謳ひ、あたかも天國淨土の思ひに楽しむ。ア、天國は近づけり、悔い改めよ」の聖者の教示、今さらのごとく、さながら基督の肉身に接待するがごとく、崇敬畏愛の念に堪へない。

ア、末世澆季の今日、オレゴン星座より現はれきたるキリストは、今や何處に

出現せむとするか。その再誕再臨の聖地は、はたして何處に定められしぞ。左右の掌指の節々に、釘の跡を印し、背部にオレゴン星座の移寫的印點を有して降誕したる救世主の出現して、衆生に安息を與ふる日は、はたして何れの日ぞ。金剛石も汚穢の身體を有する蟻蛙の頭部より出づることあり、金銀いかに尊貴なりとて、糞尿の植物を肥すに及ばむや。高山の頂かならずしも良材なく、溪間低く暗きところ、かへつて良材を産するものである。平地軟土に成長したる大樹、またいかに合抱長直なりと雖も、少しの風に撓みやすく、折れやすし。宇宙間の萬物一として苦闘に依らずして、尊貴の位置に進むものはない。しかるに、天地經綸の大司宰たる天職を天地に負へる人間にして、決して例外たることを得ない。ア、人生における、すべての美はしきもの、尊きものは、千辛萬苦、至善のために苦闘して得なくてはならぬと思ふ。

神諭に曰ふ、

『苦勞の塊の花の咲く大本であるぞよ、苦勞なしには眞正の花は咲かぬから、苦勞いたす程、尊いことはないぞよ云々』

吾人はこの神諭を拜する毎に、國祖が永年の御艱苦に省み、慙愧の情に堪へないのである。

ここに八王大神常世彦命は、多年の宿望成就して、天津神の命を受け、盤古大神鹽長彦を奉じて、地上神界の總統神と仰ぎ、自らは八王大神として、地上の神人を指揮することになった。しかるに聖地エルサレムは、新に自己の神政を布くについては、種々の困難なる事情あるを慮り、常世姫をして龍宮城の主管者として守らしめ、聖地を捨て、アアメニヤに神都を遷し、天下の諸神人を率ゐて世を治めむとした。一方常世城を守る大鷹別は、大自在天大國彦を奉じて總統神となし、アアメニヤの神都にたいして反抗を試み、またもや地上の神界は混亂に混亂をかさね、邪神の横行はなはだしく、已むを得ず、諾册二神の自轉倒島に降りたまひて、海月如す漂へる國を修理固成せむとして、國生み、島生み、神生みの神業を始めたまひし神代の物語は、本巻によつて明らかになることと思ふ。

神ながら宇宙の外に身をおきて

日に夜に月ぬ物語する

王仁は、第一巻において天地剖判の章に致り、金や銀の棒が表現して云々と述べたるにたいし、人を馬鹿にすると云つて、コンナ馬鹿な説は聞くだけの価値なきものだと、一笑に附して顧みないのみならず、他人の研究までも中止せしめむとしてゐる立派な學者があるさうだ。

神諭にも、

「圖抜けた學者でない」と、途中の鼻高には、神の申す事はお氣に入らぬぞよ云々と示されてある。宇宙間の森羅萬象、一として形體を具ふるもの、金、銀、銅、鐵等の鑛物を包含せないものはない。人間を初め、動植物と雖ども、剛體すなはち玉留魂の守護によらぬはない。金銀等の金氣の大徳によつて現出したる宇宙間の森羅萬象は、悉皆、鑛物玉留魂の神力を保持してゐるのであるから、金の棒や銀の棒から天地萬物が發生し凝固したと言つたとて、別に非科學的でも何でもない。神の言には俗人のごとき七面倒くさきことは仰せられぬ。すべて抽象的、表

徴的よつてきで、一二言いちにじふにて宇宙うちうの眞理しんりを漏もらされるものである。

それで神諭しんゆにも、

『一いちを聞きいて十百じふひやくを悟さとる身魂みたまでないと、誠まことの神かみの御用ごようは勤つとまらぬぞよ』

と示しめされてある。半可通はんかつうてき的學がく者の鈍才どんさい淺智せんちをもつて、無限むげん絶ぜつ對たい無む始し無む終しうの神界しんかいの事柄ことがらにたいして喃々なんなんするは、竿さをを以もつて蒼空あそぞらの星ほしを「がらち」落おとさむとする様やうなものである。洪大無限こうだいむげんの神かみの力ちからに比くらべては、蟲しらみの眉毛まゆげに巢すくふ蟲むし、その蟲むしのまた眉まゆ毛げに巢すくふ蟲むし、そのまた蟲むしの眉毛まゆげに巢すくふ蟲むしの放ひつた糞くそに生わいた蟲むしが、またその放ひつた糞くそに生わいた蟲むしの、またその蟲むしの放ひつた糞くそに生わいた蟲むしの糞くその中なかの蟲むしよりも、小ちひさいものである。

ソナ比較ひかくにもならぬ蟲むしの分際ぶんざいとして、洪大無邊こうだいむへんの神界しんかいの大經綸けいりんが判わかつて耐たまるものでない。それでも人間にんげんは萬物ばんぶつの長ちやうであつて、天地經綸てんちけいりんの司宰しさい者しやだとは、どこで勘定かんぢやうが合あふであらうか。されど、神かみの容よう器きたるべき活動くわつどうりやく力を有いうする萬物ばんぶつの長ちやうたる人間にんげんが、宇宙うちうかん間に絶無ぜつむとは神かみは仰あふせられぬのは、いはゆる神界しんかいにては無形むけいに視み、無聲むせいに聽きき、無算むさんに數かぞへたまふてふ、道みちの大原たいげんの聖句せいぐに由よるのであらうと思おもふ。

蚤蝨蚊のみしらみにもひとしき人ひとの身みの

神かみの爲なすわざ争あらそひ得えめや

大正十一年一月三日 舊十年十二月六日

第一篇 動天驚地どうてんきやうち

第一章 榮華の夢えいぐわゆめ「二〇一」

國こく祖そ國こく治ち立り命のみこと、豐とよく國こくに姫ひめ命のみこと、大おほ八や洲しま彦ひこ命のみこと、其そ他た聖せい地ちにおけるさう錚さう々さうたるかみ神かみ人がみは、
全ぜん部ぶ各かく地ちにたい隱いんされてより、八やつ王わう大だい神じん常とこ世よ彦ひこのせい聖せい地ちにおけるしん神かみ務むはまつたくはめ破め滅つ
され、天てん地ちのかみ神かみをしん信しんずるものなく、聖せい地ちのきう宮きう殿でんはまつたくはめ破め滅つ
譯わけ的てきにちひ小ちひさみやきみや宮みやをかん橄らん欖ざん山さんのち頂ちやう上じやうにけん建けん設せつし、ただ一いち年ねんにいつ一いつ回くわいのさい祭さい典てんをお行こなふのみみであ

つた。神殿の柱は風雨に曝され、自然の荒廢に任せ屋根は漏り、蜘蛛の巢は四方に引廻し、至聖至嚴なるべき神殿は、つひに野鼠の棲處となつて了つたのである。一方龍宮城の三重の金殿は、その最下層の間は常世姫の遊樂の場所と定められた。されど顯國の御玉を祭りたる最高段に上ることは、いかに常世彦といへども、神威に畏れて敢行することが出来なかつた。

常世彦、常世姫二神の間に常治彦が生れた。つぎに玉春姫といふ妹神が生れた。父母兩神はこれを掌中の玉として愛育してゐた。愛兒常治彦は長ずるにおよんで前頭部に牛のごとき角が二本生えた。神々はこれを常治彦といはず鬼治彦と密かに綽名してゐた。聖地の八王大神にして、かくのごとく律法を無視し、神を瀆し、放縱不軌の神政をおこなひ、惡逆日々増長して、聖地は晝夜の區別なく奇怪なることのみ續出した。『上の爲す所、下これに倣ふ』の諺のごとく、各山各地の八王八頭は、邪鬼、惡狐、惡龍の靈に憑依されて神命を無視し、暴逆無道の神政を行ふにいたつた。聖地はすでに神靈を宮殿より分離し、橄欖山に形ばかりの神殿を建てたるに倣ひ、各地の八王八頭もその宮殿より國魂を分離して、山上また

は溪間に形ばかりの神殿を造り、祭祀の道を怠つた。

天上には三個の太陽一度に現はれ、月また中天、東天、西天に一度に三個の月球現はるるにいたつた。しかして太陽の色は、一は赤く、一は青赤く、一は青白く、月また青く赤く白く、おのおの色を異にしてゐた。天上の星は間斷なく、東西南北に大音響を立てて飛び散り、巨大なる彗星は、一は東天より、一は南天より、一は西天より現はれ、三個は地の上空に合して衝突し、火花を散らすこと大花火のごとくであつた。八王大神はじめ八王八頭はこの光景を見て、頑迷不靈の國祖國治立命退隱ありてより、天の大神は大に歡びたまひ、太陽はかくのごとく三體現はれ、月また三體現はるるは、天下泰平の瑞祥なりとして、各自に喜び勇んだ。

また彗星の衝突して地上に火花を落下したるは、天の三體の大神、盤古大神の神政を祝したまふ瑞祥なりと謳つて、ますます和光同塵的神政を遂行した。

春の花は秋に咲き、秋咲く花は春に咲き、夏大雪降り、冬は蒸し暑く、氣候は全く變換した。大地の主腦神たる國祖國治立命の精靈の脱出したる天地は、日夜

に大變調をきたし、妖氣は天に漲り、青葉は黒く、あるひは茶褐色となり、紅き花は黒く咲き、白き花は青く咲き、斯かる宇宙の大變調を見て、八王大神以下の神々は、少しも國祖大神の御威靈なきがために、斯く天地の不順不祥を來したりとは夢にも知らず、至善、至美、至樂の神政成就の先驅の象徴として、この光景を祝賀したのである。すべての神々は神業を放擲し、晝夜の區別なく踊り狂ひ廻つた。

霧は天地六合を罩めて、次第に太陽は光を曇らし、月また出でざること數年におよんだ。この間かの圓満なる太陽の形を見ることがなく、晝夜の區別はほとんどつかなくつた。されど地上の神人は、その暗黒に苦しむほどでもなかつた。あたかも大地は朧月夜のごとき光景である。

八王大神はわが宮殿の奥に當り、怪しき聲のしきりに聞ゆるに驚き、急ぎわが居間を出で走り行き見れば、こはそもいかに、常治彦は妹を引捕へ、その腕を「むしり、血の流るるまま、長き舌をだして美味さうに喰つてゐる。

常世彦は大に驚き、長刀を引抜き常治彦を目かけて、

「わが子の仇敵、思ひ知れよ」

と言ひつつ眞向上段より斬りつくるその途端、常治彦の姿も、妹の姿も白雲となつて消え失せ、ただわが頭上に「げらげら」と笑ふ聲がするのみであつた。怪しみて奥殿くまなく探せども、何の異變もなかつた。ただ怪しきは、長三角形の率塔婆のごときもの五六本、常世彦の前にツンツンと音を立て、目鼻口のみムケムケさせながら、上下、前後、左右より常世彦に突つかかつてきた。

常世彦は、長三角形の尖端に面部その他の全體を突刺された。これ全く神明を無視し、神殿を檜欒山に移したるがため、大神の激怒に觸れたるならむと、檜欒山に驅上り、ほとんど朽果てたる神殿の前に、息も絶えだえになつてその罪を謝した。たちまち神殿鳴動して無数の金色の鳩現はれ、常世彦の頭上目がけて幾十回ともなく、鋭利な嘴に啄んだ。常世彦は鮮血瀧のごとく、漸く正氣に復した。見れば身はエルサレムの大宮殿の中に、寢汗を瀑布のごとく流して夢を見てゐたのである。常世彦は、この恐ろしき夢より醒めて、少しは前非を悔い、聖地の從臣に命じて檜欒山の神殿を改造せしめた。また各山各地の八王にたいして、神

殿でんを新あらたに建築けんちくし、大神おほかみの神慮しんりよを和なごめ奉たてまつることを傳達でんたつしたりける。

(大正一・一・四 舊大正一〇・一二・七 外山豊二録)

第二章 松竹梅〔二〇二〕

八王大神常世彦やつわうだいじんとこよひこは表面盤古大神へうめんばんこだいじんを奉戴ほうたいし、神政總攬しんせいそうらんの權けんを握にぎつてゐた。されど温厚篤實をんこうとくじつにして威風備あふうそなはり、かつ至誠至實しせいしじつの盤古大神ばんこだいじんの奥殿おくでんに坐ましますは、なんとなく氣きがねであつた。

そこで八王大神やつわうだいじんは盤古大神ばんこだいじんにたいし敬遠主義けいゑんしゆぎを取とることになり、エデンの園そのに宮殿きうでんを造つくり、これに轉居てんきよを乞こひ、神務神政しんむしんせいのことに關くわんしては表面指揮へうめんしきを仰あふぐことにした。されど八王大神やつわうだいじんとしては、もはや盤古大神ばんこだいじん夫婦ふうふは眼中がんちゆうになかりしのみならず、却かへつて迷惑めいわくに感かんじたくらゐである。盤古大神ばんこだいじんは常世彦とこよひこの心中しんちゆうを洞察どうさつし、何なに事ごとも見みざる、言いはざる、聞きかざるの三猿主義さんゑんしゆぎを取とつてゐた。

橄欖山の頂きに新に建てられたる神殿に奉齋すべき大神の神璽を、盤古大神に下附されむことを奉願するため、八王大神は常治彦を遣はして、エデンの宮殿に到ることを命じた。常治彦は額の角を恥ぢて、この使者を峻拒した。八王大神はやむを得ず涙を流して常治彦の心情を察知し、あまり厳しく追求せなかつた。ここに常世姫とはかり、妹神玉春姫を使神とし、春日姫、八島姫を従へエデンの城にいたり、盤古大神に神璽の下附を奉願せしめたのである。このエデンの園は種々の麗しき花咲き亂れ、四季ともに果實みのり、東北西に青垣山を繞らし、寒風に曝さるることなく、南方の陽氣をうけ、實に四時相應の地とも稱すべき安樂郷である。南には廣きエデンの大河東南より流れきたり、西北に洋々として流れ去る、いかなる惡鬼邪神もこの樂園のみは侵すことが出来ない安全地帯であつた。盤古大神部下の神々は、この樂郷に晝夜の區別なく天地の殊恩を樂しみつつあつた。

あるとき盤古大神の宮殿の奥の間の床下より、床をおしあげ突き抜き、ふとき筍が二本生えだした。見るみるうちに諸所に筍は床を持ちあげ、瞬くうちに棟を突きぬき、屋内屋上に枝葉を生じほとんど竹藪と化してしまつた。盤古大神はこ

の光景をみて國祖國治立命の怨靈の祟りならむとし、大に怒り、長刀を引抜き、大竹を片つ端より切りすて門戸に立てた。これが今の世に至るまで正月の門に削ぎ竹を飾る濫觴となつた。

玉春姫は八王大神の命により、神璽の下附を乞はむと侍神に伴はれ奥殿に進むをりしも、盤古大神が奥殿に簇生したる諸竹を切り放ちゐたる際なれば、進みかねて、この光景を見入つた。この竹は大江山の鬼武彦の仕業であつた。八頭八尾の大蛇も、この時のみは鬼武彦の權威に辟易して、何の妨害も復讐もすることが出来なかつた。八島姫は忽然として姿が消ゆると見るや、奥殿には十抱へもあらむかと思ふばかりの常磐の松が俄に生えた。これがため盤古大神の居室はすつかり塞がつた。盤古大神は大に怒り、これかならず妖怪變化の仕業ならむと、云ふより大鋸を取りだし、侍神に命じ枝を伐り幹を伐り、暫くにしてこれを取り除けた。しかしてこの切り放した根無し松を門戸に飾り、妖怪退治の記念として立てておいた。ゆゑに太古は正月松の内は一本松を立てて、艮の金神以下の惡魔退治の記念として門松を立てたのである。それが中古にいたり二本立てることになつ

た。このとき春日姫は幾抱へとも知れぬ梅の木となり、エデンの城一ぱいに枝を
瞬くうちに張り、傘のごとき花を咲かせた。園内は一株の梅にて塞がるばかり
であつた。盤古大神はまたもや鉞、鋸等の道具を以つて、神々に命じ枝葉を切ら
しめ、終に幹までも切り捨てさせた。盤古大神は、大地の良に引退せられし國祖
の怨靈の祟りとなし、調伏のために又もや梅の枝を立てて武勇を誇つた。後世年
の始めに松竹梅を伐り、砂盛をして門戸に飾るはこれより始まつたのである。
玉春姫はこの奇怪なる出来事に膽を潰し、茫然として空ゆく雲を眺めつつあり
しが、つひに過つて庭前の深き井戸に顛落した。盤古大神の長子鹽光彦は、これ
を見るより丸裸體となり井戸に飛び入り、玉春姫を漸くにして救ひあげた。これ
より鹽光彦と玉春姫との間に怪しき絲が搦まれた。
盤古大神は神靈を玉箱に奉安し、玉春姫に下げ渡し、聖地エルサレムに歸らし
めた。八島姫、春日姫は何處よりともなく現はれきたり、玉春姫に依然として扈
従してゐた。鹽光彦は、姫のエデンの大河を船に乗りて渡りゆく姿を打ちながめ、
矢も楯もたまらなくなつた。盤古男神のとどむる聲も空吹く風と聞き流し、たち

まち大蛇と身を變じ、河を横ぎり南岸に着いた。ここに再び麗しき男神となり、聖地エルサレムを指して玉春姫のあとを追ひかけた。この神璽は空虚であつた。何ゆゑか盤古大神の熱心なる祈禱も寸效なく、いかにしても神璽の鎮まらなかつたのは奇怪のいたりである。しかるにエデンの大河を渡るや、この神璽の玉箱は俄に重量加はり數十柱の神々が汗を垂らして輿に乗せ捧持して歸つた。

(大正一一・一・四 舊大正一〇・一二・七 加藤明子録)

第三章 臭黄の鼻〔二〇三〕

いよいよ橄欖山の神殿には、エデンの園より捧持し参りたる神璽を恭しく鎮祭された。この神殿は隔日に鳴動するのが例となつた。これを日毎轟きの宮と云ふ。この神璽は誠の神の御靈ではなくして、八頭八尾の悪龍の靈であつた。これより聖地エルサレム宮殿は、日夜に怪事のみ續發し暗雲につつまれた。八

王大神常世彦はやや良心に省みるところあつて、竊に國祖大神の神靈を他知れず鎮祭し、晝夜その罪を謝しつつあつた。大神の怒りやや解けたりけむ、久振りにて東天に太陽のおぼるげなる御影を見ることを得た。随つて月の影が昇りそめた。八王大神は夜ひそかに庭園に出で、月神に向つて感謝の涙にくれた。されどその本守護神は惡靈の憑依せる副守護神のために根底より改心することは出来なかつた。

玉春姫は鹽光彦と手を携へ、父母兩親の目をくぐりて、エデンの大河をわたり、エデンの樂園にいたり、園の東北隅の枝葉繁茂せる大樹の下にひそかに暮してゐた。盤古大神は鹽光彦の影を失ひしに驚き、晝夜裸身をなし、斷食をおこなひ、天地の神明を祈つた時しも、園の東北に當つて紫の雲たち昇り、雲中に鹽光彦ほか一柱の女神の姿を見た。盤古大神はただちに從者に命じ、その方面を隈なく捜さしめた。鹽光彦、玉春姫は、神々らの近づく足音に驚き、もつとも茂れる木の枝高く登つて姿を隠した。この木は麗しき木の實あまた實つて、いつまで上つてゐても食物には充分であつた。神々らは園内隈なく搜索した。されど二人の姿は

何日なんにち経たつても見み當あたらなかつた。盤古大神ばんこだいじんはこれを聞きいて大おほいに悲かなしんだ。しかし
て自みづから園内えんないを捜さがし廻まはつた。

枝葉しえうの茂しげつた果樹くわじゆの片隅かたすみより一々いちいち仰あふぎ見みつつあつた。樹上じゆじやうの鹽光彦しほみつひこは父ちちの樹下じゆか
に來きたることを夢ゆめにも知しらず、平氣へいきになつて大地だいちにむかつて、木この葉はの薄うすき所ところより
臀しりひ引ひきまくりて、穢きたなき物ものを落おとした。盤古大神ばんこだいじんは怪あやしき物音ものおとと仰あふむ向むくとたんに、臭くさ
き物ものは鼻はなと口くちの上うへに落おちてきた。驚おどろいて聲こゑを立て侍者じしやを呼よんだ。されど一柱ひとばしらも近ちか
くには侍者じしやの影かげは見みえなかつた。やむを得えず細ほそき溪水たにみづに下おりて洗あらひ落おとし、ふたた
び上うへを眺ながむれば、豈あにはか計からむや、天人てんにんにも見みまがふばかりの美女びぢよを擁ようし、樹上じゆじやうにわ
が子こ鹽光彦しほみつひこがとまつてゐた。盤古大神ばんこだいじんは大おほいに怒いかり、はやくこの木きを下くだれと叫さけんだ。
二人ふたりは相擁あひようし父ちちの聲こゑはすこしも耳みみに入いらない様子やうすであつた。盤古大神ばんこだいじんは聲こゑを嚙からし
て呼よんだ。されど樹上じゆじやうの二人ふたりの耳みみには、どうしても入はいらない。如何いかんとならば、こ
の木きの果物くだものを食くふときは、眼めは疎うとく、耳みみ遠とほくなるからである。ゆゑにこの木きを耳みみ
無なしの木きと云いふ。その實みは目無めなしの實みといふ。今いまの世よに「ありのみ」といひ、梨なし
の實みといふのはこれより轉訛てんくわしたものである。

盤古大神は宮殿に馳せ歸り、神々を集めこの木に驅け上らしめ、無理に二人を引摺りおろし、殿内に連れ歸つた。見れば二柱とも目うすく耳はすつかり聾者となつてゐたのである。ここに鹽長姫は二人のこの姿を見て大に憐れみ且つ嘆き、庭先に咲き亂れたる匂ひ麗しき草花を折りきたりて、二人の髪の毛に插した。これより二人の耳は聞えるやうになつた。ゆゑにこの花を菊の花と名づけた。これが後世頭に花簪を插す濫觴である。

一方聖地エルサレムにおいては、玉春姫の何時となく踪跡を晦したるに驚き、兩親は部下の神人らをして、山の尾、河の瀬、海の果まで残る隈なく捜さしめた。されど何の便りもなかつた。常世彦はひそかに國祖の神靈に祈り、夢になりとも愛兒の行方を知させたまへと祈願しつつあつた。ある夜の夢に何處ともなく「エデンの園」といふ聲が聞えた。八王大神は直にエデンの宮殿に致り、盤古大神に願ひ、エデンの園を隈なく搜索せむことを使者をして乞はしめた。盤古大神は信書を認め、使者をして持ち歸らしめた。常世彦は恭しく押しいただきこれを披見して、かつ喜びかつ驚きぬ。

(大正一一・一・四 舊大正一〇・一二・七 吉見清子録)

第四章 奇縁萬状〔二〇四〕

盤古大神の信書の趣きは、

「わが長子鹽光彦は貴下の娘玉春姫の愛に溺れ、もはや膠漆不離の間となり、いかに理義を説き諭すといへども、戀に上下の隔てなしとかや、吾々としては之をいかんともすること能はず、願はくは貴下の娘玉春姫をつかはされたし」と云ふのであつた。

常世彦は外ならぬ盤古大神の要求といひ、かつ娘の立身なりとして常世姫と謀り、これを承諾することとなつた。その代償として、

「わが長子常治彦に、貴下の御娘鹽治姫を妻として與へ給はむことを」と懇請した。

盤古大神は妻の鹽長姫と謀り、鹽治姫を一間に招いて、

「八王大神の長子常治彦の妻たるべし」

と嚴命した。鹽治姫は卒倒せむばかりに驚き呆れ、ただ目をギロつかせて父母兩親の顔を視守るのみ。口はひきつけて一言も發すること能はず、兩眼よりは瀧のごとき涙が滴るのであつた。盤古大神夫妻は、最愛なる娘のこの様子を見て、胸に釘、鎚を打たるる思ひであつた。

八王大神の請求は、日に日に急を加へた。

「萬一貴下にして鹽治姫を下し給はずば、わが最愛の娘玉春姫を一時も早く、聖地に歸させたまへ」

と進退ならぬ強談判である。鹽治姫は七日七夜泣き叫んで、つひには聲も得上げなくなつた。一方常治彦は、深き大なる冠を被りて角を覆ひ、エデンの大河を渡り、四五の侍者を隨へ、盤古大神の返事の煮え切らぬのに業を煮やし、自ら直接談判せむと進み入つた。

このとき鹽治姫は、父母兩親の強要に堪まりかね、門内より脱出し、いづこに

か身を匿さむとして河邊に馳せ着いた。このとき常治彦は、鹽治姫に河邊にて都合よく出會した。されど竄れはてたる姫の姿に誤られ、他の者と思つてエデン城に進み入つた。

常治彦はただちに盤古大神夫妻に面會を求め、鹽治姫をわが妻に下したまはむことを懇請した。この時エデンの宮殿内は、姫の姿の見えざるに驚き、數多の侍者は右往左往に廣き園内隈なく搜索の眞最中である。常治彦はこの光景を見て、
「われ自ら鬼のごとく、角の生じたる身を隠し來りたるを以て、姫はわれを嫌ひ、姿をかくし、あまたの侍者は、われを打ち殺さむとして、かくのごとく騒げるならむ。永居は恐れあり、一先づ聖地に立ち歸り、あまたの神軍を率ゐてエデンの宮殿を攻め滅さむ」
と心中深く意を決し、勃然として踵をかへし、宮殿を後にエデンの河邊に歸つて來た。

河邊に來てみれば、あまたの神人は河の兩岸に立騒いでゐる。

「何事なりや」

と訊ねて見た。神人は口を揃へて、

「ただいま盤古大神の姫御子鹽治姫、河中に投身したまひ、その御姿さへも見えざれば、吾らは如何にもして救ひまゐらせむと騒いでゐるのだ」

と答へる。

急報によつて盤古大神は、あまたの神人を随へ河邊に走り着き、河をながめて號泣した。鹽光彦、玉春姫も後を追つて、その場に現はれた。そこには兄神の常治彦が、河をながめて茫然と立つてゐる。玉春姫は、

「兄上」

と聲をかけた。常治彦は妹の聲に驚き振返つて、

「おう、玉春姫か、われと共に聖地に歸れ」

と言ふより早く、姫を小脇に拘へ、河中へザンブと飛び込んだまま、その姿は見えなくなつた。

ア、この三柱の神はどうなつたであらうか。

鹽光彦は最愛の妻を失ひ、茫然自失、天を仰いで、その不遇を歎くをりしも、

忽然として白雲その前に来るよと見るまに、入水せし玉春姫は、莞爾として立ち現はれ、固く命の手を握り、宮殿に勇ましげに導き歸つた。

盤古大神夫婦も、この光景をみて大いに喜び、宮殿に立歸り、天地の神明に感謝したのである。ア、今現はれたる玉春姫は、はたして何者であらうか。

聖地エルサレムの宮殿においては、八王大神常世彦は、常治彦の歸りの遅きに缺伸しながら、大門の前に出た。前方よりは數多の神人に送られ、常治彦は鹽治姫の手を携へて、さも睦じ氣に、莞爾として歸つて來た。ア、この二神は、何神の化身であらうか。

(大正一一・一・四 舊大正一〇・一二・七 外山豊二録)

(序文) 第四章 昭和一〇・三・二九 於吉野丸船室 王仁校正)

第五章 盲龜の浮木(二〇五)

エデンの河中に投身したる鹽治姫は水中をくぐり、下流の淺瀬に着いた。ここに一つの巨大なる木の株が横たはつてゐた。姫は天の祐けとその大木の株に取りつき、息を休めつつあつた。今まで木の株と思ひしに、見るみる馬のごとき首が現はれ、つぎに手足が現はれた。株はすつかり大きな龜に化してしまつた。

姫はその龜の背に乗り、上流を眺めると、飄箏を括つたやうに二人の神がぶくぶくと頭を上げて流れて來た。よくよく見れば、玉春姫および常治彦である。思はず大聲をあげて二人に聲をかけた。二人は喜んでその龜に取りついた。ここに三柱は大龜の背にまたがり、龜の行くままにまかせて、エデンの大河を晝夜の區別もなく下る。

河の兩岸は壁のごとく岩石屹立して、寄り着くことが出來ぬ。やや下方に白き洲が見えた。三柱は龜の行くままに任しておく、龜はその洲に向つてのたのたと這ひ上つた。ここに數多の神人は祭とみえて、河邊に出で酒を飲み、歌ひ舞ひ、種々の木石を打ち叩き、拍子をとつて、面白さうに騒いでゐた。

龜は容赦なく、あまたの神人の群がるなかを三柱を載せたまま進んで行つた。

三柱の着物は日に晒されていつの間にか乾ききつてゐた。酒に酔潰れたる數多の神人は、この光景を見て一齊に手を打ちたたき、ウロー、ウローと叫ぶのである。ここを突破して北へ北へと進んで行くと、またそこにも稍上級の神らしき群がしきりに酒に酔ひ、手を打つて騒いでゐる。龜はその中を遠慮會釋もなくのたのたと進んで行つた。このとき宴席の上座の方より金冠を着けたる身體骨格衆に優れる大將らしき神が現はれて來た。そして龜の前に立塞がつた。龜は何事かこの神に向つて囁くやうに見えた。

北には巍峨たる青山を繞らし、東西に鶴の兩翼を擴げたるごとく山脈が延長し、あたかも蹄鐵形になつた地勢である。そして南に大河を控へ、種々の麗しき花は咲きみだれ、珍らしき果物は木々の梢に實つてゐた。ちやうどエデンの園にすこしも違はないやうな樂郷である。こここの統一者は南天王と稱へ、數多の神人らより國祖のごとく尊敬されてゐた。いづれの神々も木の實を喰ひ、清泉を飲み、天然に發生する山芋などを嗜食し、衣食住の苦痛をすこしも感じないあたかも天國淨土のやうであつた。南天王は實は大道別であつた。この地を顯恩郷と稱へられ

てある。南天王はあまたの神人を集めて、龜上の珍客を天下泰平の瑞祥として歡待せしめた。三柱は思ひがけなき神人らの優遇に感謝し、つひには果實にて造りたる珍しき酒に酔ひ、面白き歌を謠ひはじめた。この地の神人らはいづれも頭の比較的横に長く丈短く、ちやうど蟹のやうな顔をした者ばかりである。そこへ三柱神の現はれたのはあたかも塵芥場に鶴の下りたやうな光景であつた。

これらの神人は南天王に對し、天上より降りきたれる神人として畏敬尊信服従を第一の義務としてゐる。しかるに南天王の神品骨格その他の衆に秀でたるに引き換へ、この地の神々は比較的背低く、身體矮小にして容貌醜惡なるため、南天王の妃とすべき神なきに、神人は擧つて心痛してゐた際である。そこへ天女のごとき二柱の女神と一柱の男神の現はれたるを見て、又もや天津御空より降りきたれる優秀の神と残らず信じてしまつた。そこで神人は相談の上、南天王に奏上して彼の二神を王の妃となし、一柱の男神は頭部に大なる角發生しあれば、まつたく誠の神と信じてゐたり。それゆゑ二柱の女神に對して、この神の妻または妃たることを少しでも顧慮する者がなかつた。

常治彦、鹽治姫、玉春姫の三柱は、この郷の神人らの言靈に通じないのを幸ひにして、種々と自由自在に話することができた。そこへ數多の神人は集まつて涕泣拜跪し、輿を舁ぎきたり、無理に常治彦に搭乗を手眞似をもつて勧めた。常治彦は吾を非常に歡待するものと思ひ、心中喜悅の情をあらはし、二つ三つ頷づきながら機嫌よく輿の中に入つた。神人らはその輿を寄つて集つて舁きあげた。この顯恩郷は昔から角の生えたる神が降臨して、天變地妖を防ぎ、萬年の壽命を守るといふ傳説が傳はつてゐた。そこへ南天王の誕生の祝日にあたつて、萬年の齡を保つてふ龜に乗り、河上より下りきたれるは、あたかも天上より降りきたれる神人に相違なしと心より喜び勇んだ。

神輿はダンダンと舁がれて東北の山の谷を越え、立岩の上に神輿もるとも安置された。この岩は圓柱を立てたるごとく長圓形の棒岩である。そして神人らは遠く退き拍手を打つて、ウロー、ウローと一齊に讚美しかつ喜び、涙を流して拜禮した。

常治彦は輿の中より様子怪しと少しく扉を開け見れば、吾が乗れる輿は天をも

貫ぬくばかり長き棒岩の上に据ゑられてある。出るにも出られず、下りるにも下りられず、途方にくれ聲をかぎり、「オーイ、オーイ」と叫んだ。あまたの神人はその聲を聞きつけ「オーイ、オーイ」と、呼ばはりながら喜び、初めて天の神の聲を聞きたりと、勇み狂ひ踊り廻つた。常治彦は、

「輿を下せ」

と大聲に呼ばはつた。岩の下遠くこの光景を見て立ち騒いでゐた神人らは、一齊に芝生の上に腰をおろし、棒岩の神輿をうち眺めた。常治彦はこれを見てもどかしがり、

「違ふ違ふ」

といふた。違ふという言葉は、顯恩郷にては臀部をまくり握拳で尻を打つと云ふことである。神人らは棒岩の方へ向つて一齊に赤黒い尻をまくり、一二三つと、拳を固めて自分の尻を打ちたたいた。それがために、臀部は青く變色したものにさへあつた。命はこれを見て、

「コラコラ」

といった。コラコラと云ふことは、この郷にては尻をまくつたまま左右に廻るこ
とである。棒岩の上にある命は業を煮やし、

「コラコラ違ふ」

といった。コラコラと二つ重ねていふ時は、頭を下にし足を上にして手で歩き廻
ることである。神人は天の尊き神の御命令を固く尊信し、先を争うて倒さまに
なり、前後左右に這ひ廻り、廻り損なつて谷に落ち傷つく者も出来た。中には、

「こいつは眞の神でない、吾々を苦しむる悪神である」

とつぶやく者もあつた。何處よりもなく傍の山の中腹に鹽治姫、玉春姫の女神
の姿が忽然として現はれた。白き尾のやうな領巾を前後左右に振つてみた。この
郷の神人はその白き領巾を振るとともに、雪崩をうつてもとの平地に歸つてし
まつた。常治彦は横槌の柄に乗せられた龜のやうに手足をもがき、

「鹽治姫ヤーイ」

「玉春姫ヤーイ」

と聲をかぎりに叫び、つひにはその聲さへ出なくなつてしまつた。

第六章 南天王〔二〇六〕

顯恩郷の大王神なる南天王は、その實大道別の分魂で、日の出神であつた。そして三柱を迎え來つた大龜は琴平別の化神である。

神人らは二柱の女神の婉麗にして神格の高尙なるに敬服し、南天王に請ふて、二女神を妃にせむことを協議した。神人らの中より蟹若といふ者、推されて代表となり、南天王の宮殿に參向し、衆議一致の請願をなした。南天王は思ふところありて表面これを許した。これより顯恩郷は高貴なる三柱の神人によりて統一さるることとなり、南方より年々攻めきたる惡神の襲來も恐るるに足らずと異口同音に祝しあうた。

今まで鹽治姫と見えしはその實は春日姫であつた。春日姫には高倉白狐が始終

守護してゐた。また玉春姫と見えしは實際は八島姫であつて、白狐の旭が守護してゐた。

今まで國祖の御神政中は、大江山の鬼武彦以下正義の神人らは、敵に對するその神術をよほど遠慮へてゐたのであるが、もはや國祖は御退隱となり、いかなる權謀術數に出づるとも、今日は累を國祖に及ぼし奉る憂ひはなくなつた。そこで聖地の神人らは國祖大神の御無念を深く察し、わが身はたとへ天津神より天則違反に問はるるとも、至恩ある大神の敵にたいして、極力反抗をこころみ、復讐をなさむとするの念慮は、片時の間も忘れなかつた。

二柱の女神は、南天王の宮殿深く仕へることとなつた。蟹若は大に喜んで神人にその旨を傳へ、一同は手を拍つて祝杯を擧げた。

奥殿には南天王と春日姫、八島姫の三柱鼎坐して昔語りに夜を徹した。春日姫は思はず、大道別の日の出神に面會し、うれしさのあまり涙を湛へ、且つ俄に鷹住別のことを思ひ出し、憂ひに沈む面容であつた。南天王は、

「貴下は何ゆゑにかくの如く、この目出度き宿縁の喜びにたいし鬱ぎたまふや」

と言つた。春日姫はわづかに聲を出して、

「たかす……」

と云つた。南天王はその聲に春日姫の意を悟り、ただちに手を拍つて、

「清彦、清彦」

と呼んだ、聲に應じて、一間より現はれ出でた神格の優れた侍神がある。見れば、春日姫の常世城を去りしより、夢寐にも忘れぬ戀人の鷹住別であつた。春日姫は思はず飛付かむとしたが他の神人の前を憚りて、動く心を吾から制止し、恥づかしげに俯いて啜り泣きに泣く。

南天王は粹をきかして、鷹住別、春日姫二人を別殿に去らしめた。あとに残つた八島姫は南天王と二柱互に黙然として顔見合せ、うれし涙に暮れてゐた。八島姫は思ひきつたやうに、

「南高山において、貴下に生命を救はれ、それより貴下を慕ふ心、切りに起りて、つひには父母を棄て、御後を慕ひまつりしも、今は昔の夢となりたれども、一たん思ひつめたる最初の念は、今に消えやらず、妾が心の切なさを推量ありたし」

と前後もかまはず、南天王の膝に顔をあて、泣き叫ぶのであつた。

南天王は八島姫の心情を憫れみ、いかにもして彼女を慰めむと思へども、一た
ん國祖より命ぜられたる大使命あれば、たとへ國祖は隠退し給ふとも、妄りに妻
帯するは大神の神慮に反するものである。されどこの八島姫の心情を推知しては、
さすが道義堅固なる南天王も、骨身も碎くるごとき切なき思ひをしたのである。

八島姫は漸くにして顔をあげ、

「呀、妾は年老いたる父母二神を棄て、山海の高恩を忘却し、かつ忠節無比の玉
純彦を途中に追返したるは、今になつて思へば、實に妾が一生の不覺であつた。

たとへ臣下の身分たりとも、彼がごとき忠良なる玉純彦をして、せめては吾夫に
もつことを得ば、いかに幸ひならむかと夜ごとに思ひ浮ぶれども、かれ玉純彦は
常世の國にて、一たび姿を見たるきり、今は何れにあるや、その居所も判然せず。
また父の消息も聞かまほしけれど、今となりては如何とも詮術なく、日夜悲歎の
涙に暮るるのみ」

と、流石女人の愚癡をこぼし、瀧のごとく涙を流して、その場に倒れ伏しにけり。

このとき南天王は何思ひけむ、つと座をたちて手を拍ち、

『芳彦、芳彦』

と呼ばはつた。芳彦ははたして如何なる神人であらうか。

（大正一・一・五 舊大正一〇・一二・八 松村仙造録）

第七章 三拍子〔二〇七〕

南天王の招きに應じ、

『おう』

と答へて現はれ出でたる眉目清秀の美男は、南高山の從者なりし玉純彦であつた。

玉純彦は南天王に一禮し、その右側に座を占めた。南天王は八島姫にむかひ、

『貴下にいま珍しきものを御目にかけむ。顔を上げられよ』

と言葉せはしく言つた。

八島姫は、その聲に勵まされ、ふと顔を上ぐるとたんに美はしき男神の、わが前に端坐せるを見た。どこやら見覚えありと思ひながら、つらつらその顔を見つめてゐた。玉純彦はただちに下座に直り、

「姫君様」

と慇懃に低頭していった。

八島姫はあわてたるごとき聲色にて、

「いや、汝は玉純彦に非ずや、如何にして此所に來りしや」

などと再會の嬉しさにたたみかけて、いろいろと問ひかけたのである。南天王は

満面笑を含みながら、

「われは今日ただ今、姫の心中を承はりたる上は、今となつて否みたまふまじ。

われ唯今月下氷人となつて、玉純彦とともに夫婦となり、幾久しく同棲して、神

業に参加せられよ」

と言ひ渡した。玉純彦の顔にも、八島姫の顔にも、さつと紅葉が散つた。

このとき次の間より鷹住別、春日姫は銚子を携へ、悠々として二人の前に現は

れ、夫婦の杯を取らしめむとした。八島姫は何思ひけむ、

「暫く待たせたまへ」
と言つて、また涙に打沈んだ。

南天王は、

「姫の心中たしかに御察し申す。されど御父大島別はおひおひ年老いたまひ、姫の所在を探し求めてわれに送れよ、との度々の依頼なれど、われは時未だ到らずとして、今日までこれを貴下に告げざりしが、この信書を披見されよ」

と側の器より封書を取り出し、八島姫に渡した。八島姫は不審の面色にて、その信書を手に取り、つくづく眺むれば、擬ふ方なき父の手蹟であつた。姫の胸はあたかも早鐘を撞くごとくであつた。轟く胸を押鎮め、靜かに封押切つて眺むれば、左のごとき信文が墨黒々と書き記されてあつた。その文面に言ふ、

「吾は南高山の八王として、國祖大神の信任を辱なうし來りしに、盤古大神の治しめす神政となりたれども、仁慈に厚き盤古大神は、われを元のごとく八王に任じたまふ。されど宰相神なる八王大神常世彦の、何時變心して吾職を奪ひ、かつ

吾らを滅ぼさむも計りがたし。汝八島姫、一日も早く本城に立歸り、忠良にしてかつ勇猛なる侍者玉純彦と夫婦になり、わが後を繼げよ。ア、されど玉純彦は、常世城の會議以後汝の後を追ひ、世界各地を探ね廻り、今にその行方を知らず。幸ひに國祖大神の保護によつて、玉純彦と再會せば、その時こそは、日の出神の媒介にて夫婦となり、すみやかに南高山に歸城し、父の心を慰めよ」

との信文であつた。八島姫はこれを見るより顔をますます紅らめながら、感謝の涙とともに、その信書を南天王の手に恭しく奉還した。

ここに二神は結婚の式を擧げた。八島姫は心のうちに、萬一かかる目出度き嬉しき結婚の席に、ただ一柱の老ひたる父の望み給ふことあらば、如何に喜びたまはむと、またもや俯むいて思案に暮るるもののやうであつた。

ここに南天王は玉純彦にむかひ、

「汝は今ここに父坐さざれば、われは媒酌兼父となつて、この式に列すべし」といつた。そして、

「八島姫は父在せば、今ここに對面せしむべし」

と言ひ放つた。八島姫は一圓合點がゆかず、はるばる遠き南高山に在すわが父に、神變不思議の神力あればとて、今この場にすみやかに現はれまさむ理由なし。訝かしや、と俯きたる頭を上ぐる其のとたん、不思議や、わが父の大島別、南天王よりも上座に控へてゐた。ここに顯恩郷は、親子夫婦の對面の時ならぬ喜悅の花に満ち、一同聲をそろへて神恩を感謝し、その天恩の厚きに感激した。

今まではこの郷を川北郷といひしを、この度の事ありてより顯恩郷と名づけられた。さうして玉純彦は、父と共に南高山に夜ひそかに遁れて歸り、南高山の八王となつた。そして顯恩郷の宮殿には、白狐旭が依然として八島姫に變じて、南天王の側近く仕へた。南天王はこの郷の數多の神人らを殿内に召集し、大王の位をわが子鷹住別に譲ることを宣示した。神人は一も二もなく手を拍つて慶賀し、鷹住別を大王と仰いだ。

そして前の南天王たる日の出神は夜陰に紛れて、何處ともなく神界經綸の神業に出でてしまつた。神人らは夜中に前南天王の天に復らせ給ひしものと信じて少しも疑はなかつた。神人らは前大王の天上に復りたまひしを惜しみ、山野河海の

珍物を岩上に列べ、これを奉齋し、感謝の聲を放ち、果物の酒に酔ひ、またもや手を拍ち、歌ひ舞ひ騒ぎ立た。鷹住別はここに王冠を戴き、春日姫とともに棒岩の傍にいたり祝宴を張つた。神人らは二神に向つて代るがはる杯を奉つた。

棒岩の上に安置されたる常治彦は、扉をひらき下を見下せば、わがもつとも愛する鹽治姫が、鷹住別と睦まじさうに夫婦となつて、神人らの祝杯を受けてゐるやうに見えたので、常治彦は齒噛みをなして口惜しがり、輿のなかを前後左右に暴れ廻つた。すこしの風にもぐらつくこの棒岩は、常治彦の雄叫びによつて非常に動揺せるとたん、輿もろとも谷間に眞逆様に顛落してしまつた。

この結果は、如何なるであらうか。

(大正一一・一・五 舊大正一〇・一二・八 外山豊二録)

棒岩ぼういはの上に安あん置ちされたる輿こしは、轟然がうぜんたる響ひびきとともに深ふかき谷間たにまに落おちて、メチヤメチヤに破こはれてしまつた。

幸かうか不幸ふかうか、日ひごろ氣きにかかりし常治彦とこはるひこの角つのは根本ねもとよりゴクリと抜ぬけてしまつた。その後あとより血ちは滾こん々として流ながれ、目めも鼻はなも口くちはおるか全身血ぜんしんちに染そまつて、今いままでの青鬼あをおには角つののなき赤鬼あかおにと一變いっぺんした。赤鬼あかおには執念しふねんぶかく鷹住別たかすみわけ、春日姫かすがひめの酒宴しゅえんの席せきに韋駄天いだてん走りに走はしりよりて、あらゆる石いしを手てにし、死物狂しにものぐるひになつて神人かみがみを目めがけて投なげつけた。如何いかがはしけむ、常治彦とこはるひこの身體しんたいは石いしを握にぎり振り上げたまま石地いしぢぎ藏うのごとく強直きやうちよくし、ビクとも出で來きぬ様やうになつてしまつた。鷹住別たかすみわけの南天王なんてんわうは春日かすがひ姫めと共にこの光景くわうけいを見て、面白おもしろ可笑かしく酒さけを飲のみ舌鼓したつづみを打うつてをつた。蟹面かにづらをなせる萬よろずの神人かみがみらはその姿すがたを見て、神かみの威徳いとくにより石いしと化くわせしものと思おもひ、やたらに廣短ひろみじかき顔かほを竝ならべて拜跪はいきした。その可笑かしさをに二人ふたりは堪たまりかねて噴ふきだした。このとき頭部とうぶに二股ふたまたの角つの二本生はえたる神かみ、天上てんじやうより雲くもに乘のりてその前まへに降くだりきたり、萬よろずの神人かみがみらはまたもやこの瑞祥ずいしやうに歡喜くわんきした。いま降くだつた神かみは大江山たいかうざんの鬼武彦おにたけひこの化けし身んであつた。

鬼武彦は南天王夫妻にむかひ一禮し、つぎに石地藏のごとく眞赤になりし常治彦の身體を鷲づかみとなし、中天に向つて抛り上げられた。赤き肉體は空中を幾百回となく縦にブリブリと廻りながら、エデンの大河にザンブと落ち込んだ。忽ちさしもの大河も血の河と變じてしまつた。

やうやく氣がついた常治彦は南岸に這ひ上り、眞裸體のまま頭をかかへて、何處ともなく一目散に山々の谷間を目がけて走り入つた。

一方顯恩郷の神人らは、新に降りし神の、先の神に對して非常に力強きを或は喜び或は恐れつつ、合掌して何事か唱へつつ、つひに一齊に立つて手を打ちウロウロと叫んで踊り廻る。鬼武彦は南天王、春日姫とともに悠々として宮殿に立歸つた。しばらくあつて宮殿の外部に非常な騒がしき聲が聞えてきた。以前より何處ともなく姿を隠しゐたる奇態な大龜が忽然として現はれた。神人らは太平の世の瑞祥としておのおの果實の酒を持ちきたり、その大龜に吞ませた。大龜は喜んで何斗とも限りなく呑み干し、つひには立上つて踊りだした、その様子の面白さ、神人らは思はず笑ひ轉げた鬨の聲であつた。

南天王は何事ならむと宮殿を立出で前庭を眺むればこの光景である。何れの神人らも残らず酒に酔倒れ、地上を這ひ廻つてゐるうちに、大龜のみ立つて踊つてゐた。その面白さに南天王も思はず笑ひ轉げた途端に腰を抜いた。神人らは何れも横這ひになつて、巨大なる蟹の姿に變つてゐた。

鬼武彦は奥殿より走りきたり、この様子を見て大に驚き、天に向つて神言を奏上した。たちまち南天王の體は元のごとく起立することを得た。蟹の様になつてしまつた神人らは、またもやムクムクと立上り、矮小なる體となつて四方八方より廣短い顔をもたげ、龜さん龜さん、ウローウローと龜を中央に据ゑて踊り狂うた。龜は酒に酔ふたもののごとく、またもやバツタリ地に伏して四這ひとなつた。

二股の角を現はした鬼武彦はヒラリとその背に跨つた。そして東北の山の谷間目蒐けて進みゆき、先に常治彦の輿の据ゑられし棒岩の上に、あたかも猿の木に登るがごとき勢にて登りつめ、その上に安坐し、鏡のごとき目を光らせながら石像と化してしまつた。神人らは喜んでその下に集まり拜跪し祈願を籠めた。この大龜はまたもや谷間に姿を隠して了つた。それより顯恩郷はこの石像を神と崇拜

し、南天王夫妻は日を定めて参拜し、神勅を蒙りて總ての事を決する事となつた。これより顯恩郷は天地の大變動勃發して大洪水となるまで、實に安全地帯であつた。そして石像に化した鬼武彦の本體は、この郷を去つて聖地エルサレムに歸らむとする常治彦の後を追うた。

常治彦は漸くにして命からがら聖地エルサレムに月を重ねて歸省した。しかるに聖地には常治彦儼然として、宮殿に盤古大神の娘鹽治姫と共に父の神務を輔佐しつつあつた。角を折られし常治彦は聖地において如何なる運命に遭遇するであらうか。

(大正一一・一・五 舊大正一〇・一二・八 近藤貞二録)

第九章 鶴の温泉(二〇九)

話は少しく後へ戻つて、常治彦は棒岩の上より顛落し、角を折られ鮮血淋漓と

して、全身あたかも緋の衣を纏ひしごとくなつたが、鬼武彦のためにエデンの大
河に投ぜられ、その機に血はすつかり洗ひ去られ、蒼白き顔をしながら、ひよ
ひよると南方の谿間指して走り入つた。折しも山と山との深き谷間に、幾千羽と
もなく、鶴の群が翱翔してゐるのを見た。

喘ぎ喘ぎ近寄つて見れば、非常に美はしき一柱の女性を中心に、あまたの鶴が
舞ひ遊んでゐた。見れば透つた湯壺があつて、湯が滾々と湧出してゐた。その天
然の湯槽に、女性は出沒して身體の傷所を治療してゐた。よくよく見れば、自
分が念頭に離れぬ鹽治姫である。いま顯恩郷にて南天王と共に睦まじく酒宴の席に
列してゐたはずの鹽治姫は、いかにしてかかる山間に來りをれるやと、不審の眉
をひそめ茫然としてその顔を見入つた。

姫は常治彦を手招きし、

「貴下もこの湯に入りたまへ」

と合圖した。常治彦は一も二もなく眞赤裸となつて、この湯槽に飛入つた。不
思議にも前頭部の傷はすつかり癒えて角もなく、實に神格の立派な神となつた。鹽

治姫は大に喜びし面色にて、ここに夫婦の契を結んだ。

上空には相變らず幾千羽とも知れぬ鶴が、右往左往に翱翔してみた。常治彦は自分の願望成就せることを喜び、暫くこの温泉を中心に養生をつづけ、日を追うて身體は爽快にむかひ、二人はいよいよ手を携へて聖地に歸らむことを約した。たちまち上空より鶴一羽下りきたりて、常治彦の前額部を長き嘴にて二回ばかり啄いて穴を穿つた。常治彦は驚いて、その傷口に兩手を當て、痛さを堪へて俯いてみた。痛さはますます激烈になつてきた。

ふたたび出立を見合せ、湯槽に飛入り養生することとなつた。傷口は日に日に癒えてきた。されどその後かゆさを非常に感じた。常治彦は一生懸命に掻きむしつた。いくら掻いても、かゆさは止まぬ。つひには、痛く、かゆく、手のつけやうがなくなつてきた。たちまち筍のやうな角がまたもや兩方に發生した。鹽治姫はこの角の目を追うて延長するを見て、以前とは打つて變つて喜んだ。しかしてその角を撫で廻し、あるひは舐めなどして、口を極めてその角の立派なるを賞讃した。常治彦も、今までこの角を恥づかしく思つてみたのを、最愛の妻に賞讃さ

れて得意氣になり、角の日に立派に成長するのを待つ氣になつた。

山を越え谷を辿り、漸くにして聖地に歸ることを得た。聖地エルサレムの正門には、小島別白髪を背後に垂れ、薄き髯を胸先に垂らし、田依彦その他の神人を隨へ、儼然として守つてゐた。このとき常治彦は、鹽治姫の手を携へ、欣然としてその門を入らむとするとき、小島別は、

「曲者、しばらく待て」

と呼びとめた。二人は大に怒り、

「われはエデンの宮殿にいたり、それより種々の艱難辛苦を嘗め、漸くここに歸りきたれるを從臣の分際としてこれを歓迎せざるのみか、われに對して無禮の雜言、汝は今日かぎり門衛の守護職を免じ、根の國に退去せしむべし」

と聲高に呼ばはつた。小島別、田依彦は躍氣となつて顔面に青筋を立て、棒千切をもつて、

「妖怪變化の曲者、思ひ知れよ」

と打つてかかつた。常治彦の頭部の角はおひおひと成長し、二股になつてゐた。

常治彦は笑つて小島別の打ち込む棍棒を角の尖端にてあしらひながら、一方には田依彦、一方には小島別の腹部を目がけて、角の尖端にてグサツと突き破つた。

二人は腸を抉り出されそこに倒れ、

萬事休矣

の聲をしぼつた。數多の神人はこの聲に驚いて馳集まり、この體を見て大いに怒り、常治彦に四方八方より、長刀、あるひは棍棒その他種々の兵器をもつて斬りつけ、擲りつけむとした。命の角はだんだんと鋭く尖り、かつ見るみる延長した。聖地はあたかも修羅の巷である。

常世彦は侍者の急報により、常治彦、鹽治姫とともに、この場に現はれた。このとき殿内に在りし常治彦も、頭角おひおひ發達して、いまここに現はれたる第二の常治彦に分厘の差なくなつてゐた。同じ姿の鹽治姫の二柱と、また同じ姿の常治彦が二柱できた勘定である。

前後の常治彦、鹽治姫は互に入り亂れて、その眞偽の判別はわからなくなつてしまつた。されど少しく異なる點は、その衣服の模様であつた。常世彦は、この場

の光景を放任し、前の常治彦、鹽治姫の手を携へて、奥殿に深く姿を没した。

(大正一一・一・六 舊大正一〇・一二・九 外山豊二録)

第二篇 中軸移動

第一〇章 奇々怪々〔二一〇〕

八王大神常世彦は、この不思議な光景を見て、二人を伴ひ、奥殿に急ぎ入りて、心私かに國祖の神靈に祈願し、怪事續出の難を救はれむことを祈願した。

奥の一間よりサヤサヤと、衣摺の音聞えて現はれ出でたる巨大の神は、大八洲彦命であつた。常世彦は夢に夢見る心地して、物をも言はずジツとその顔を見上

げた。大八洲彦命と見えしは、大江山の鬼武彦であつた。常世彦は二度驚愕して、狐に魅まれしごとき顔付しながら、又もやその顔を熟視した。見るみる神の額に角が現はれた。そしてその容貌身長は、わが子の常治彦に分厘の差なきまでに變つてしまつた。表の門前に當つては神人らの騒ぎの聲ますます頻りに聞える。八王大神は五里霧中に彷徨ひながら、この場を棄てて表玄關に立現れた。ここにも常治彦が神人らを相手に闘つてゐる。同時に三柱の常治彦が現はれて、角を以て牛の様に何れも四這になり、突き合を始めた。つひには常世彦を目がけて三方より突き迫つた。

このとき龍宮城の方にあたりて、一大爆發の聲が聞ゆるとともに、黒煙濛々と立上り、大火災となつた。常世姫は、命カラガラ火中よりのがれ出で、エルサレムに走りきたりて、常世彦に救援を請はむとした。このとき常世彦は、牛のごとく變化したる三柱の神に三方より突き捲られ、逃路に迷ひ苦しむ最中であつた。奥殿の方にあたりて、またもや大爆音が聞えた。見れば殿内は全部黒煙につつまれ、宮殿の四方より一時に火焰立昇り、瞬くうちに各種の建物は全部烏有に歸

した。

龍宮城の三重の金殿は俄に鳴動し、天に向つて際限もなく延長し雲に達し、その尖端は左右に分れ、黄金色の太き柱は東西に際限もなく延長し、満天に黄金の橋を架け渡したかのごとくに變つてしまつた。あたかも三重の金殿は丁字形に變化してしまつた。その丁字形の黄金橋を天の浮橋といふ。この橋より俄に白雲濛々として顯現れ、満天を白くつつんだ。たちまち牡丹のごとき雪は、頻りに降りきたり、見るまに聖地は雪に包まれてしまつた。常世彦は火と雪とに攻められ、あまたの神人と共に、辛うじてアーメニヤの野にむかつて遁走しはじめた。

一方エデンの宮殿は、轟然たる音響とともに、大地震動して巨城を滅茶々に打倒し、樹木は根本より倒れ、火災は四方より起こり、黒煙に包まれ、咫尺を辨ぜざるの慘状に陥つた。時しも雪にはかに降りきたり、道を塞ぎ、神人は自由に行動することができなくなつた。

盤古大神はいち早くエデンの大河に船を泛べ、南岸に渡り、雪を掻分けながら些少の従者とともに、期せずして、アーメニヤの野にむかつて命カラガラ遁走し

た。降雪ますます烈しく、つひに一行は雪に埋もれてしまった。

このとき太陽にはかに光熱を増し、四方山の積雪は一時に氷解し、地上はあ
たかも泥の海となつてしまつた。盤古大神はじめその他の神人らは、傍の木に辛
うじて攀上つた。あまたの蛇その他の蟲族は先を争つて木に上り難を避けた。前
方の木の枝にあたつて泣き叫ぶ聲が聞えた。見れば、龍宮城の司宰神なる常世姫
が、木の上であまたの毒蛇に全身を巻かれて苦しむ聲であつた。八王大神はその
木の中腹にまたもやあまたの蛇に全身を巻付けられ、顔色蒼白となり、息も絶え
絶えの光景である。

このとき東南の方より、天地六合も一度に崩壊せむばかりの大音響をたて、黒
雲を起し、驀地に進みきたる大蛇があつた。これは天足彦、胞場姫の靈より現は
れた八頭八尾の大蛇であつた。大蛇は巨大なる尾を前後左右に打振り打振り暴れ
廻つた。この震動に水は追々と減じ、大地の表面を露はすやうになつた。すべて
の蛇は先を争つて樹上より落下し、各自土中にその影を潜めた。このため常世彦、
常世姫をはじめ、鹽長彦は漸くにして危難を免れ、神人らと共に、アーメニヤに

無事到着することを得た。

鹽長彦は、エデンの宮殿を棄てて遁走するとき、驚愕のあまり、妻の鹽長姫を伴ふことを忘れてゐた。しかるに豈はからむや、アーメニヤの野には立派なる宮殿が建てられ、そのうちにわが妻の鹽長姫および鹽光彦は欣然として、あまたの神人と共に、鹽長彦一行を迎へたのは、奇中の奇とも言ふべきである。吁、かくの如く到るところに異變怪事の續發するは、大地の主宰神たる國祖を退隱せしめ、地上の重鎮を失ひたるがために、たとへ日月は天上に輝くといへども、靈界はあたかも常暗の慘状を誘起し、邪神惡鬼の跋扈跳梁に便ならしめたためである。これより地上の神界は、日に月に妖怪五月蠅のごとく群がり起り、收拾すべからざる常暗の世を現出した。

(大正一一・一・六 舊大正一〇・一二・九 松村仙造録)

盤古大神以下の神人は、忽然として現はれたるアームニヤの宮殿を、萬古不易の安住所と定め、各居室を定め、八百萬神を配置し神政を行ふこととなつた。天より降つたか、地から湧いたか、知らぬまに莊嚴無比の宮殿をはじめ數多の建築物が建てられてゐた。神人らは盤古の神政を祝するため遠近の山に分けいり、種々の珍しき花木を切り來つて、各これをかたげながら宮殿を中心として面白き歌を謠ひ、酒に酔ひながら踊り狂うてゐた。

時に中空にあたり何神の聲ともなく、

「アームニヤ、アームニヤ」

と叫ぶ聲しきりに聞えた。神人らは期せずして聲する方を仰ぎ見た。幾百千とも限りなき神軍は武裝を整へ、雲に乗り中空に整列して、その中央には國祖國治立尊の神姿現はれ、采配を振つて神軍を指揮しつゝあつた。神人らはその威嚴に打たれてたちまち地上に平伏した。何とはなしに身體一面に濕氣を感じ、驚きのあまり酒の酔も醒め、ぶるぶると地震の孫のやうに、一齊に震ひだした。このとき又もや天上より、

「盲神ども、足もとを見よ」

と頭からたたきつけるやうな聲で云ひ放つた。いづれも驚いて足もとを見ると、
またもや泥田の中に盤古大神はじめ、八百萬の神人らは泥まみれになつて、のた
くつてゐた。ここはアーメニヤの宮殿と、何れも思うて宮殿の方を一齊に見やれ
ば、今まで立派な宮殿と見えしは蜃氣樓であつた。見るみる天上に宮殿は舞ひ上
り、自分の姿までも空中に舞ひ上つてしまつた。八王大神はじめ、重なる神將
は残らず蜃氣樓とともに天上に昇つてゐるのが見える。残された神人らは性を失
ひ驚きのあまり、四方八方に泥田の中をうろつき始めた。そのじつ盤古大神も八
王大神も天上に影が映つてゐるのみで、依然として深き泥田に乳の邊りまで落ち
入り、身動きもならず苦しんでゐた。されど數多の神人らは、盤古大神以下の神
將残らず天上に昇りしものと思ひ、右往左往に泥田を走り廻り、盤古大神、八王
大神以下の神將を泥足で踏みつけ、一齊に、

「オイオイ」

と泣くばかりである。

このとき、ウラル山の方面より黒雲を捲き起し、空中を照らし進み来る八頭八尾の大蛇が現はれた。今まで國治立尊以下の神將、天の一方に現はれりしその姿はいつしか消え失せ、八頭八尾の大蛇の火を噴きつつ、満天墨を流したごとく黒雲をもつて包んでしまつた。

(大正一一・一・六 舊大正一〇・一二・九 加藤明子録)

第一章 不食不飲(一一二)

折しもウラルの山嵐、地上を吹きまくり、終には空前絶後の大旋風となつた。あらゆる樹木を吹き倒し、泥田に落ちたる神々を、木の葉のごとく土諸共、中天に捲きあげ、天上をぐるぐると住吉踊りの人形のやうに釣りまはした。そのため何れの神人も、鶴のやうに首が残らず長くなつて了つた。丁度、空中に幾百千とも限りなき首吊りが出来たやうなものである。首吊りでなくて、残らず鶴首にな

つてしまつた。

風がやむとともに、一齊に雨霰のごとく地上に落下した。腕を折り足を挫き腰をぬかし、にはかに半死半生の者ばかりとなつてしまつた。そのとき何處ともなく、

「八岐の大蛇、八岐の大蛇」

といふ聲が聞えた。八百萬の腰抜け奴、不具者はぶるぶる唇をふるはせながら、

「八岐の大蛇様、助けたまへ」

と叫んだ。

たちまち天上より美はしき八柱の男女の神人が、神人らの前に降つて來た。さうしてその中の一番大將と思しき男神は、耳まで裂けた紅い口を開いて、

「吾はウラル山を守護する八頭八尾の大蛇である。もはや今日は國祖國治立尊は、わが神力に恐れて根の國に退隱し、その他の神人はいづれも底の國に落ち行き、無限の責苦に遭へり。この世界はもはや吾の自由なり。汝らこのアーメニヤの地に來つて神都を開き、神政を樹立せむと思はば、まづ第一に宮殿を造り、わが靈

魂を鎮め、朝夕禮拜を怠るなかれ。また盤古大神をはじめ八王大神その他の神人は、ただ今より百日の斷水斷食を勵むべし』
と言ふかと思れば、八柱の神人の姿は煙のごとく消え、ただ空中を運行する音のみ聞えてきた。その音も次第々々に薄らいでウラル山目蒐けて歸つたやうな氣持がした。

不思議にも、大負傷に悩んでゐた神人は手も足も腰も舊のごとくに全快し、ただ首のみは長くなつたままである。神人らは先を争つて、ウラル山方面さして斷食をなさむと驅登つた。

ウラル山の中腹には、非常な廣い平地がある。この平地は南向きになつて、非常に香りのよい甘さうな果物が枝もたわむばかりになつてゐて、平地に垂れてゐる。

あまたの神人は、やつと此處まで登つてきたが、咽喉にはかに渴きだし、腹は非常に空いてきた。されど大蛇の嚴命によつて、咽喉から手が出るほど食ひたくても食ふことが出来なかつた。ちやうど餓鬼が河の端に立つて、その水を飲む

ことが出来ぬやうな苦痛である。

盤古大神はじめ八王大神は頻りに口なめしをなし、長舌を出し、この果物をみて羨望の念にかられてゐた。神人は咽喉は焼けるほど渴き、腹は空いて板のごとくなつてゐる矢先、目の前にぶらついたこの美味を食ひたくて堪らず、見るより見ぬが薬と、いづれも目を閉ぶつて見ぬやうに努めてゐた。さうすると何處ともなしに百雷の一時に落下したやうな音響がきこえ、地響がして身體を二三尺も空中に放りあげた。吃驚して思はず目を開くと、目の前、口の前に甘さうな果物が【ぶら】ついてゐる。エ、儘の皮よと四五の従者は、そのまま大きな果物を驚づかみにして【かぶ】りはじめた。何とも言へぬ甘さである。濡れぬうちこそ露をも厭へ、毒を食うたら皿までねぶれといふ自棄糞氣味になつて、四五人の神人は舌鼓をうつて猫のやうに咽喉を【ごろごろ】鳴らしながら、甘さうに食ひ始めた。傍の神人はその音を聞いて矢も楯もたまらなくなつて、目を閉ぢた上、兩方の指で耳を塞いで、顔をしかめて辛抱してゐた。風が吹くと、果物の枝が揺れて、その甘さうな果物は口のあたりに觸つてくる。思はず知らず舌がでる。こいつは堪

らぬとまた口を閉いだ。ちやうど見【ざる】、聞か【ざる】、言は【ざる】の庚申さまの眷屬が澤山に現はれた。四五の自棄糞になつた神人は腹一杯布袋のやうになつて息までも苦しく、肩で息をするやうになつた。腹の中は得心したが、まだ舌が得心せぬので、無理無體に舌の要求をかなへてやつた。もはや舌も得心をしたが、肝腎の眼玉が得心せぬので無理矢理に取つては食ひ取つては食ひ、大地にドンドンと四肢を踏んで、詰め込まうとした。そのとたんに臍の括約筋がバラになつて、果物の赤子が澤山生れた。アイタ、アイタ、と腹を抱へて顰み面しながら大地に七轉八倒した。他の神人はまた目をあけてこの光景を見、あり合ふ草の蔓をとつて腹の皮を一處へ集め、これを臍の眞中で堅く括り、五柱の神人を神命違反の大罪人として棒にかつぎ、その果物の樹の枝にかけた。

この時、またもや天上から聲がした。

腹が空いたら、神命違反者を食へ

と言つた。神人は果物は食はれぬが、この五柱の神人でも食つて見たいやうな気がした。このとき早玉彦といふ八王大神の侍者は、天の聲のする方にむかひ、

『斷食する吾々、この者を食うても神意に反せずや』
と尋ねて見た。

さうすると、また空中に聲あつて、

『鬼になりたき者はこれを食へ』

と言つた。いづれの神人も自分の悪は分らず、各自に至善至美の立派な者と自信してゐるので、流石の邪神も鬼になることだけは閉口したとみえ、一柱もこれを食はうとする者もなかつた。さうかうする中に、斷食の行も五十日を経過した。何れの神人も聲さへも立てる勇氣は失せ、目は潤み、耳はガンガン早鐘をつくがごとくになり、ちやうど蛭に鹽したやうにただ地上に横たはつて、蟲の息にピコピコと身體の一部を動揺させてみた。このとき、東北の空より、六面八臂の鬼神、あまたの赤、青、黒などの顔をした幕下の鬼を引き連れ、この場にむかつて嬉しさうに降つてくるのを見た。

あゝこの結果は如何なるであらうか。

(大正一一・一・六 舊大正一〇・一二・九 櫻井重雄録)

第一三章 神憑の段（二一三）

東北の天より降りきたれる六面八臂の鬼神は、あまたの部下を引率し、盤古大神以下の飢餓に迫りて身體瘦衰へ、あたかも葱を煮たやうにへトへトになつて、身動きも自由ならぬこの場に現はれ、鐵棒をもつて疲れ惱める神々を突くやら打つやら、無殘にも亂暴狼藉のかぎりを盡し、連木で味噌でもするやうな目に遇はしてゐる。盤古大神以下の神人は、抵抗力も防禦力も絶無となつてしまつて、九死一生、危機一髪の悲境に陥る折しも、またもや忽然として暴風吹き起り、岩石の雨は邪鬼の群にむかつて打ちつけた。あまたの鬼どもは周章狼狽しながら、雨と降りくる岩石に打たれて、頭を割り、腰骨を挫き、脚を折り、這々の態にて、負傷した鬼どもを各自小脇に抱へながら、東北の空さして雲を霞と逃げ失せた。しかるに不思議なことには、盤古大神部下の神人は一柱も負傷するものがなかつた。何れも顔を見合して、眼前の奇怪千萬な光景に呆れるばかりであつた。

このとき、一陣の風サツと音して吹き來たるよと見るまに、大地に平臥して苦

悶せし盤古大神も常世彦、常世姫も俄に顔色紅を呈し、元氣は頓に回復し、立上つて兩手を組みながら上下左右に身體を動搖させ、躍り上つて遠近を狂氣のごとくに飛び廻つた。これは八頭八尾の大蛇と金毛九尾の悪狐の邪靈が、心身の弱り切つたところを見澄し、一度に憑依したからである。次々に他の神人も同様に元氣を回復し、手を振り足を踏み轟かせ、遠近を縦横無盡に驅廻るその有様、實に雀の群に鷹の降りたる時のごとき周章かたである。彼方にも此方にも、ウンウン、ウーウーと呻るかと思れば、ヤ、、、、ヤツヤツヤツ、カ、、、、シ、、、、ラ、、、、ヤツヤツカ、、、、シ、、、、ラ、、、、ヤツカシラヤツヲノ、ヲ、、、、、口、、、、チ、、、、、ヲロチヲロチと叫ぶのもあり、キ、、、、、キンキンキンキンモ、、、、、モウモウキユキユビ、、、、、キキキンモモウキユキユキユウビ、、、、、キンモウキユウビのキ、、、、、ツ、、、、、ネ、、、、、キツネキツネキツネキツネと叫ぶ神人もできてきた。また一方にはク、、、、、二、、、、、ト、、、、、ク、、、、、タ、、、、、チ、、、、、ノ、、、、、ミ、、、、、コ、、、、、ト、、、、、ク、、、、、ニ、、、、、ノト、、、、、コ、、、、、タ、、、、、チ、、、、、ノ、、、、、ミ、、、、、コ、、、、、ト、、、、、とどなる神人もあ

れば、ケ、ケ、ケ、ケ、ケンゾクケンゾクケ、ケ、ケ、ケ、ケンゾクケンゾクケ、ケ、ケ、ケ、マワ、マワ、マワ、マワ、ノ、ノ、ノ、ノ、ミ、ミ、ミ、ミ、コトと口走つて、両手を組み、前後左右に跳ね廻り飛び走るさま、百鬼の晝行ともいふべき状況である。常世姫は俄然立ちあがり、部下の神人たちよ、われこそは日の大神の分魂にして玉津姫大神なるぞ。このたび地の高天原をこのアーメニヤに移されしについては、世の初發より大神の經綸であつて、萬古不易の聖地と神定められたり。盤古大神夫婦は、今日よりこの方の申すことに誠心誠意服従すべきものなり。只今より常世姫の肉體は玉津姫大神の生宮なるぞ。一日も早く立派なる宮殿を造營し、神定の地に神政を行へ、ウー

ン

と呻つて天にむかひて打ち倒れた。

聖地エルサレムの天使言靈別の長子なる龍山別といふ腹黒き神人は、始終野心を包蔵してをつた。それゆゑ今回のエルサレムにおける變亂にも、自己一派のみは巧みに免れ、邪神常世彦の帷幕に參じてゐた。彼は今また、このアーメニヤにきたり、神々とともにウラル山の中腹に登つて斷食斷水の仲間に加はつてゐた。

たちまち身體震動し、顔色火のごとくなつて神憑りとなつた。彼には八頭八尾の

大蛇の眷屬、青龍魔が憑りうつり、

「ア、有難いぞよ、勿體ないぞよ、この方こそは日の大神、月の大神であるぞよ。

神人ども、頭が高い、頭が高い、大地に平伏いたせ、申し渡すべき仔細こそあれ。

今日は實に天地開闢以來の目出度き日柄であるぞよ。眼を開いてこの方を拜んだ

ならば、たちまち眼が潰れてしまふぞ。これからこの方の仰せを背いた神は、神

罰立ちどころに致ると思へよ。この方は日の大神、月の大神に間違ひないぞよ」

と怒鳴つた。その聲は百雷の一度に鳴り轟くごとくであつた。神人らは、一齊に、

ア、々、々、リ、々、々、ガ、々、々、タ、々、々、ヤ、々、々、ア、リ、ガ、タ、ヤ、々、ヤ、

と聲を震はせながら涙を流して嬉しがつた。

中空に聲あり、

「邪神に誑されなよ。今に尻の毛が一本もないやうに抜かれてしまふぞよ」

と聞えた。盤古大神は何思ひけむ、この場を逃げ去らむとするを、常世姫の神憑

は、大手を擴げて、

「ア、戀しき吾が夫よ、妾の申すことを一々聞かれよ」
と涙聲になつて抱止めた。盤古大神は袖振拂ひ、

「無禮もの」

と叱咤した。常世姫は柳眉を逆だて、

「畏くも日の大神の御分魂なるこの方にむかつて、無禮ものとは何事ぞ。汝こそは盤古大神とエラソウに申せども、この生宮のために今日神人らより崇敬さるるやうになりしを知らざるか、その方こそ無禮ものなり」

と毒づいた。ここに盤古、常世二神の格闘が始まつた。組んづ組まれつ互ひに挑み合ひ、互に上になり下になり、咆哮怒號した。あまたの神人は残らず邪神の容器となり、常世姫の肩を持ち、

「邪神の盤古盤古」

と一齊に叫びながら立上つた。ア、この結果はどうなるであらうか。

(大正一一・一・七 舊大正一〇・一二・一〇 外山豊二録)

第一四章 審神者（二一四）

このとき龍山別はたちまち神憑りして、小高き丘陵に飛び上り、眼下に神人ら
を梟鳥の圓き目玉に睨めつけながら、

「吾こそは日の大神、月の大神、國治立の大神なるぞ。ただいま常世姫に神憑り
したる玉津姫命の託宣を馬耳東風と聞きながし、剩つさへ雑言無禮を恣にしたる
盤古大神鹽長彦ははたして何者ぞ。汝は六面八臂の鬼神の魔軍に襲撃され、危急
存亡の場合を八頭八尾の大蛇の神に救はれしに非ずや。神力無邊なる八頭八尾の
大蛇の神の憑りきつたる常世彦の妻神常世姫の生宮にたいして、今の雑言聞き捨
てならず。神界の規則に照らし盤古大神はこの場かぎり神界總統者の職を去り、
その後任に八王大神を据ゑたてまつりなば、萬古不易の神政は完全無缺に樹立さ
るべし。満座の神人ども、大神の言葉を信ずるや否や、返答聞かむ」
と呶鳴りつつ物凄き目をむき出し、口を右上方につり上げ、水「ばな」を長く大
地に垂れながら、さも嚴かに宣言した。あまたの神人は審神の術を知らず、日の

大神はじめ尊き神の一度に懸らせたまひしものと信じ、頭を得上ぐるものも、一言の答辨をなすものもなかつた。盤古大神は空嘯きて満面に冷笑を湛へ、常世姫の面體を凝視し、鎮魂の姿勢を取つてゐた。

盤古大神の眼光に睨みつけられたる常世姫の神憑りは、左右の袖に顔をかくし、泣き聲をふりしぼり、

「八王大神常世彦よ。いま盤古大神には、常世の國に年古く棲める古狸の靈、憑依してこの尊き神の生宮を無禮千萬にも睨めつけをれり。神力をもつて速やかに彼を退去せしめ、貴下は盤古大神の地位に就かるべし。神勅は至正至直にして寸毫も犯すべからず、満座の神人異存あるや、返答聞かむ。かくも大神の言葉をもつて神人に宣示すれども、一言の應へなきは、汝ら諸神人は神の言葉を信ぜざるか、ただしは神を輕蔑するか。かよわき常世姫の生宮として、齒牙にかけざるごとき態度をなすは無禮のいたりなり。アーラ残念や、口惜しやな」

と云ひつつ丘陵上を前後左右に飛んだり、跳ねたり、轉んだり、その醜態は目もあてられぬ有様であつた。常世彦は、やにはに常世姫の倒れたる前に進みいで、

襟首えりくびを無雜作むざふさに猫ねこでも提ひげたやうに引ひ掴つかみて、右みぎの片腕かたうでに高たかくさしあげ、大地だいちに向むかつて骨ほねも碎くだけよとばかり投なげつけた。常世とこよひめ姫ひめはキヤツと一いっ聲せい叫さけぶと見みる間まに、邪神じゃしんの神憑かむがりにはかに止やんで、又またもや、もとの優美いっびにして温和をんわなる常世とこよひめ姫ひめと變かはつてしまつた。

かくのごとく種々しゆじゆの惡神あくがみたち、大神おほがみの御名みなを騙かたつて神人かみがみらに一度いちどにどつと憑依ひよういせしは、數十日すうじふにちの斷水だんすゐ斷食だんじきのため身體しんたい靈魂れいこんともに疲勞ひらう衰すい耄もうの極きよくに達たつし、肉體にくたいとしては殆どほとん蚤のみ一匹いつびきの力ちからさへなくなつた。その隙すきをねらつて靈力れいりよく弱よわき邪神じゃしんが憑依ひよういしたのである。すべて邪神じゃしんの憑依ひよういせむとするや、天授てんじゆの四魂しこんを弱よわらせ、肉體にくたいを衰おとろへさするをもつて憑依ひよういの第一だいいち方便ほうべんとするものである。ゆゑに神道しんたうまたは佛道ぶつたうの修業者しうげふしやなどが深山しんざん幽谷いうこくに分わけ入いり、瀧水たきみづにうたれ火食くわしよくを斷たち、あるひは斷水だんすゐの行ぎやうをなし、または百日ひやくにちの斷食だんじきなどをなすは、その最初さいしよよりすでに妖魅えうみ邪鬼じゃきにその精神せいしんを蠱惑こわくされて了しまつてゐるのである。ゆゑに神かむがかりの修養しうやうをなさむとせば、まづ第一だいいちに正食せいしよくを勵はげみ、身體しんたいを強壯きやうじやうにし、身魂しんこんともに爽快さうくわいとなりしとき、初はじめて至真ししん、至美しび、至明しめい、至直しちよくの神靈しんれいにたいし歸神きしんの修業しうげふをなし、憑依ひよういまたは降臨かうりんを乞こはねばならな

いのである。

總て神界には正神界と邪神界との二大別あるは、この物語を一ぺん讀みたる人はすでに諒解されしことならむ。されど正邪の區別は人間として如何に賢明なりといへども、これを正確に審判することは容易でない。邪神は善の假面を被り、善言美辭を連ね、あるひは一時幸福を與へ、あるひは豫言をなし、もつて審神者の心膽を蕩かし、しかして奥の手の惡事を遂行せむとするものである。また善神は概ね神格容貌優秀にして、何處ともなく權威に打たるものである。されど中には惡神の姿と變じ、あるひは惡言暴語を連發し、一時的災害を下し、かつ豫言の不適中なること屢なるものがある。これらは神界の深き御經綸の然らしむところであつて、人心小智の窺知し得べき範圍ではないのである。ゆゑに審神者たるものは、相當の知識と經驗と膽力とがもつとも必要である。かつ幾分か靈界の消息に通じてゐなければ、たうてい正確な審神者は勤まらないのである。世間の審神者先生の神術にたいしては、ほとんど合格者はないといつても過言に非ずと思ふのである。

却説、盤古大神の注意周到なる審神はよくその效を奏し、邪神はここに化の皮をむかれ、一目散にウラルの山上目蒐けて雲霞のごとく逃げ歸つた。されど一度憑依せし悪靈は全部脱却することは至難の業である。ちやうど新しき徳利に酒を盛り、その酒を残らず飲み干し空にしたその後も、なほ幾分酒の香が残存してゐるごとく、悪靈の幾部分はその体内に浸潤してゐるのである。この神憑りありしより、常世彦、常世姫、龍山別も、日を追ひ月を重ねて、ますます悪神の本性を現はし、つひには全部八頭八尾の大蛇の容器となり、神界を大混乱の暗黒界と化してしまつたのである。あゝ慎むべきは審神の研究と神憑りの修業である。

(大正一一・一・七 舊大正一〇・一二・一〇 加藤明子録)

第一五章 石搗歌〔二一五〕

盤古大神は、嚴肅なる審神に依つて、常世彦、常世姫、龍山別その他の神々の

歸^き神^{しん}的^{てき}狂^{きやう}亂^{らん}状^{じやう}態^{たい}はたちまち鎮^{ちん}靜^{せい}した。ここに常^{とこ}世^よ彦^{ひこ}以^い下^かの神^{かみ}人^{がみ}は、盤^{ばん}古^こ大^{だい}神^{しん}の天^{てん}眼^{がん}力^{りき}と、その審^さ神^{にん}の神^か術^{じゆつ}の優^{いう}秀^{しゆう}なるに心^{しん}底^{てい}より感^{かん}服^{ぷく}し、何^{なに}事^{ごと}もその後^ごは盤^{ばん}古^こ大^{だい}神^{しん}の指^し揮^きに服^{ふく}從^{じゆつ}することを決^{けつ}議^ぎした。

ここに盤^{ばん}古^こ大^{だい}神^{しん}は、ウラル山^{さん}の中^{ちゆう}腹^{ぷく}の極^{きは}めて平^{へい}坦^{たん}の地^ちを選^{えら}び、宮^{きゆう}殿^{でん}を造^{ざう}營^{えい}せむとし、大^{おほ}峽^が小^{ひを}峽^がの木^きを伐^きり、石^{いし}を搬^{はこ}びて基^き礎^そ工^{こう}事^じに着^{ちやく}手^{しゆ}した。神^{かみ}人^{がみ}らの寄^より集^{あつ}まつて勇^{いさ}ましく歌^{うた}ひながらドンドンと石^{いし}搗^つく音^{おと}は晝^{ちゆう}夜^やの區^く別^{べつ}なく、天^{てん}地^ちもたために震^{しん}動^{どう}せむず勢^{いきほひ}であつた。百^{もも}神^{がみ}の必^{ひつ}死^{して}的^{きく}活^{わつ}動^{どう}の結果^{けつ}、一^{いつ}百^{ひやく}餘^{やく}日^{じつ}にして基^き礎^そ工^{こう}事^じは全^まく終了^{しうれう}したのである。

その時^{とき}の石^{いし}搗^つの歌^{うた}は、

神^{かみ}代^よの昔^{むかし}その昔^{むかし} 常^{とこ}磐^は堅^か磐^はに世^よを護^{まも}る

國^{くに}治^は立^たの大神^{おほかみ}の 築^つき固^{かた}めたる礎^{いし}は

雨^{あめ}の朝^{あした}や風^{かぜ}の宵^{よひ} 雪^{ゆき}降^ふる空^{そら}や雨^{あめ}嵐^{あらし}

ちから嵐^{あらし}のいともろく 覆^{くつ}りたる神^{かみ}の代^よを

立直さむとこの度の
 集ひたまひし鹽長彦の
 常世の彦や常世姫
 心も赤きアーメニヤ
 光さやけき夕月夜
 高行く雲も立つ鳥も
 表とウラルに朝日子の
 造り固めて常久に
 天にまします日の御神
 影もさやかに足御代を
 風清らけく花の木は
 正しき神を松の山
 四方にたなびく春霞
 春の山姫しとやかに
 ウラルの山の神集ひ
 神の命や八王の
 常世の暗を照らさむと
 朝日も清く照りわたり
 星もきらめく天津空
 伊行き憚るウラル山
 輝きわたる祥代に
 開く神代のまつりごと
 大空傳ふ月の神
 祝ひたまふか今日の日を
 枝もたわわに實りして
 實にも目出度き千代の春
 みどりの袖を振り榮えて
 舞ひてをさむる盤古の

萬古不易の神の御代

萬古不易の神の御代

百の神人勇み立ち

神の恵に四方山の

草木も靡く目出度さよ

ア、千秋萬歳樂境の

この礎をいや固に

いや強らかに築かむと

上津岩根に搗き凝らし

下津岩根に搗き固め

ついて固めて望の夜の

月の光の雄々しさよ

ウラルの山の常久に

空に輝くアーメニヤ

野は平けく山遠く

そよ吹く風の音聞けば

ばんこばんこと響くなり

ばんこばんこと響きたる

この石つきはいや堅く

萬古不易の礎ぞ

萬古不易の礎ぞ

ヨイトサー、ヨイトサー、ヨイトサー

ヨイトサー、ヨイトサー、ヨイトサー

いよいよ基礎工事は竣工した。これより八王大神指揮の下に、神人らは四方八方に手分けをなし山の尾の上や谷の底、大木や小木を探ねつつ、本と末とは山口神に捧げて、中津御木を伐り採り、エイヤエイヤと日ごと夜ごとにウラル山の山腹めがけて運び上げるのであつた。

神人らの晝夜の丹精によつて、用材はほとんど大部分山のごとく集まつた。されど最も必要な宮殿の棟木を缺いてゐた。神人らは四方山をあさり探し求むれど、適當のものは得なかつた。ここに盤古大神の命により、龍山別は平地に祭壇を設け、もろもろの供物を獻じ、心身を清めて神勅を請ふこととなつた。以前の失敗に懲りて、盤古大神は自ら審神の席についた。龍山別には山口神、懸りたまひ教へ諭すやう、

「この棟木は、これより遙か南方にあたり、鷹鷲山といふ靈山あり。その山腹に朝は西海をかくし、夕は東海をかくす枝葉繁茂せる大樹がある。その大樹には數萬の高津神群がり棲み居れば、これを伐り採ること容易ならず。されば、吾はこれより山口神の職權をもつて、彼らを他山の大樹に轉居せしめむ。龍山別をはじ

め數多の神人は獲物を用意し、一時も早く鷹鷲山に向へ
と宣示したまま、神靈はたちまち引取つてしまつた。この神示によつて數多の神人は勇みよるこび、時をうつさず鷹鷲山に數百千の神人を引率して、荆棘を開き、谷を渡り、叢を切り拂ひ、やうやく大樹の下に達した。

樹上に在りし高津神は、先頭に立てる八頭八尾の大蛇の姿に肝を消し、山口神の命ずるままに、裏山に轉居してしまつた。この木を伐り採らむとして、神人は背つぎをなし、まづ一の枝にかけつき、つづいて數多の神人は鉞、鋸などの得物を携へ、最上部の枝より伐りはじめた。

名にし負う鷹鷲山の稀代の大木とて、容易にこの事業は捗どらなかつた。この木を伐るに殆ど三年の日子を要したりといふ。

(大正一一・一・七 舊大正一〇・一二・一〇 外山豊二録)

八王大神の命により、常世城を預かりて守護せる大鷹別は、盤古大神が美はしき宮殿を建てむとし、その用材のために苦しみ、神人らは擧つて鷹鷲山にいたり、晝夜の區別なく、その木の伐採に全力をつくしつつありて、盤古大神の身邊も、八王大神夫妻の身邊もその備への甚だ薄弱なることを間者松彦をして探知せしめ、その詳細を知るとともに、大鷹別の野心は勃然として湧いてきた。

今この際常世城を占領し、大自在天を奉じて、あらたに神政を樹立し、天下の霸權を握るといへども、盤古大神および八王大神の目下の立場として、常世城を討伐する餘力さらになく、氣息奄々としてほとんど孤城落日の悲境にあれば、叛旗を擧ぐるはこの時なりと、部下の蟹雲別、牛熊別、鬼雲別らと語らひ、さかんにその畫策に熱中してゐた。

このとき、旭、高倉の妙術に乗せられ、何時とはなく常世城に捕虜となりし鹽治姫、玉春姫は、何れもわが父に叛旗を掲ぐるものたることを感知し、いかにもして常世城を脱出し、ウラル山の兩親にこの旨を密告せむと、日夜焦慮しつつあった。

されど、用心ぶかき大鷹別は二女の身邊の警護をことさら嚴にし、且つその室の周圍をあまたの神人をして圍み守らしめ、遁れ出でむとするにも、蟻の這ひ出づる隙間もなき有様であつた。

話は元へもどつて、ウラル山の假殿にある盤古大神は、ある夜の夢に、わが娘鹽治姫は玉春姫とともに常世城にさらはれ、人質の境遇に苦しみつつつある靈夢に感じた。しかし今ウラル山にある鹽治姫、玉春姫は眞のわが子に非ず、白狐の變化なりといふ靈夢を引きつづいて見た。

明くれば、盤古大神は假殿に仕へてゐる鹽治姫、玉春姫を傍近く招き、
「汝はわが天眼通にて審査するに、全く白狐の變化なり。今すみやかにその正體をわが前に現はせ。萬一違背におよばば、汝ら二人は餘が手練の刀の鑄となさむ、覺悟せよ」

と炬火のごとき眼を怒らし、カツと睨みつけた。二女性は少しも騒がず、満面に笑をたたへ、

「貴神の天眼力にて見らるる通り、吾は聖地エルサレムの神使として長く仕へた

てまつりし白狐の高倉、旭なり。なんぢ惡神一味の暴惡を懲さむため、アーメニヤの野における奇怪といひ、また鷹鷲山における棟木の三年を経るも伐り採り得ざるは、まつたく吾ら二神の所爲なり。あゝ心地やや、あゝ面白や」

とカラカラと長き舌を出して笑ひこけた。

盤古大神は烈火のごとく憤り、腰に佩ける刀を抜くより早く、二人を目がけて發止と斬りつけた。如何なしけむ、二神の姿は煙と消えて、ただ中空に女神の愉快に笑ひ「さざめく」聲がするのみであつた。

これより、いよいよ大自在天は常世城を占領し、天下の神政を統一せむと計り、今まで聖地エルサレムを滅ぼさむとして協力したる盤古大神一派にむかつて、無名の戦端を開くこととなつた。

空には聖地龍宮城の三重の金殿は、自然に延長して天空に高く現はれ出た。丁字形の天の浮橋は金色燦然として大空を東西南北に廻轉しはじめた。

その橋の尖端よりは、得も言はれぬ美はしき金色の火光を、花火のごとく地上にむかつて放射しつゝあつた。實に莊嚴無比にして、かつ美しきこと譬ふるに物

なく、その閃光に見とれて空を見上ぐるとたんに、瑞月の身は頭部に劇痛を感じた。驚いて肉體にかへりみれば、寒風吹きすさむ高熊山の岩窟に端坐し、仰向くとたんに、岸壁の凸部に後頭部を打つてゐた。

(大正一一・一・七 舊大正一〇・一二・一〇 櫻井重雄録)

第三篇 豫言と警告

第一七章 勢力二分(二一七)

大國彦は、大鷹別以下の神々とともに常世城において、堅固なる組織のもとに神政を開始した。しかして大自在天を改名して常世神王と稱し、大鷹別を大鷹別

神かみと稱しやうし、その他たの重おもき神人かみがみに對たいして命名みことなを附ふすこととなつた。

ここに八王やつわうだいじん大神とこよひこ常世彦とこよしんわうは、常世神王とこよしんわうと類似るゐじせるわが神名しんめいを改稱かいしやうするの必要ひつえうに迫せまられ、ウラル彦ひこと改稱かいしやうし、常世姫とこよひめはウラル姫ひめと改めあらたた。そして盤古大神ばんこだいじんを盤古神ばんこしんわ王うと改稱かいしやうし、常世神王とこよしんわうにたいして對抗たいかうする事こととなつた。各山各地かくざんかくちの八王神やつわうじんは殘のこらず命みことを廢はいし、神かみと稱しやうすることとなり、八頭やつがしらは依然いぜんとして命名みことなを稱とへ、八王八頭やつわうやつがしらの名稱めいしやうを全部ぜんぶ撤廢てつばいしてしまつた。これは八頭八尾やつがしらやつをの大蛇をろちの名なと言靈上ことたまじやう間違まちがひやすきを慮おもんばかつたからである。されど數多あまたの神人かみがみは従來じゅうらいの稱呼しやうこに慣なれて、依然いぜんとして八王やつわう八頭やつがしらと稱とへてゐた。國祖御隱退こくそごいんたいの後あとは、常世神王とこよしんわうの一派いつぱと盤古神王ばんこしんわう一派いつぱは東西とうざいに分わかれ、日夜にちや權勢爭奪けんせいそうだつに餘念よねんなく、各地かくちの八王八頭やつわうやつがしらはその去就きよしうに迷まよひ、萬壽山まんじゆざん、南なん高山かうざんを除のぞくのほか、あるひは西にしにあるひは東ひがしに隨從ずゐじうして、たがひに嫉視反目しつしはんもく、紛ふん糾混亂きうこんらんはますます劇はげしくなつた。この狀況じやうきやうを蔭かげながら窺うかがひたまひし國治立大神くにはるたちのおほかみは野立彦命のだちひこのみことと變名へんめいし、木花姫このはなひめの鎮しづまります天教山てんけうざんに現あらはれたまうた。また豐國姫命とよくにひめのみことは野立姫命のだちひめのみことと變名へんめいしてヒマラヤ山さんに現あらはれ、高山彦たかやまひこをして天地てんちの律法りつぱふを遵守じゆんしゆし、天真道彦命あめのまみちひこのみこととともに天地てんちの大道だいだうを説とき、神人しんじんをあまねく教化けうくわせしめつつあつた。

また天道別命は國祖とともに天教山に現はれ、神界改造の神業について、日夜心魂を悩ましたまひつつあつた。幸にヒマラヤ山は東西兩方の神王の管下を離れ、やや獨立を保つてゐた。また萬壽山は磐樟彦、瑞穂別の確固不拔の神政により、依然として何の動搖もなく、靈鷲山の八洲彦命、大足彦とともに天下の形勢を觀望しつつあつた。

天道別命は、野立彦命の内命を奉じ青雲山に現はれ、神澄彦、吾妻彦とともに天地の大變動のきたるを豫知し、あまねく神人を教化しつつあつた。

盤古神王およびウラル彦は、常世神王の反逆的行爲をいきどほり、各山各地の神人をアーメニヤの假殿に召集し、常世城討伐の計畫を定めむとした。されども神人ら（八王八頭）は、常世神王の強大なる威力に恐れ、鼻息をうかがひ、盤古神王の召集に應ずるもの甚だ尠かつた。いづれも順慶式態度をとり、旗色を鮮明にするものがなかつた。また一方常世神王は、各山各地の八王八頭にたいし、常世城に召集の令を發し、神界統一の根本を定めむとした。されどこれまた前のごとく言を左右に託して、一柱も參集する神人がなかつた。この參加、不參加につ

いては、各山各地とも、八王と八頭とのあひだに意見の衝突をきたし、八王が常世神王に赴かむとすれば、八頭は盤古神王に附随せむとし、各所に小紛亂が續發したのである。このときこそは實に天下は麻のごとく亂れて如何ともすることが出来なかつた。八王および八頭は進退谷まり、今となつてはもはや常世神王も盤古神王も頼むに足らず、何となくその貫目の軽くして神威の薄きを感じ、ふたたび國祖の出現の一日も速からむことを、大旱の雲霓を望むがごとく待ち焦がるるやうになつた。叶はぬ時の神頼みとやら、いづれの八王八頭も各自鎮祭の玉の宮に致つて、百日百夜の祈願をなし、この混亂を鎮定すべき強力の神を降したまはむことを天地に祈ることとなつた。

地上の神界は常世神王の統制力も確固ならず、盤古神王また勢力振はず、各山各地の八王八頭は各國魂によつて獨立し、つひには常世神王も盤古神王もほとんど眼中になく、ただたんに天地創造の大原因たる神靈の降下して、善美の神政を樹立したまふ時のきたるを待つのみであつた。八頭八尾の大蛇および金毛九尾の悪狐および六面八臂の邪鬼は、時こそ到れりと縦横無盡に暴威を逞しうする事と

なつてしまつた。

附言、言葉の冗長を避くるため、今後は八頭八尾の大蛇を単に大蛇といひ、金毛九尾の悪狐を単に金狐と稱し、六面八臂の邪鬼を単に邪鬼と名づけて物語することといたします。

(大正一一・一・九 舊大正一〇・一二・一二 加藤明子録)

第一八章 宣傳使(二一八)

ここに天教山(一名須彌仙山ともいふ)に鎮まり坐す木花姫命の招きにより、集つた神人は、

大八洲彦命(一名月照彦神)、大足彦(一名足眞彦)、言靈別命(一名少彦名神)、神國別命(一名弘子彦神)、國直姫命(一名國照姫神)、大道別(一名日の出神)、磐樟彦(一名磐戸別神)、齋代彦(一名祝部神)、大島別(一名太田

神かみ）、鬼武彦おにたけひこ（一名大江神いちめいおほえのかみ）、高倉たかくら、旭あさひの二神合體にしんがつたいして月日明神つきひみやうじん

その他の神人かみがみなりける。

それらの神人かみがみは、天教山てんけうざんの中腹青木ヶ原ちうぶくあをきがはらの聖場せいぢやうに會くわいし、野立彦命のたちひこのみことの神勅しんちよくを奉ほうじ、天下てんかの神人しんじんを覺醒かくせいすべく、豫言者よげんしやとなりて世界の各地せかいかくちに派遣はけんせられた。その豫言よげんの言葉ことばにいふ。

「三千世界さんぜんせかい一度いちどに開ひらく梅の花うめはな、月日つきひと土つちの恩おんを知しれ、心こころ一つの救すくひの神かみぞ、天教山てんけうざんに現あらはれる」

以上の諸神人しよしんはこの神言かみことを唱となへつつ、あるひは童謡どうえうに、あるひは演藝えんげいに、あるひは音樂おんがくに「ことよせ」、千辛萬苦せんしんばんくして竊ひそかに國祖こくその豫言警告よげんけいこくを宣傳せんでんした。

されど、大蛇をろちや金狐きんこの邪靈じやれいに心底しんていより誑惑けうわくされ切きつたる神人かみがみらは、ほとんどこの豫言を輕視けいしし、酒宴しゆえんの席せきにおける流行歌はやりうたとのみ聞ききながし、事ことに觸ふれ物ものに接せつしてただちに口吟くちげんみながら、その警告けいこくの眞意しんいを研究けんきうし、日月じつげつの神恩しんおんを感謝かんしゃし、身魂みたまを鍊磨れんませむとする者ものは、ほとんど千中せんちうの一いちにも當あたらぬくらみであつた。

常世神王とこよしんわうは、門前もんぜんに節面白ふしおもしろく、「三千世界さんぜんせかい一度いちどに開ひらく梅の花うめはな云々うんぬん」と歌うたひくる月つき

ひみやうじん
日月神の童謡を聞いて首をかたむけ、大鷹別をして日月明神をとまなひ殿中に招
き、諸神満座の中にてこの歌を謡はしめた。

つきひみやうじん
日月明神は、面白く手拍子足拍子を揃へ、かつ優美に歌ひ舞ひはじめた。いづ
れもその妙技に感嘆して見とれりたり。

かみがみ
神人らは、嬉々として天女の音楽を聴くごとく勇みたち、中には自ら起ちてそ
の歌をうたひ、日月明神と相並んで品よく踊り狂ふものあり。殿内は神人らの歡
喜の聲に充されて春のやうであつた。獨り常世神王は、神人らの喜び勇み踊り狂
うて他愛なきに引きかへ、両手に頭を抑へながら苦悶に堪へざる面持にて、始終
俯きがちにその兩眼よりは涙を垂らし、かつ恐怖戦慄の色をあらはし、何となく
おちつ
落着かぬ様子であつた。

この様子を窺ひ知つたる大鷹別は、常世神王の御前に恭しく拜禮し、かついふ、
「神王は、何故かかる面白き歌舞を「みそなは」しながら、憂鬱煩慮の體にまし
ますや、一應合點ゆかず、御眞意を承はりたし、小子の力に及ぶことならば、い
かなる難事といへども、神王のためには一身を惜しまず仕へまつらむ」

と至誠面にあらはれて進言した。

されど、常世神王はただ俯向いて一言も發せず、溜息吐息を吐くばかりであつた。

大鷹別は重ねてその眞意を言葉しづかに伺つた。常世神王はただ一言、

「月日明神を大切に饗應し、本城の主賓として優待せよ」

といひ殘し、奥殿に逸早く姿をかくした。

月日明神は衆神にむかひ、

「世の終りは近づけり、天地の神明に身魂の罪を心底より謝罪せよ」

といひつつ、姿は煙のごとく消えてしまつた。

しばらくあつて常世神王は大鷹別にむかひ、

「旭明神とやらの唱ふる童謠は、普通一般の神人の作りし歌にあらず、天上にま

します尊き神の豫言警告なれば、吾らは一時も早く前非を悔い、月日と土の大恩

を感謝し、天地の神靈を奉齋せざるべからず。是については吾々も一大決心を要

す。すみやかに盤古神王の娘鹽治姫およびウラル彦の娘玉春姫をアーメニヤの神

都に禮を厚くしてこれを送還し、時を移さずロツキー山上に假殿を建て、すみや

かに轉居の準備に着手せよ」

と嚴命した。大鷹別は神王の眞意を解しかね、心中に馬鹿らしく感じつつも、命のごとく數多の神人をして二女性をアーメニヤに送還せしめ、ロツキー山の頂上に土引き均し、形ばかりの假殿を建設することとなつた。

アーメニヤの神都にては、盤古神王をはじめウラル彦は、常世神王の俄に前非を悔い、心底より歸順したる表徴として安堵し、かつ輕侮の念を高めつつ意氣衝天の勢ひであつた。

頃しも假宮殿の傍近く、

三千世界一度に開く梅の花

と謡うて通る言觸神（宣傳使）があつた。盤古神王はこの聲に耳をそばだて胸を抑へてその場に平伏した。この聲の耳に入るとともに頭は割るるがごとく、胸は引き裂くるごとくに感じたからである。

ウラル彦夫妻は、神王のこの様子を見て不審に堪へず、あわただしく驅けよつて介抱せむとした。神王は右の手を擧げて左右に振り、苦しき息を吐きながら、

「ただ今の言觸神の聲を聴け」

といった。二神は答へて、

「彼は神人らに食を求めて天下を遍歴する流浪人なり、かくのごとき神人の言を信じて心身を悩ませたまふは、平素英邁にして豪膽なる神王の御言葉とも覺えず、貴下は神經を悩ましたまふにあらざるか」

とやや冷笑を浮べて問ひかけた。

神王は二人の言葉の耳にも入らざるごとき様子にて、兩手を合せ、或は天を拜し或は地を拜し、

「月日と土の恩を知れ、月日と土の恩を知れ、世界の神人の罪を赦し、吾ら一族をこの大難より救はせたまへ」

と流汗淋漓、無我夢中に祈願をこらす。

ウラル彦夫妻は、この體を見て可笑しさに堪へかね噴出さむばかりになつたが、神王の御前をはばかつて、兩眼より可笑し涙を垂らしてこの場を退きさがつてしまつた。そしてこの場に現はれた言觸神は日の出神であつた。

(大正一一・一・九 舊大正一〇・一二・一二 井上留五郎録)

第十九章 旭日出暗(二一九)

ウラル彦は賢明叡知にして、天地の神意に出でたるこの警告を心底より諒得し
たる盤古神王の心を解せず、大蛇の悪霊と金狐の邪霊に憑依され、驕慢ますます
甚だしく、神王の宣示を空ふく風と聞きながし、かつ神人らを四方に派して言觸
神を探し求めしめ、つひにこれをウラル山の牢獄に投じてしまつた。さうして、
神人らの迷ひを解くためにとて歌を作り、盛んにこれを四方に宣傳せしめた。そ
の歌は、

☐ 呑めよ騒げよ一寸先や暗よ
暗の後は月が出る

時鳥聲は聞けども姿は見えぬ
見えぬ姿は魔か鬼か

折角の日の出神の「三千世界……梅の花」の宣傳も、この歌のためにほとんど抹殺されてしまった。

盤古神王は殿外の騒がしき聲を聞き、何事ならむと殿中より表門口に立出づれば、ウラル彦を中央に、あまたの神人らは酒に酔ひつづれ、

「呑めよ騒げよ」

の歌を謡つて踊り狂ふ落花狼藉に驚き、宴席の中央に現はれ、

「三千世界云々」

の童謡を聲張りあげて謡ひはじめた。

この聲を聞くとともに過半数の神人は、にはかに酒の酔も醒めはて、顔色蒼白めてぶるぶる慄ひだす者さへ現はれた。盤古神王はなほも引續きこの歌を唱へた。神人の過半数は、ますます畏縮して大地に仆れ、踏ん伸びる者さへ現はれてきた。

ウラル彦は、ここぞとまたもや、

「呑めよ騒げよ一寸先や暗よ、暗の後には月が出る」

と高聲に謡ひかけた。神人はその聲に應じてまたもや立上り、元氣回復して踊り

狂うた。盤古神王は又もや、

「三千世界の……梅の花」

を謡ひはじめた。せつかく元氣回復したる神人は、ふたたび大地にバツタリ仆れた。

ウラル彦夫妻は、場の兩方より聲をかぎり、手を拍ち踊り舞ひながら、

「呑めよ騒げよ一寸先や暗よ」

の歌をうたひ始めた。またもや神人は頭をもたげて踊り狂ふ。このとき場の一方より何ともいへぬ美しき且つ莊嚴なる聲が聞えた。その聲に神人は、またもや胸を刺さるごとく苦悶して、大地に仆れた。盤古神王はその聲を頼りに進んで行つた。その聲は不思議にも、牢獄の中から聞えてをる。

「不審」

と神王は、四五の従者を伴ひながら牢獄の前に進んだ。

三千世界一度に開く梅の花

とまたもや聞えだした。盤古神王は頭を鐵槌にて打ち碎かるごとく、胸を燒鐵にて刺さるごとく苦しきを感じ、思はずその場に平伏した。四五の従者も一時にバタバタと將棋倒しにたふれた。

神人らはやうやく頭をもたげて眺むれば、それは彼の言觸神であつた。驚いてただちに戸を開き救ひだし、奥殿にもなひ歸り、鄭重に接待し、禮をつくして教を乞うた。日の出神は、慇懃に野立彦命の眞意を傳へ、かつ改心歸順を迫り、天地日月の殊恩を説示した。神王はあたかも生ける神のごとく、この宣傳者を尊敬し、敬神の態度を怠らなかつた。ただちに宣傳者の命により、ウラルの山上に改めて立派なる宮殿を造り、日の神、月の神、大地の神を、さも莊嚴に鎮祭し、敬拜怠らなかつた。

それに引換へ、體主靈從の大蛇と金狐に魅せられたるウラル彦、ウラル姫は、この神王の行爲にたいし不快を感じ、さかんに神人らに對して自暴自棄となり、

日夜酒宴を張り、豊熟なる果實を飽食せしめ、無神説を唱へ、
「呑めよ騒げよ一寸先や暗よ、暗の後には月が出る。よいとさ、よいやさつさ、
よいやさつさ」
と意地づくになつて踊りくるひ、連日連夜の遊樂にのみ耽つて、神政を忘却する
に致つた。

このとき轟然たる音響天に聞ゆると見るまに、さも強烈なる光は地上を放射し
た。神人らは一せいに期せずして空を仰いだ。眼も眩むばかりの強烈なる光であ
る。その光はまたもや、天の浮橋の東西南北に悠悠として探海燈を照したごとく、
中空を東西南北に轉回してゐる。さうしてこの強き光のために盲目となる者も現
はれた。浮橋の尖端よりは金色の星幾十となく放出して、ウラル山上の盤古神王
の宮殿に落下した。

盤古神王は大神の恵みと深く感謝し、一々その玉を拾ひあつめて神殿に恭しく
安置し、日夜供物を獻じ祭祀を莊嚴におこなひ、敬神の至誠をつくしてゐた。そ
れよりウラル山上は、紫雲たなびき、天男天女はときどき降りきて中空に舞ひ、

微妙びめうの音楽おんがくを奏そうし、風暖かぜあたたかく花はなは香かしく、木々きぎの果實このみは味あぢはひ美うるはしく豊熟ほうじゆくするにいたつた。

神王しんわうは、日ひのの出神のかみを宮司みやつかさとして、これに奉仕ほうしせしめた。これよりウラル山さんじやう上の盤古神王ばんこしんわうとウラル彦夫妻ひこふさいとの間あいだには、もつとも深ふかき溝渠こうきよが穿うがたれた。

(大正一・一・九 舊大正一〇・一二・一二 外山豊二録)

第二〇章 猿蟹合戦 (二二二〇)

顯恩郷けんおんきやうの南方なんぼうなるエデン河がはの南岸なんがんにあたつて橙園郷とうゑんきやうといふ一大部落いちだいはらくがある。この國くにの長をさを橙園王とうゑんわうといふ。この數年すうねん、何ゆゑか霜雪さうせつしきりに降ふり積つもり、時々ときどき寒風かんふう吹ふききたつて橙樹實とうじゆみのらず、この郷きやうの住民ぢゆうみんいづれも饑餓きがに迫せまり、ほとんど共喰ともぐひの慘状さんじやうであつた。これに引換ひきかへ、北岸ほくがんの顯恩郷けんおんきやうは、北きたに高山かうざんを繞めぐらし、東西とうさいに低ひくき山やまを圍かこひ、氣候きこうは中和ちうわを得え、果實くわじつ豊熟ほうじゆくして、郷神きやうしんの食しょくじ事は常つねに足たり餘あまりつつあつ

た。

對岸の橙園王はこの河を渡り、顯恩郷を占領せむことを造次にも顛沛にも忘れなかつた。されど顯恩郷は天上より降下したりてふ威力絶倫なる生神の親臨して固くこれを守り、かつ棒岩の鬼武彦の神靈、時に敵に向つて無上の神力を發揮し敵を艱ますとの風説を固く信じ恐れ、これが占領を躊躇しつつあつた。されど數多の住民の饑餓に迫りて苦しむを坐視するに忍びず、背に腹はかへられぬ場合となり、「いち」か、「ばち」か、一度占領を試みむと、住民を集めて協議の結果、夜陰にまぎれ、顯恩郷を襲ひ、自分らの安住所と定めむとした。

顯恩郷の神人はすべて蟹面をなせるに引きかへ、この郷の住民はいづれも猿猴のごとき容貌の持主であつた。さうして全身荒き毛を生じ、ほとんど猩々のごとく、言葉は單にアオウエイの五音をもつてたがひに意思を表示してゐたのである。

雨激しく風強く、雷鳴なり轟く夜を見すまし、大擧してエデンの大河を各手をつなぎながら打ち渡り、各自に棍棒を携へ、あるひは石塊をもち、顯恩郷に襲來した。夜中のこととてこの郷の神人らは一柱として、敵の襲來を感知するものは

なかつた。橙園郷の住民は餓虎のごとく果實をむしり取り、飢ゑたる腹を膨らせ、元氣はますます旺盛となつた。住民らは一所に集まつて議していふ、
「もはや吾々はかくのごとく元氣回復したれば、強きこと鬼に金棒のごとし。いかに南天王の威力も、鬼武彦の神力も、何の恐るところかあらむ、この期に乗じて南天王の宮殿を襲へ」
と橙園王は先に立つて鬨をつくつて進み寄せた。埒を離れて驚きさわぐ鶏の羽音に南天王は目を醒まし、耳をすまして殿外の聲を聞きいつた。つひに聞き慣れぬ聲であつて、ただウウ、エエとのみ聞ゆるのである。ただちに殿内の神人らを呼びおこし偵察せしめむとする時しも、橙園王は岩をもつて作りたる鋭利なる大刀を引提げ、奥殿目がけて阿修羅王の暴れたるごとく突進してきたり、南天王目がけて物をもいはず斬りつけた。南天王はひらりと體をかはし、わづかに身をもつて山奥に免れ、棒岩の麓にいたつて強敵退散の祈願を籠めてゐた。さうして南天王は背部に重傷を負ひ、苦痛に悶えつつ岩下に打倒れた。春日姫はその後を追ひ、泣く泣く南天王に谷水を掬ひ來りて飲ましめ介抱をつくした。ウアーウアーの聲

はますます近くちか聞きえてきた。鬼武彦おにたけひこの石像せきざうよりはたちまち怪あやしき光ひかりを發はつし、敵軍てきぐんの群むれにむかつて放射ほうしゃした。敵てきはその光ひかりと強熱きやうねつに堪たへかねて、兩手りやうてをもつて面部めんぶを覆おほひ隠かくした、頭髮とうはつおよび全身ぜんしんの毛けは、ぢりぢりと音おとして焼やけるばかりになつた。いづれの敵てき人も残のこらず谷川たにがはに頭あたまを突つ込み、臀部でんぶを上方じやうほうに向けむ、あたかも尻しりを花立はなたてのやうにして、ぶるぶると震ふるうてゐた。このとき尻しりは強熱きやうねつに焼やかれて赤色せきしよくに變へんじてしまつた。顯恩郷けんおんきやうの神人かみがみらは、たちまち得意とくいの通力つうりきをもつて巨大きよだいなる蟹かにと變へんじ、谷川たにがはに倒さかさまになつて震ふるうてゐる敵住民てきぢうみんらの頭あたまを左右さいうの銳利えいりなる鋏はさみにてはさみ切きらむとした。中なかには頭あたまを削けつられ、首くびをちぎられ、悲鳴ひめいをあげて泣なく者ものもたくさんできた。橙園王とうゑんわうは恐おそれて退却たいきやくを命めいじた。いづれの人民じんみんも橙園王とうゑんわうの指揮しきにしたがひ、命いのちからがらエデンの河かはを渡わたつて橙園とうゑんに逃のがれ歸かへらむとして河中かちうに足あしを投とうずるや、巨大きよなる蟹かには水中すゐちうにあまた集あつまりゐて、足あしを切りちぎつた。オーオーと聲こゑを張り上げて泣なきながら、辛からうじてその過半くわはんは無事ぶじに南岸なんがんに着つき、その他たは残のこらず滅ほろぼされてしまつた。これより橙園郷とうゑんきやうの住民ぢうみんは容易よういに顯恩郷けんおんきやうに襲撃しふげきするの念ねんを斷たつた。されど何時いつまたもや襲來しふらいせむも計はかりがたしと、顯恩郷けんおんきやうの神人かみがみらは安やすき心こころもなかつ

た。そして天津神の降臨と信任しゐたる南天王は、敵の橙園王に斬り立てられ、卑怯にも少しの抵抗をもなさず、背部に大負傷をなして石神のもとに逃げゆき戦慄しゐたるを見て、神人らは各自に心もとなく思ひ、かつ天神の天降りを疑ふやうになつてきた。

鷹住別の南天王は、かくのごとく脆くも橙園王のために敗を取り、日ごろの神力を發揮し得ざりしは、衣食住の安全を得たる上に、神人らの尊敬畏拜するにいつしか心をゆるめ、やや慢心を兆し、天地の神恩を忘却し、祭祀の道を忽諸に附したるがゆゑであつた。これより南天王は部下の神人らの信任を失ひ、やむを得ず夜陰に紛れ、夫婦は手に手をとつて遠く、夜な夜なかはる草枕、旅の苦勞を重ねて、つひに元のモスコに辛うじて逃げ歸ることを得た。

(大正一一・一・九 舊大正一〇・一二・一二 加藤明子録)

橙園王以下の住民の襲撃により、一敗地にまみれ、神人の信望を失墜したる南天王夫妻は、夜陰に乘じモスコに歸つた。ここに顯恩郷は再び主宰者を失ひ、日夜不安の感に打たれてゐた。

されど最も信賴するは、棒岩の上に安置せる鬼武彦の石神像である。神人らは南天王の失踪せしより、一意専心にこの石神像にむかつて祈願を籠め、日夜禮拜を怠らなかつた。さうして南天王の後任として蟹若といふこの郷のもつとも強き神人をおし立て、南天王の後を繼がしめた。されど郷神人はどことなく不安の念にかられ、眞正の天津神の降臨されむことを、石神像にむかつて晝夜祈願しつた。あつた。

頃しも一天俄に掻き曇り、地上の一切を天空に捲きあげむばかりの猛烈なる旋風が起つた。神人らはいづれも九死一生の思ひをなして、石神像の岩下に集まり、天地に拜跪して救助を祈りつつあつた。

雲はおひおひ低下して石神像のもとに降りきたり、雲中より劍光閃くよと見るまに、石神像に寸分違はぬ容貌の生神が忽然として現はれた。この神はたちまち

光芒陸離たる兩刃の劍をもつて中空にむかひ左右左に打振つた。さしもの強雨烈風もパタリとやんで紺碧の空と化し、日光燦然として輝きわたりはじめた。

神人らは蘇生の思ひをなし、思わずウローウローと叫びつつ、その生神の周圍に集まり、合掌禮拜感謝の涙をながした。これは大江山の鬼武彦にして、今は天教山の野立彦命の命を奉じ、この郷に大江神と改名して、豫言警告を與ふるために出現したるなり。神人らは石神像に寸毫の差なきを見て、石神の靈化して生神と現はれたまひしものと固く信じ、ただちに輿に乗せて顯恩郷の宮殿に奉迎し、祝杯をあげて勇みたつた。

大江神はおもむろに口を開き、

「三千世界一度にふさがる泥の海、月日と地の恩を忘れな、心次第の救け神」と聲高らかに唱へだした。神人らは一尙合點ゆかず、

「かかる平和にして且つ天惠の充分なる顯恩郷の、いかでか泥の海とならむや」と怪しみて、口々に反問した。

大江神は、大神の神意を詳細に語り傳へ、

「この際心を悔い改め、月日と大地の四恩を感謝し、博く神人を愛し、公平無私なる行動をもつて天地の神明に奉仕し、神人たるの天職をつくせよ。すべて神の神人をこの土に下したまふや、神の廣大無邊なる至仁至愛の理想を實現し、天國を地上に建設し、天下の蒼生をして禽獸蟲魚に至るまで各その安住の所を得せしめ、神とともに至治太平の聖代を樂まむがためなり。しかるにこの顯恩郷は、神の深き四恩によつて風暖かく、風雨は時を違へず、花は香ばしく、果實は豊にしてその味はひ美はし。しかるにエデンの大河を限りとし、南岸の橙園郷は、南方に山高くして日光を遮り、かつ北風強く果實常に實らず、住民は飢餓に迫り、精神自ら荒涼と化し、ほとんど人民たるの資格を保持せざるに至れり。これぞ全く、衣食住の豊ならざるに基因するものなり。しかるにこの顯恩郷は、衣食足り餘り、美はしき果實は地に落ち、腐蝕するに任せ、天恩を無視すること甚し。かくのごとくして歳月を經過せば、つひには天誅たちどころに至つて、南天王のごとく郷神に襲はれ、つひには橙園王に討伐され、天授の恩恵を捨てざるべからざるの悲境に沈淪し、あたかも餓鬼畜生の境遇に墮するに至らむ。汝ら神人らは天地の大

神かみの至し仁じん至し愛あいの大おほ御み心こころを察さつ知ちし奉まつり、地ち廣ひろく果くわ實じつ多おほきこの顯けん恩おん鄉きやうをして汝なんぢら神かみ人がみらの獨どく占せんすることなく、橙とう園えん鄉きやうの住ぢゆう民みんの移い住ぢゆうを許ゆるし、相あひともに天てん惠けいの深ふかきを感かん謝しゃせよ」

と言ことば葉はおごそかに説せつ示じした。

神かみ人がみらはこの教けう示じを聞きいて、初はじめて天てん地ちの神しん意いを悟さとり、何なに事ごとも大おほ江え神かみの指し揮きにしたが従したがふこととなつた。大おほ江え神かみは、神かみ人がみらの一いち言げんにしてわが言げんに心しん服ふくせしことをよるこび、深ふかく歎たん賞しやうしつづ蟹かに若わか其た他たの神かみ人がみらを引いん率そつし、エデたいンがのたい大たい河がを渡わたつて、みづから橙とう園えん鄉きやうに致いたり、橙とう園えん王わうに面めん會くわいを求もとめ、その神しん意いを傳つたへた。

橙とう園えん王わうは、初はじめのうちは大江え神かみの神しん威いに恐おそれて戰せん慄りつし、近ちかづき來きたらず、かつ部ぶ下かの住ぢゆう民みんは、先さきを争あらそうて山やま深ふかく姿すがたをかくした。されど、大おほ江え神かみの仁じん慈じの言ことば葉はに漸やうやく安あん堵どして、その命めいにしたが従したがひ郷きやう民みんを全ぜん部ぶ引いん率そつして、顯けん恩おん鄉きやうに移い住ぢゆうすることとなつた。顯けん恩おん鄉きやうの神かみの數かずは、以い前ぜんに三さん倍ばいすることとなつた。されど無む限げんの天てん惠けいは、衣い食しよく住ぢゆうに餘よ裕ゆうを存ぞんし、住すむに十じふ分ぶんの餘よ地ちをなしてみたのである。彼ひ我がの神かみ人がみは、仁じん慈じ無む限げんのおほ江え神かみの教けう示じを遵じゆん奉ほうし、今いままで犬けん猿えんただならざりし兩りやう鄉きやうの種しゆ族ぞくも、今いまは親おや

子兄弟のごとく、相親しみ相愛して、ここに小天國は建設されたるなり。

(大正一一・一・九 舊大正一〇・一二・一二 外山豊二録)

(第五章 第二章 昭和一〇・三・二九 於吉野丸船室 王仁校正)

第二章 神示の方舟〔二二二〕

大江神は、小天國の神王として神人らより畏敬尊信され、その命令は遺憾なく實行された。

ここに蟹若を擢んで左守となし、橙園王を拔擢し、右守に任じ、この一小區劃は實に天國樂土の出現したるがごとくであつた。

大江神は橙園山に登り、部下の神人を使役して眞金を掘り出し、鋸、斧その他金道具を製作した。そして橙園郷の果實の實らざる杉、檜、樟等の大木を伐採し、數多の方舟を造ることを教へた。

神人らは何の意たるかを知らず、ただ命のまにまに汗水を垂らして方舟の製作や金道具の製作に嬉々として従事した。神人の中には方舟の何用に充つべきかを左守に向つて尋ねた。されど左守は、
「果して何の用を爲すものか、吾は神王に一言半句も伺ひたることなし。ただ吾々は神王の命に服従すれば可なり。吾らの安全を計りたまうて天上より降りきたれる神王なれば、無益のことを命じたまふべき謂れなし。汝らもただ命のまにまに服従して一意専心に方舟の製作に従事せば可なり」
といひ渡した。

凡て神のなす業は人間の窺知し得べき所にあらず。

「神は今までの今までは何事も申さぬぞよ、人民はただ神の申すやうにいたせば、ちつとも落度はないぞよ」
と神諭に示されたるごとく、ただ吾々は下らぬ屁理屈をやめて、ただただ神命のまにまに活動すべきものである。

然るに人々の中には、根から葉まで、蕪から菜種まで詮索しなくては、神は信

ぜられないとか、御用は出来ないとかいって、利巧ぶるものが澤山にある。いかに才能ありとて、學力ありとて、洪大無邊の神の意思經綸の判るべきものではない。また神よりこれを詳しく人間に傳へむとしたまふとも、貪瞋癡の三毒に中てられたる體主靈從の人間の、到底首肯し得べきものでない。ただただ神の言葉を信じて身魂を研ぎ、命ぜらるるままに神業に従事せばよい。

顯恩郷の神人らは衣食住の憂ひなく、心魂ともに質朴にして少しの猜疑心もなく、天真爛漫にして現代人のごとく小賢しき智慧も持つてゐなかつた。そのために従順に神の命に服従することを得たのである。聖書にも、

「神は強き者、賢き者に現はさずして、弱き者、愚なる者に誠を現はし給ふを感謝す」

とあるごとく、小なる人間の不徹底なる知識才學ほど禍なるはない。

かくして神人らの晝夜の丹精によつて、三百三十三艘の立派なる方舟は造りあがつた。さうしてこの舟には残らず果物を積み、または家畜や草木の種を満載された。

今まで平穩なりし顯恩郷の東北隅の山間に立てる棒岩は、俄に唸りを立てて前後左右に廻轉し初めた。さうして鬼武彦の石像は、漸次天に向つて延長しだした。之を天の逆鋒と稱へる。

猿のごとき容貌を具へたる種族と、蟹面の種族は互に手を携へて相親しみ、この逆鋒の下にいたつて果物の酒を供へ、祝詞を奏し、かつ顯恩郷の永遠無窮に安んぜんならむことを祈願した。このとき天の逆鋒に聲あり云ふ。

月に叢雲花には嵐

天には風雨雷霆の變あり

地には地震洪水火災の難あり 神人にはまた病魔の變あり

朝の紅顔夕の白骨 有爲轉變は世の習ひ

淵瀨と變る世の中の 神人心を弛めなよ

常磐堅磐に逆鋒の 堅き心を立て徹し

天地の艱みきたるとも 神にまかして驚くな

昨日にかはる今日の空 定めなき世と覺悟して

月日と土と神の恩

夢にも忘ることなかれ

惟神靈幸倍坐世

惟神靈幸倍坐世

と鳴りわたつたまま、逆鉾は遂に沈黙してしまつた。

神人らは異口同音に覺束なき言葉にて、

「かんとたま、かんとたま」

と唱へた。

天地は震動して、ここに地上の世界は大洪水となりし時、この郷の神人らは一柱も残らず、この舟に搭乘してヒマラヤ山に難を避け、二度目の人間の祖となつた。ゆゑにある人種はこの郷の神人の血統を受け、その容貌を今に髣髴として存してをる人種がある。

現代の生物學者や人類學者が、人間は猿の進化したものなりと稱ふるも無理なき次第である。また蟹面の神人の子孫もいまに世界の各所に殘存し、頭部短く面部扁平たきいはゆる土蜘蛛人種にその血統を留めてゐる。

(大正一一・一・九 舊大正一〇・一二・一二 井上留五郎録)

第四篇 救世の神示

第二三章 神の御綱〔一二二三〕

聖地エルサレムは常世彦、常世姫らの暴政の結果、天地の神明を怒らしめ、怪異續出して變災しきりにいたり、終にアーメニヤに、八王大神は部下の神々とともに逐電し、エデン城もまた焼盡し、龍宮城もまた祝融子に見舞はれ烏有に歸し、橄欖山の神殿は鳴動し、三重の金殿は際限もなく中空にむかつて延長し、上端において東西に一直線に延長して丁字形の金橋をなし、黄金橋もまた地底より動搖

して虹のごとく上空に昇り、漸次稀薄となり、大空に於て遂にその影を没して了つた。

丁字形の金橋は、東より南、西、北と緩やかに廻轉し始めた。さうして金橋の各部よりは、美はしき細き金色の靈線を所々に發生し、地球の上面に垂下するのと恰も絲柳の枝のごとくであつた。さうして其の金色の靈線の終點には、金銀銅鐵鉛等の鉤が一夕附着されてある。これを「神の御綱」ともいひ、または「救いの鉤」ともいふ。

言觸神は遠近の區別なく山野都鄙を跋渉し、櫛風沐雨、心身を惜しまず天教山の神示を諸方に宣傳しはじめた。さうしてその宣傳に隨喜渴仰して、日月の殊恩を感謝し、正道に歸順する神人には、おのおのその頭に「神」の字の記號を付けておいた。されど附けられた者も、附けられない反抗者も、これに氣付くものは一柱もなかつた。

中空に金橋廻轉し、金色の靈線の各所より放射するを見て、地上の神人は最初は之を怪しみ、天地大變動の神の警告として、心中不安恐怖の念に驅られて、天

に向ひ、何者かの救ひを求むることく、合掌跪拜しつつあつた。しかるに日を重
ね、月を越ゆるにつれて、これを少しも異しむものなく、あたかも日々太陽の東
より出でて西に入るもののごとく、ただ普通の現象として之を蔑視し漸く心魂弛
み、復び神を無視するの傾向を生じてきた。

このとき天道別命、天真道彦神、月照彦神、磐戸別神、足真彦神、祝部神、太
田神その他の諸神は、晝夜間断なく豫言警告を天下に宣布しつつあつた。

されどウラル彦の體主靈從的宣傳歌に、あまたの神人らは誑惑され、かつ大に
この歌を歓迎し、致る所の神人は山野都鄙の區別なく、

「呑めよ騒げよ一寸先や暗よ

暗の後は月が出る

時鳥聲は聞けども姿は見せぬ

姿見せぬは魔か鬼か

と盛んに謠ひ、酒色と色情の欲に驅られ、暴飲暴食、淫靡の風は四方を吹捲つた。言觸神の苦心慘愴して教化の結果、得たる神人の頭部に「神」の字の記號を附着されたる神人は、大空の金橋より落下する金色の靈線の末端なる「救ひの鉤」にかけられ、中空に舞上るもの、引揚げらるるもの、日の數十となく現はれてきた。八百萬の神人の中において、日に幾十柱の神人の救はれしは、あたかも九牛の一毛に如かざる數である。

この鉤にかかりたる神人は、上中下の身魂の中において、最も純粹にして、神より選ばれたものである。同じ引揚げらるる神人のなかにも、直立して「上げ面」をなし、傲然として頭を擡げ、鼻高々と大地を歩み、又は肩にて風をきる神人は、耳、鼻、顎、首、腕などを其の鉤に掛けられ、引揚げらるる途中に非常の苦しみを感じつつあるのが見えた。また俯向いて事業に勉勵し、一意専心に神を信じ、下に目のつく神は、腰の帯にその鉤が掛つて少しの苦しみもなく、金橋の上に捲き上げられるのであつた。その他身體の各所を、地上の神人の行動に依つて掛けられ金橋の上に救ひ上げらるるその有様は、千差萬別である。中には苦しみに堪

へかねて、折角もう一息といふところにて顎がはづれ、耳ちぎれ、眼眩み、腕を
れ、鼻まがりなどして、ふたたび地上に落下し、神徳に外れる者も澤山に現はれ
た。その中にも頭を低くし、下を憐れみ、俯向きて他の神人の下座に就き、「せ
つせ」と神業をはげむものは、完全に天上の金橋に救ひ上げられた。

このとき天橋には、第二の銀色の橋、金橋とおなじく左右に延長し、また其の
各所よりは銀色の靈線を地上に垂下し、末端の鉤にて『中の身魂』の神人を、漸
次前のごとくにして救ひ上げるのを見た。

次には同じく銅色の橋左右に發生して、前のごとく東西に延長し、銅橋の各所
より又もや銅色の靈線を地上に垂下し、その末端の鉤にて選ばれたる地上の神人
を、天橋の上に引揚ぐることに以前のごとく、完全に上り得るもあり、中途に落下
するもあり、せつかく掛けられし其の綱、其の鉤をはづして地上より遁去するも
あつた。

圖をもつて示せば、前圖のとほりである。

(大正一一・一一・一〇 舊大正一〇・一二・一三 外山豊二録)

第二四章 天の浮橋（二二四）

龍宮城の三重の金殿より顯國玉の神威發揚して、あたかも兩刃の劍を立てたるごとき黄金の柱中空に延長し、その末端より發生したる黄金橋はこの柱を中心にして東西に延長し、その少しく下方よりは左右に銀橋を發生し、そのまた下方部よりは銅橋を發生して東西に延長し、地球の上面を覆うたことは前述の通りである。

そして各橋より垂下する金銀銅の靈線の鉤に身體をかけられ、上中下三段の身魂が各自身魂の因縁によつて金銀銅の橋上に救ひ上げられ、或は中途に地上に落下する有様を、訝かしげに眺めつつ見惚れてゐた瑞月の前に、銀色の靈線が下りきたり、その末端の鉤は腹部の帯に引掛るよと見るまに、眼も眩むばかりの速力にて空中に引きあげられた。あまりの恐ろしさに、思はず眼を閉ぢ口を塞ぎ、兩手をもつて耳を塞ぎつつあつた。俄に、

「眼を開けよ」

といふ聲が、頭上の方にあたつて聞えた。その聲に思はず眼を開けば、遙の中空

に捲揚げられ、自分は銀橋の上に立たされてゐた。銀橋の上には、ところどころに神人が引き揚げられてゐるのを見た。いづれも恐ろしげに緊張しきつた態度で、地上を瞰下してゐるのであつた。このとき吾頭上にあたつて、

「吾は國姫神なり、汝に今より小松林命といふ神名を與へむ。この綱にすがりて再び地上に降り、汝が兩親兄弟朋友知己らに面會して天上の光景を物語り、悔い改めしめ、迷へる神人をして神の道につかしむべし」

と言葉終るとともに頭上より金線は下つてきた。そして國姫神の姿は聲のみにて、拜することは出来なかつたのである。下りくる金色の靈線を兩手に握るよとみるまに、ガラガラと釣瓶の車をまはすごとき音して地上に釣瓶落しに卸されて了つた。

降れば身は何ともいへぬひろびろとした原野に立つてゐた。ここには吾親らしきものも兄弟知己らしき人間もなく、ただ虎、狼、山狗、狐狸の群がところどころに散在してゐるのであつた。不思議にも是らの猛獸は白壁造りの庫を建てて、或は立派な門構へをなし、美しき廣き家に住まつてゐるのである。どう考へても

猛獸狐狸の棲むべき住家とは思はれなかつた。これはどうしても人間の住むべき家である。しかるに何ゆゑ、此のごとき獸類のみ住みをるやと、訝かりつつあつた。

このとき國姫神の聲として、

「天上より此黒布を與へむ」

と云はるるかと思へる間に、黒き布は風にヒラヒラとして吾前に下り來つた。手早くこれを持つて面部を覆うた。黒布を透してその猛獸狐狸の群をながむれば、あにはからむや、いづれも皆立派なる人間ばかりである。中には自分の親しく交はつてゐた朋友も混つてをるには、驚かざるを得なかつた。

それよりこの黒布を一瞬の間も離すことをせなかつた。そのゆゑは、此眼の障害物を一枚除けば、前述のごとく猛虎や狐狸の姿に變つて了ひ、實に恐ろしくてたまらなかつたからである。

さうかうする間、又もや天上より吾前に金色の靈線が下つてきた。以前のごとく吾腹帯に鉤は引かかつた。今度はその黒布を手ばやく懐中に入れ、兩手を以て

確しかと金色こんじきの靈線れいせんを掴つかみながら、前まへのごとく一瀉千里いつしやせんりの勢いきほひにて上空じやうくうに引き揚あげられ
て了しまつた。

やや久ひさしうして、

「眼めを開あけよ」

と叫さけびたまふ神かみの聲こゑが聞きえた。眼めを開ひらけば今度こんどは最高點さいかうてんの黄金橋こがねばしの上うへに引ひき揚あげ
られてゐたのである。まづ安心あんしんとあたりを見みれば、國姫神くにひめのかみは莞爾にっことして四五しごの從じう
神しんとともに吾前わがまへに現あらはれ、

「この橋はしは黄金こがねの大橋おおはしといひ、また天あまの浮橋うきはしともいひ、地球ちきうの中心ちうしん火球くわきうより金氣きんき
昇騰しやうたうして顯國うつつくにの玉たまとなり、この玉たまの威德ゐとくによりて國くにの御柱みはしらは中空ちうくうに高たかく延長えんちやうし、
その頂上ちやうじやうは左右さいうに分わかれ、左ひだりは男神をがみの渡わたるべき橋はしにして、右みぎは女神めがみの渡わたる橋はしなり、
この黄金橋わうごんけうは滑なめらかにして、少すこしの油斷ゆだんあらば滑すべりて再ふたび地ちに顛落てんらくし、滅亡めつぼうを招まねくの
危険きけんあり。汝なんぢは拔身ぬきみの中なかに立たつごとく心こころを戒いましめ、一足ひとあしたりとも油斷ゆだんなく、眼まなこを配くば
り、耳みみを澄すませ、息いきを詰つめ、あらゆる心こころを配くばりてこの橋はしを東方とうほうに向むかつて渡わたれ。ま
た此橋このはしは東南西北とうなんせいほくに空中くうちうを旋回せんくわいす、その旋回せんくわいの度たびごとに橋體震動けうたいしんどうし、橋上けうじやうの神人しんじん

は動もすれば跳飛ばさるる恐れあり、また時には暴風吹ききたつて橋上の神人を吹き落すことあり。欄干もなく、足溜りもなく、橋とはいへど黄金の丸木橋、渡るに難し、渡らねば神の柱となることを得ず、實に難きは神柱たるものの勤めなり。」

と言葉嚴かに云ひ渡された。

王仁は唯々諾々として其教訓を拜し、東方に向つて覺束なき足下にて、一歩々々跣足のまま歩を進めた。

忽ち黄金橋は東より南に廻轉を初めた。じつに危険身に迫るを覚え、殆ど顔色をなくして了つた。このとき何神の御聲とも知れず、
「勇猛なれ、果斷なれ、毅然として神命を敢行せよ。神は汝の背後にあり、夢恐るるな。」

といふ聲が耳朶を打つた。

王仁はこの聲を聞くとともに、恐怖心も何も全部拂拭され、光風霽月、心天一點の暗翳も留めざる思ひがした。

金橋はますます廻轉を速め、東より南に、南より西へ、西より北へと中空をいと迅速に旋回し、また元の東に戻つた。

黄金橋の東端は、ある一つの高山に觸れた。見れば是は世界の名山天教山の頂きであつた。このとき木花姫命を初め數多の神人は、吾姿を見て、

『ウローウロー』

と兩手を擧げて叫び、歡迎の意を表された。

いつの間にか王仁の身は天教山の山頂に、神々とともに停立してゐた。金橋は何時のまにか東南隅に方向を變じてゐた。

時しも山上を吹き捲くる吹雪の寒さに、頬も鼻も千切れるばかりの痛みを感じずるとともに、烈風に吹かれて山上に倒れし其の途端に前額部を打ち、兩眼より火光が飛び出したと思ふ一刹那、王仁の身は高熊山の岩窟に靜坐し、前額部を岩角に打つてゐた。

(大正一一・一一・一〇 舊大正一〇・一二・一三 井上留五郎録)

第二十五章 姫神の宣示〔二二五〕

月清く星稀にして、銀河は東南の天より西北に流れ、風は微妙の音楽を奏し、天教山の中腹は霞の帯を引き廻し、海面を見渡せば、浪靜にして水面に白色の眞帆片帆、東西南北に風をはらんで疾走する様、實に龍宮城の神苑に白鷺の降りたるがごとき光景であつた。

木花姫命を中心このはなひめのみことに、天道別命あまぢわけのみこと、天真道彦命あめのまみちひこのみこと、月照彦神つきてるひこのかみ、足眞彦神だるまひこのかみ、磐戸別神いはとわけのかみ、祝部神はふりべのかみ、弘子彦神ひろやすひこのかみ、太田神おほたのかみその他の神々は、勇氣凜々たる面持おももちにて、いまや黄金わうごん橋けうをあとにしてこの天教山てんけうざんに息を休め、天眼鏡てんがんきやうを片手かたてにとりて、上うへは天てんを照てらし、下したは地上ちじやうを照てらし、天地てんちの光景くわうけいは手てにとるごとく、否いな、神現幽三界しんげんいうさんかいの光景くわうけいは目睫もくせふの間に透見とうけんし得えらるるその面白おもしろさに、われを忘れ異口同音いくどうおんに、

「ヤヤヤ大變大變」

と叫さけぶもあれば、

「ヤア面白おもしろい」

と叫ぶ神人もある。なかに祝部神は頓狂な聲を出して、

「ヨウヨウこいつは大變だ、助けてやらねばなるまい」

と一目散に天教山を駆け下らむとする慌て者である。木花姫命は満面に笑を湛へ

つつ祝部神を「暫し」と呼びとめられた。祝部神は下りかけた山路をふたたび

登り来りながら、右の手をもつて鼻をこすりあげ、右の目縁より左の目尻にかけ

てつるりと撫で、手の甲にて「はな」をかみながら、その手を袖にて拭ひ落とし、

「これはこれは、眞に失禮いたしました」

とお玉杓子のようなる不格好の顔つきして、かるく目禮するのであつた。

月照彦神は祝部神にむかひ、

「貴下のごとく慌てた舉動にて、いかにして天橋を渡りたまひしか」

と訝しげに問ひかけたまへば、命は雑作なく、

「私は天教山の方のみ見つめてみましたので、足許などは少しも氣にかけませぬ」

と云つて數多の神々を煙にまいた。祝部神はそれでも濟ました顔で木花姫命に向

ひ、

「私は三界の惨状を目撃してより、一寸の間も安逸に身を置くことは出来ないやうな氣になりました。なにとぞ一時もはやく下山を許させたまへ」

といふより早く、木花姫命の宣示も待たず、踵を返してまたもやトントンと青木ヶ原に下りゆかむとする。足眞彦神は苦笑しながら、

「祝部神、あまり貴下の舉動粗忽に過ぎざるや、未だ大神の御許容なし、自由行動は神人のもつとも慎むべきところならずや」

と聲に力を入れて呼び止めた。祝部神はまたもや手「ばな」をかみながら元の座に現はれた。神々は一度にどつと哄笑し、なかには笑ひこけて腰骨を拳もて叩く神さへもあつた。

木花姫命は神々を集め、天眼鏡を一面づつ神々に授け、且つ紫、青、赤、白、黄、黒等の被面布を渡し、

「汝諸神人ら、いま現幽二界に出で致りて神言を傳へむとするときは、必ずこの被面布を用ゐたまへ、しかし神界は此限りに非ず」

といひつつ各神に各色の被面布を渡された。

茲こゝに神々かみがみは八方はつぱうに手分けてわけなしつつ、神界しんがいより野立彦命のたちひこのみことの神教しんけうを宣傳せんでんするため、各自かくじ變装へんさうして地上ちじやうの神人しんじんにむかひ、警告けいこくを與あたふることとなつた。

このとき天教山てんけうざんは鳴動めいどうしはじめた。音響おんきやうは時々刻々に強烈きやうれつとなつた。木花姫命このはなひめのみことは神々かみがみに向ひ、

「もはや野立彦命のたちひこのみことの神教しんけうを宣傳せんでんすべき神々かみがみは、黄金橋わうごんけうのもつとも困難こんなんなる修業しうげふを終へ、難關なんくわんを渡りたれば、ふたたび邪神じゃしんに誑惑けうわくせらるることなかるべし。今や當いま山の鳴動めいどう刻々に激烈げきれつとなるは、火球くわきうの世界せかいより大神おおかみの神靈しんれいここに現あらはれたまひて、三千世界さんぜんせかい一度いちどに開ひらく梅の花うめのはな、開ひらいて散りて實みを結び、スの種たねを世界せかいに間配まくばる瑞祥ずゐしやうの表徴へつちやうなれば、吾われはこれより中腹ちうぶくの青木ヶ原あをきがはらに轉居てんきよせむ、諸神しよしんはこれよりヒマラヤ山さんに集まり、野立姫命のたちひめのみことの再び神教しんけうを拜受はいじゆし、靈魂みたまに洗練せんれんを加へ、もつて完全無くわんぜんむ缺けつの宣傳使せんでんしとなり、地上ちじやうの世界せかいを救濟きうさいされよ」

と容かたちを改め言葉ことばおごそかに宣示せんじされた。遠さすに優美いうびにして愛情あいじやうあふ溢るるばかりの木花このはなひ姫命めのみことも、この時ときばかりは凜乎りんことして犯をかすべからざる威嚴あげんが備そなはつてゐた。諸神しよしんは思おもはずその威ゐに打たれて地上ちじやうに跪ひざまづき、感涙かんるいに咽むせんだ。鳴動めいどう刻々に激はげしく、遂つひに

は山頂より大爆發をなして中空に火花を散らし、得もいはれぬ光景を呈したのである。あゝ今後の天教山は、いかなる神靈的活動が開始さるであらうか。
(大正一一・一一・一〇 舊大正一〇・一二・一三 加藤明子録)

第二十六章 艮坤の二靈〔二二六〕

轟然たる大音響とともに突然爆發したる天教山の頂上より、天に向つて打ち上げられたる數多の星光は、世界の各地にそれぞれ落下した。

これは第四卷に示す地球の中軸なる大火球すなはち根底の國に落ちて、種々の艱難辛苦をなめたる各神の身魂の時を得て、野立彦命の神徳により地中の空洞(天の岩戸)を開き、天教山の噴火口に向つて爆發したのである。俗に地獄の釜の蓋が開くと云ふはこのことである。また『天の岩戸開き』と云ふのも、これらを指して云ふこともあるのである。

地上に散布せられたる星光は、多年の勞苦に洗練されて天授の眞靈魂に立替はり、ことに美はしき神人として地上に各自身魂相應の神徳を發揮することとなつた、これらの顛末を稱して、

『三千世界一度に開く梅の花』

と謂ひ、また各身魂の美はしき神人と生れて、神業に参加するの狀態を指して、
『開いて散りて實を結び、スの種子を養ふ』

といふのである。

かくして野立彦命は世の立替へ、立直しの先驅として、まづ世に落ちたる正しき神を一度に岩戸を開き、地獄の釜の蓋を開いて救ひたまひ、世界改造の神種と爲し給うたる最も深遠なる御經綸である。

却説木花姫命は、月照彦神以下の諸神を隨へ、天教山の中腹なる青木ヶ原に下り着きたまうた。ここには彼の銀橋を渡りてきたれる神々の數多集ひて、山上を見上げながら、木花姫命を先頭にあまたの供神とともに下りきたるを見て、一齊に手を拍ち喊聲をあげ、ウローウローと叫びつつ、踊り狂うて歓迎した。

神人は遙にこの光景を眺めて大に喜び、先を争うて青木ヶ原に息せききつて上りきたり、上中下三段の身魂の神政成就の神柱の揃ひしことを喜び祝し、手に手に木の皮を以て造れる扇を開き、前後左右に手拍子、足拍子を揃へ、ウローウローと叫びながら踊り狂うた。その有様は、あたかも春の野に男蝶女蝶の翩翩として、菜の花に戯るごとくであつた。神々の一度に手を拍ち祝詞を奏上する聲は、上は天を轟かし、下は地の萬物を震動させた。

かくのごとく天教山にては、上中下の身魂の神柱は、各自部署を定めて地上の世界を救済のために宣傳者となつて巡回し、かつ先に地上に散布されたる身魂は、美はしき神人と出世して各地に現はれ、この宣傳者の教を聞いて隨喜渴仰した。説く者と聞く者と意氣合するときは、神の正しき教は身魂の奥に沁みわたるものである。あたかも磁石の鐵を吸ひよせるごとき密着の關係をつくることが出来る。これらを稱して身魂の因縁といふ。

ゆゑにいかに尊き大神の慈言といへども、教理といへども、因縁なき身魂は、あたかも水と油のごとく反撥して、その効果は到底あがらない。後世印度に生れ

た釋迦の言に、

「縁なき衆生は度し難し」

と言つたのも、この理に據るのである。ゆゑに大神に因縁あるものは、この淺深厚薄に拘はらず、どうしても一種微妙の神の縁の絲に繋がれて、その信仰を變ふることはできない。

神諭にも、

「綾部の大本は、昔から因縁ある身魂を引寄して、因縁相應の御用をさせるぞよ」と神示されたのも、遠き神代の昔より、離るべからざる神縁の綱に縛られてをるからである。

「神が一旦綱をかけた因縁の身魂は、どうしても離さぬぞよ。神の申すことを背いて、何なりと致して見よれ。後戻りばかり致すぞよ」

との神示は、神の因縁の綱に繋がれてをるから、自由行動を取りつつ、一時は都合よく行くことあるも、九分九厘といふ所になつて、神よりその因縁の綱を引かるときは、また元の大橋へ返らねばならぬやうになるものである。

これを神諭に、
引つけ戻しの仕組
と示されてある。

さて木花姫命の宣示を奉じて、月照彦神、足眞彦神、少彦名神、太田神、祝部神、弘子彦神その他の神々は、折から再び廻轉しきたれる銀橋に打乗り、一旦中空を廻りながら、復び野立姫命の現はれたまへるヒマラヤ山に無事降下した。

ヒマラヤ山には、あまたの神人が夜を日についで、山の八合目以下の木を伐採し、大杭をあまた造り、頸槌を携へ地中にさかんに打込みつつあつた。月照彦神一行は、その何の意なるかを知らず、神人らに丁寧に一禮しながら、山上の野立姫命の神殿に向つて、隊伍肅々として参向したのである。

(大正一一・一一・一〇 舊大正一〇・一二・一三 外山豊二録)

あまぢわけのみこと 天道別命、つきてるひこのかみ 月照彦神一行は、ヒマラヤ山の頂上に漸くにして到着し、表門より

しゆくしゆく 肅々として列をただし玄關先に進入した。この宮殿を白銀の宮といふ。

たかやまひこ 高山彦、たかやまひめ 高山姫は慇懃に一行を出迎へ、ただちに奥殿に案内した。諸神人は襟を正しながら、純銀の玉を齎ける祭壇の前にすすんだ。この時、あまたの女性現はれて一行に一禮し、

たかてるひめのかみしゆくつぎよ ㊦ ただいま高照姫神出御あり ㊦

はうこく 報告し、あしばや 足早に奥深く姿をかくした。

しばら 暫くありて高照姫神は頭に銀色の莊嚴なる冠を戴き、あまたの神々の手をひき

なごら、いとう ながら、悠々として現はれたまうた。天道別命一行の神々はハツと驚かざるを得

なかつた。いっ 一たん豊國姫命及び高照姫命とともに、根の國底の國に退去したりと

おも 思ひゐたる高照姫命をはじめ、あまぢひめ 天道姫、あめのまみちひめ 天真道姫、ますみひめ 眞澄姫、すみよひめ 純世姫、ことたまひめ 言靈姫、たつ

よひめ 世姫、はぶりひめ 祝姫、おほたひめ 太田姫、いはとひめ 磐戸姫その他の女性は、きんぜん 欣然としてこの場に現はれたから

である。いづれも各自の妻神のみ、その面前に現はれたのである。されど神命を

まもり、たがひに目と目を見合せながら、ことと 言問ふことを控へ、あたかも唾の對面

そのままであつた。

このとき月照彦神は高照姫神にむかひ、

「恐れながら野立姫命は何れにましますぞ、吾らは一たび顔を得たし」と奏上した。

高照姫神は顔色やや憂ひを含みながら、

「野立姫命は今陰の守護なれば、表面貴神らと面會したまふこと能はず、天教

山もその如く、貴神は野立彦命に對面を許され給はざりしならむ、木花姫かはつ

て神慮を傳へられしごとく、妾も大神にかはつて神示を傳へむ、妾はすなはち野

立姫命の代理と心得られよ」

と宣示された。そして高照姫神はいぶかしげに、

「祝部神は何ゆゑ此處に來らざりしや」

と問ひたまうた。

神人一行は初めて祝部神の列座の中にあらざりしに氣がついた。その妻たりし

祝姫の面貌には、えもいはれぬ暗き影がさしてゐた。

『先づゆるゆる休憩あれ』

と高照姫神は一言を残して、神人とともに奥殿に入らせたまうた。

あまたの女神は列座の神人を名残惜しげに、振り返り振り返り見送りつつ奥殿に姿を隠した。祝姫の顔には涙さへ滴りてをるのが、ありありと目についた。

少彦名神は祝部神の所在を求めむと一行に別れ、しばし休憩の間を利用して正門を出で、神人の聲する方に向つて進み行つた。いたり見れば、あまたの神人は各自に大杭を建て、山の八合目あたりに巨大なる頸槌を振りあげながら、聲勇ましくうたひつつ汗みどろになつて働いてゐたのである。よくよく見れば涼しき聲をはりあげて捻鉢巻の大活動をはじめてゐるのは、行方不明となつてゐた祝部神である。少彦名神は思はず、

『ヤア』

と叫んだ。

祝部神は平然として、

『ヨー』

と答へたまま、また元のごとく聲はりあげて、頸槌をもつて大杭の頭を亂打しつ
つ歌つてゐた。その歌にいふ、

☞ 打てよ打て打てどんどん打てよ

奈落の底まで打ち抜けよ

地獄の釜の底までも

打つて打つて打ち抜けよ

よいとさつさ、よいとさつさ

と一生懸命に面白さうに側目もふらず、神人とともに活動しむたり。

少彦名神は祝部神の頸槌を取りあげ、その手を無理にひいて門内に入らむとす

るとき、祝部神は頭に手をあげ、

☞ ああしまつた

と一言を發した。見れば頭に戴きし冠も、木花姫命より授かつたる被面布も残ら

ず遺失してゐたからである。

祝部神は少彦名神の手を振り切つたまま、一目散に元の場に走りゆき、遠近と冠および被面布の所在を探し求めた。幸にも冠は茨の針にかかり、風に揺られてブラブラとしてゐた。早速これを頭に戴き、遺失せし被面布の所在を探し求めた。數多の神人はてんでにその被面布を顔に當てて、無我夢中になつて、

「よーよー」

と呆れ聲を張りあげながら、山下を遠くあたかも望遠鏡を視るとき心地して、珍らしがつてゐた。

祝部神は神人らにむかひ、

「その被面布は、吾に返させたまへ」

といふを、神人らは佛頂面をしながら忽ち大地に投げ捨てた。祝部神は、

「勿體なきことを爲す馬鹿者かな」

と呟きながら、手ばやく拾ひあげて懷中に納めた。そして再び正門に向つて突進しきたりぬ。

すくなひこなのかみ
少彦名神は依前として門前に停立し、祝部神の歸るを待ちつつあつた。二神は
やつと安心しながら門内に入らむとするとき、祝姫は涙の顔をおさへながら、あ
わただしく走りきたるに出會した。互に顔を見合し、無言のまま二神は休憩の間
に進み入つた。祝姫はやや安堵の體にて、いそいそとしてまたもや奥殿に姿を隠
した。

(大正一一・一一・一〇 舊大正一〇・一二・一三 井上留五郎録)

第二十八章 地教山の垂示〔二二八〕

ややあつて、高照姫神は以前のごとく、あまたの女性をともなひ祭壇の前に現
はれ、神人らに向つて、太き竹を割りたるその内側に、
☐ 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも
大地は泥に浸るとも 誠の力は世を救ふ

誠まことの力ちからは世よを救すくふ□

と書かきたるをいちいちてわた一々手渡しされた。神人かみかみらは垂訓すゑくんを記しるしたる大竹おほだけの片割かたわれを背せに確しかとくくりつけ、これより諸方しよほうを宣傳せんでんの旅たびに出でることとなつた。首途かどでの祝いはひとして珍めづらしき酒肴しゆかうは持もち出だされ、女神めがみはここに千秋萬歳せんしうばんざいらく樂らくを唱となへ、かつ淑しとやかなる舞曲ぶきよくを奏かなでて一行いつかうの首途かどでを祝しゆくしたのである。高照たかてるひめのかみ姫神かみは奥殿おくでんへ、天道あまぢわけのみこと別命いつかう一行もんぜんは門前もんぜんへ、一歩いつぽ々々互たがひの影かげは遠とほざかりつつ、ここに嬉うれしき悲かなしき別わかれを告つげたのである。祝部神はふりべのかみはこの垂示すゑしを受取うけとるや否いなや、酒宴しゆえんの席せきに坐ざするのも焦もどかしがり、あわてて門前もんぜんに飛とび出だし、一目散いちもくさんにヒマラヤ山さんを、ドンドンと四邊しへんに地響ぢひびきを立たてながら下くだつて行く。山麓さんろくには數多あまたの神人かみかみ集あつまり、

「呑のめよ騒さわげよ一寸先いっすんさきや暗やみよ

暗やみの後あとには月つきがで出る

時鳥聲ほととぎすこゑは聞きけども姿すがたは見みせぬ

姿見すがたみせぬは魔まか鬼おにか□

と一生懸命に果實の酒に酔ひ、踊り狂うてゐる。祝部神はこれを聞くと忽ちムツ
として、負けず劣らず聲を張りあげ、

三千世界一度に開く梅の花 開いて散りて實を結ぶ

須彌仙山の時鳥 月日や土や空氣なぞ

深き御恩を忘れるな この世を救ふ生神は

天教山にましますぞ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 大地は泥に浸るとも

誠の神は世を救ふ 誠の神は世を救ふ

と反抗的に謠ひはじめた。神人らは此聲を聞くとともに、頭は割るるごとく、胸
は引き裂かるるごとき苦痛を感じた。そして此言葉を發する神は吾らを苦しむる
悪神ならむと云ひながら、四方八方より祝部神にむかつて棍棒、石塊などをもつ
て攻め圍み、一寸の逃げ道もなきまでに立ちふさがつた。神人らの一行は、ゆる

ゆるこの山を下りきたり、途中この光景を見てやや思案にくれてゐたが、いづれも一同に、

□ 三千世界一度に開く梅の花

と謡ひはじめた。何れの神人も、またもや神々に向つて、

□ 吾を苦しむる悪神なり

といひつつ、多数を楯に攻め圍んだ。神人らはたちまち被面布を被りながら、なほも力を籠めてこの歌をうたつた。被面布を被れる神人の姿は、山麓の者の目には止まらず、ただ不快なる聲の聞ゆるのみであつた。

祝部神はこれを見て、われもまた、被面布を被らむとし、あわてて黒色の被面布を顔に當て、一生懸命に、

□ 三千世界一度に開く梅の花

を高唱した。命の姿は見えなくなつた。されど黒布のあたりし部分のみは中空にありありと残つてゐた。神人らはその黒布を目がけて打つてかかつた。たちまち中空に聲あり、

「ヒマラヤ山は今まで、ヒマラヤ彦、ヒマラヤ姫の管轄なりしも、今は高山彦、高山姫の專管することと神定められたり。汝らヒマラヤ彦の部下なる神人よ、一時も早く天の聲に聞け、天の聲に目を覺ませ。是よりヒマラヤ山を改めて地教山と稱ふべし」

と最も莊重なる聲の中空に聞ゆるのであつた。數多の神人はこの聲に驚き、いづれも大地に平伏して謝罪した。祝部神は、ここぞと云はぬばかり又聲はりあげて、
「三千世界一度に開く梅の花云々」

と節面白く唱へ出した。神人らは頭をかかへ、耳を押へ目を閉ぢ、
「許せ許せ」

といひつつ四這ひとなつて轉げまはる。

ここに何處よりともなく天の磐船現はれ來り、天道別命その他の一行を乗せ、
天空高く東西南北におのおの其姿を隠してしまつた。

(大正一一・一一〇 舊大正一〇・一二・一三 加藤明子録)

第五篇 宇宙精神

第二十九章 神慮洪遠（二二九）

天道別命、月照彦神以下の宣傳神選定され、各地に配置されてより、今まで天
空を廻轉しるたる金銀銅の天橋の光は、忽然として虹のごとく消え失せ、再び元
の蒼天に復し、銀河を中心に大小無数の星は燦然たる光輝を放射し出した。

時しも東北の天にあたつて十六個の光芒強き大星一所に輝き始めた。その光色
はあたかも黄金のごとくであつた。又もや西南の天にあたつて十六個の星光が一
所に現はれた。その光色は純銀のごとくであつた。地上の神人は、この變異に對
して或は五六七聖政の瑞祥と祝し、あるひは大地震の兆候となして怖れ、あるひ
は凶年の表徴となし、その觀察は區々にして一定の判断を與ふるものがなかつた。
忽ちにして蒼天墨を流せしごとく暗黒となり、また忽ちにして滿天血を流せし

ごとく眞紅の色と變じ、あるひは灰色の天と化し、黄色と化し、時々刻々に雲の色いろの變り行く様は、實に無常迅速の感を地上の神人に與へたのである。地は又ちまち暴風吹き荒み、樹木を倒し、岩石を飛ばし、神人を傷つけ、妖氣地上を鎖すと見るまに、たちまち光熱強き太陽は東西南北に現出し、暑熱はなはだしく、地上の草木、神人その他の動物はほとんど枯死せむとするかと思へば、寒風俄に吹き來り、雹を降らし、雷鳴滿天に轟き、轟然たる音響は各所に起り、遠近の火山は爆發し、地震、海嘯ついで起り、不安の念にかられざるものはなかつた。

「かなはぬ時の神頼み」とでも云ふのか、今まで神を無視し、天地の恩を忘却しむたる地上の神人は、天を仰いで合掌し、地に伏して歎願し、その窮状は實に名状すべからざる有様であつた。烈風の吹き通ふ音は、あたかも猛獸の咆哮するがごとく、浪の音は萬雷の一齊に轟くがごとく、何時天地は崩壊せむも計り難き光景となつて來たのである。

かくのごとき天地の變態は、七十五日を要した。このとき地上の神人は、神を畏れて救ひを求むるものあれば、妻子、眷屬、財産を失ひて神を呪ふものも現は

れた。中には自暴自棄となり、ウラル彦神の作成したる宣傳歌を高唱し、

☐の呑めよ騒げよ一寸先や暗よ

暗の後は月が出る

月には村雲花には嵐

嵐過ぐれば春が来る

ヨイトサ、ヨイトサ、ヨイトサノサツサ

と焼糞になつて踊り狂ふ神は大多数に現はれた。

そもそも七十五日間の天災地妖のありしは、野立彦神、野立姫神を始め、日の大神、月の大神の地上神人の身魂を試したまふ御經綸であつたのである。このとき眞の月日の恩を知り、大地の徳を感得したる誠の神人は、千中の一にも如かざる形勢であつた。

大國治立尊は、この光景を見て大に悲歎の涙にくれたまうた。

ア、わが數十億年の艱難辛苦の結果成れる地上の世界は、かくも汚れかつ曇りたるか。如何にして此の地上を修葺し、拂拭し、最初のわが理想たりし神國淨土に改造せむや」

と一夜悲歎の涙にくれ給うた。大神の吐息を吐き給ふ時は、その息は暴風となつて天地を吹きまくり、森羅万象を倒壊せしむるのである。大神の悲歎にくれ落涙し給ふ時は、たちまち強雨となりて地上に降りそそぎ、各地に氾濫の災害を來す事になるのである。

大神はこの慘状を見給ひて、泣くにも泣かれず、涙を體內に流し、吐息を體內にもらして、地上の災害を少しにても軽減ならしめむと、隠忍し給ふこと幾十萬年の久しきに亘つたのである。大國治立尊の堪忍袋は、もはや吐息と涙もて充され、何時破裂して體外に勃發せむも計りがたき状態となつた。

されど至仁至愛の大神は、宇宙萬有を憐れみ給ふ至情より、身の苦しさを抑へ、よく堪へ、よく忍び、もつて地上神人の根本的に革正するの時機を待たせ給ふのである。されど御腹の内に充ち満ちたる神の涙と慨歎の吐息は、もはや包むに由

なく、少しの感激にも一時に勃發破裂の危機に瀕しつつあつた。ア、宇宙の天地間は、實に危機一髪の境に時々刻々に迫りつつある。

大神は多年の忍耐に忍耐を重ね給ひしより、その御煩慮の息は、鼻口よりかすかに洩れて大彗星となり、無限の大宇宙間に放出されたのである。一息ごとに一個の大彗星となつて現はれ、瞬くうちに宇宙間に數十萬の彗星は、宇宙の各所に現はれ、漸次その光は稀薄となつて宇宙に消滅した。

されどその邪氣なる瓦斯體は、宇宙間に飛散し、遂には鬱積して大宇宙に妖邪の空気を充滿し、一切の生物はその健康を害し、生命を知らず識らずの間に短縮する事となつた。ゆゑに古來の神人は、短くとも數千年の天壽を保ち、長きは數十萬年の壽命を保ちしもの、漸次短縮して今は天地經綸の司宰者たる最高動物の人間さへも、僅かに百年の壽命を保し難き慘状を來すことになつた。

ア、無量壽を保ち、無限に至治泰平を樂しむ五六七出現の聖代は、何時の日か來るであらう。吾人は靈界における大神の御神慮と、その仁惠を洞察し奉る時は、實に萬斛の涙のただよふを感じざるを得ない。

神諭に、

「戀し戀しと松世は來いで、末法の世が來て門に立つ」と述懐されたる大國治立尊の御聖慮を深く考へねばならぬ。

(大正一一・一一・一一 舊大正一〇・一二・一四 外山豐二録)

第三〇章 眞帆片帆〔二三〇〕

さしも暗澹たりし天地の光景はここに一變して、空には燦然たる天津日の影うららかに下界を照し、地は東風おもむろに吹いて紺碧の海面に漣を立て、これに日光映射して波のきらめく有様は、あたかも鯛魚の鱗を敷き詰めたるがごとき地中海の渡船場に、息急き切つて現はれた宣傳使があつた。今や船は靜かな風に眞帆を打揚げ、西南に向つて出帆せむとする時である。

ここに現はれた宣傳使は、太き竹に教示を記したるを甲斐々々しく左肩より右

の腋下に斜交に背負ひながら、紫の紐もて乳房のあたりに確と結び、片手に杖をつきながら、紫の被面布を被り、ときどき左の手をもつてこの被面布を額のあたりまでめぐり上げ、右の手にて鼻柱をこざあげ、そのまま右の眼瞼より左の目尻にかけてつるりと撫で、再び鼻の下を手の甲にて擦り、左の手にて再び被面布を顔に覆ひながら乗船を迫つた。

あまたの船客は、この異様の扮装に怪訝の眼を見張つた。船戸神は快く右手を揚げてさしまねき、早く乗れよとの暗示を與へた。宣傳使はつかつかと乗場に近づき、船を目がけて飛び込んだ。その響に船は激動して、疊のごとき海面に時ならぬ波の皺を描いた。海邊の長き太き樹は海底に向つて倒まにその影を沈め、波につれて龍の天に昇るがごとく、樹木の幹は左右に蜿蜒として、地上目がけて上り來るのであつた。

空には一點の雲なくまた風もなき海面は、あたかも玻璃鏡を渡るがごとく、帆は痩せ萎れ、船脚遅々として進まず、この海上に漂ふこと數日に及んだのである。神人らは四方山の無駄話に時を費し、無聊を慰めつつあつた。

日は西山に没し、海上を飛び交ふ諸鳥は罫を求めておのおの巢に歸り行く。半弦の月は西天に懸り、利鎌のごとき光を海上に投げた。空は一面に天書の光梨地色に輝き、月は天の河を流れて海の涯に沈むの感があつた。

海の底には一面の星光輝き、天にも銀河横たはり、海底にもまた燦爛たる銀河流れ、河二つ月二つ、實に蓮華の臺に身を托したる如き爽快の念に打たれつつ、静かに船は西南に向つて進んでゐる。

船は渡る海底の空を、棹は穿つ海底の星を、海月の幾十百ともなく波に漂ふ有様は、俄に天上の月幾十ともなく降り來りて、船を支へまもるの感じがしたのである。

昨日の慘澹たる天地の光景に引換へ、今日のこの静けさは、夕立の後の快晴か、嵐の後の静けさか、天地寂として聲なく、蚯蚓のささやく聲さへ耳に通ふやうであつた。

連日の航海に船中の神人は何れも無聊に苦しみ、船の四隅には、

「アーアー」

と大口おほぐちを開あけて缺伸あくびをする神人かみが現あらはれた。何れもこの缺伸あくびに感染かんせんして、一齊いつせいに両手りやうての拳こぶしを握にぎり頭上づじやう高く延長えんちやうしながら、大口おほぐちを開あけて、

「ア—ア—」

と云いひながら、缺伸あくびを吾劣われおとらずと始はじめかけた。一時いつときばかりはあたかも缺伸あくびの競争きやうそ場うばのごとき感かんがあつた。最早もはや缺伸あくびの種たねも盡つき、船ふねの一隅いちぐうには邊あたりをはばかりてか、小聲こしゑに鼻唄はなうたさへ謠うたふ神人かみが現あらはれた。これに感染かんせんされてか、またもや小聲こしゑに何事なにことをか小唄こうたを謠うたひ始はじめた。遂つひには狎なれて大聲おほごゑをあげ、遠慮會釋ゑんりよゑしやくもなく船中せんちゆうに立たち上あがり、両手りやうてを頬ほほに當あてながら、

「飲のめよ騒さわげ—よ一寸先いっすんさきあ—闇やみ—よ—

闇やみの—あと—には—月つきが—でる—

船ふねが—浮うくなら—心こころも—浮うかせ—

心こころ沈しづめば—船ふね沈しづむ—

さあさ浮ういたり浮ういたり浮ういたり浮ういたりな—

浮ういたー浮う世きよはどうなるとままよー

儘ままにならぬが浮う世きよと云いへどー

わしはー時じ節せつで浮ういてーゐる

時ほととぎす鳥すこゑ聲こゑは聞きけどもー姿すがたは見みせぬ

見みせぬ姿すがたは魔まか鬼おにか

若もしも鬼おに奴めがで出でて來きたら

手て足あしを縛しばりー角つのを折をり

叩たたいて炙あぶつて食くてしまへ

たちとへ牛うし虎とら狼おおかみ獅子ししも

力ちからのーよわき山やま羊ひつじ

猿さるの千せん疋びきー萬まん疋びきもー

掻かいて集あつめて引ひき縛しばり

西にしの海うみへとさらりとほかせ

さらりとーほかせー

よいよいーよいとさのーよいとさつさ』

神人らは異口同音に聲を合して、節面白く手を拍つて謠ひ始めた。

宣傳使は默然としてこの騒ぎを心なげに、見るともなしに眺めてゐた。暫くあつて神人らは疲労を感じたと見え、さしも騒がしかりし波の上も、水を打つたる如くたちまち静肅に歸し、風の音さへも聞えぬ閑寂の氣に打たるばかりになつた。

宣傳使はやをら身を起し、船中の小高き所に立ち現はれ、涼しき聲を張りあげて、

□ 高い山からー谷底見れば 憂しや奈落の泥の海

三千世界一度に開く梅の花 開いて散りて實を結ぶ

月日と土の恩を知れ この世を救ふ生神は

天教山に現はれる この世を教ふる生神は

地教ちけうの山やまにあらはれた
朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも
たとへ大地だいちは沈しづむとも
誠まことの力ちからは世よを救すくふ
誠まことの力ちからは世よを救すくふ

と手てを拍うち足踏あしふみ轟とどろかし舞まひ狂くるふ。

神人かみがみらはこの聲こゑに釣つり出ださるる心地こころして、一齊いっせいに立たち上あり、手てを拍うち足踏あしふみ轟とどろかし、一心いっしん不亂ふらんに興きように乗のりて踊をどり狂くるふ。

このとき船中せんちゆうの一隅いちぐうより、苦々にがにがしき面構つらまへの巨大きよだいなる神人しんじんは、すつくと立たち上あり、宣傳使せんでんしをはつたと睨ねめつけた。その光景くわうけいは、あたかも閻羅王えんらわうの怒髮どはつてん天てんを衝ついて立たち現あらはれたごとくであつた。あゝこの神人かみがみは何物なにものならむか。

(大正一一・一一・一一 舊大正一〇・一二・一四 井上留五郎録)

第三一章

萬波洋々ばんばやうやう〔二三一〕

阿修羅王のごとく閻羅王のごとき形相凄じき神は、巨眼を開き、船中の神人ら

を睨めつけながら、

神人らよ、餘が宣示を耳をさらへてよく承はれよ

と頭上より浴びせかけるやうに吠鳴りつけた。これは牛雲別である。

此方の宣傳使は例の祝部神である。彼は無雜作に打ち笑ひながら、

一二三四五六七八九十百千萬 百の千種も萬のものも

天地の神の御恵に 洩れたるものは塵程もなし

海の底にも光あり 山の尾上も河の瀬も

光りに光る今の世を 何と思ふか盲神

盲の杖を失うた 苦しき報いは目のあたり

あたるは罰と河豚の肉 邊り構はず吠え猛る

四足神の哀れさよ 角の生えたる牛雲別の

身の果こそは哀れなり 身の果こそは哀れなり

と又もや手を振り足踏み鳴らして、四邊構はず傍若無神の舉動の大膽さに、何れも呆れて祝部神の全身に目を注いだ。

牛雲別は、アーメニヤの野に、螢火のごとき光を現はすウラル彦の命により、宣傳使として此處に現はれた。彼は強烈なる酒を大口開いてがぶがぶと牛飲しながら、あまたの神人らに見せつけ、

酒は百薬の長と云う 命の水を飲まざるか

飲めば心は面白い 壽命長久千秋萬歳樂のこの薬

飲まぬは天下の大馬鹿者よ たはけた面してぶるぶると

ふるひ苦しむ青瓢箪 酒を飲んだら顔の色

朝日の豊榮昇ること 輝き渡る血色清し

空に輝く月の夜に 心爽か氣はさらり

さらりさらりと物事は 酒でなければ運ばない

酒は命の親神ぞ 親を知らない子があるか

親おやを知らぬは鬼おに子こぞや 鬼おにを殺ころすはこの酒さけぞ

酒さけの肴さかなは祝部はふりべの 神かみの舌したをば引き抜ぬいて

作つくり「なます」にして喰くらへ 暗くらい暗くらいと吐ぬかす奴やつ

酒さけを飲のんで見みよ赤あかくなる 赤あかい心こころは神心かみこころ

赤あかい心こころは神心かみこころ 暗くらい心こころの祝部はふりべが

眞ま赤かな虚言うそを月讀つきよみの 月夜つきよに釜かまをぬかれたる

あきれ顔がほして目まのあたり 吠面ほえづらかわくが面白おもしろい

これこれを肴さかなに皆みなの奴やつ おれおれが今いま出だすこの酒さけを

遠慮えんりよ會釋えしやくも梨地なしぢの杯つぎに 盛もつて飲のめ飲のめ飲のんだら酔よへよ

酔ようたら管くだまけ管くだまきや機はたが 織おれるか織おれぬかおりや知らぬ

知しらぬが佛ほとけほつとけ捨すてとけ 一いっ寸すんさきは暗やみよ

暗やみの後あとには月つきが 出でる あまあまり無聊むれうに時鳥ほととぎす

聲こゑはすれども姿すがたは見みせぬ 見みせぬ姿すがたは鬼おにか魔まか

鬼おにの念佛ねんぶつわしや鬼來きらい きらひな奴やつに目めも呉くれな

好きなお酒に酔ひつづれ

宵に企んだ梟よひ たく ふくろどり

袋の底を叩いて見たら

誰の心も同じ事たれ こころ おなじこと

酒の嫌ひな神なかる

濟まし顔して負け惜しみす がほ ままを

豪そな面して力むより

些しは顔の紐ほどけすこ かほ ひも

佛に地獄で會うたよな

この甘酒の味を知れほとけ ぢごく あ うまざけ あぢ し

酔うて酔うて酔ひつづれ

酔うたらよいぢやないかよ よ

よいよいよいのよいのさつさ

酒酒、酒酒さつさ さつさ

と頻りに祝部神の宣示にたいして防禦線を張り、座席の傍より二樽の強き酒を出しき はふりべのかみ せんじ ばうぎよせん は ざせき かたはら ふたたる きつ さけ だ

し、數多の杯を船中にふり撒いた。

神人は猫に鼠を見せたごとく喉をごろごろ鳴らし、唇に唾をため、羨ましげかみがみ ねこ ねずみ み のど ぐろぐろ な くちびる つばき うちや

に酒樽に目を注いだ。中には狐が油揚を見せつけられたやうな心地となつて、牛さかだる め そそ なか きつね あぶらあげ み み こころち うし

雲別の樽の鏡を開くを待たず、飢虎のごとく樽を目がけて飛びつく上戸の神人もくもわけ たる かがみ ひら ま きこ たる め じようこ かみ

現はれた。俄に船中は春めき渡り、酔の廻るにつれて、神人らは平手をもちて舷を叩き、拍子をとり舞ひ始めた。

「来るか来るかと濱へ出て見れば 濱の松風音もせぬ

音に聞えた龍宮海の 乙姫さまでも呼んで来て

酌をさしたら面白からう 癩に觸るは祝部神よ

癩にさはるは祝部神よ 杓で頭を砕いてやるか」

ポンポンポンと舷をたたき、遂には両手で自分の額を無性矢鱈に叩いて踊り狂うた。

祝部神は元來酒が好きである。喉から手の出るやうにその杯が取りたくなつた。喉の邊りに腹の蟲が込み上つて、ぐうぐうと吐かすのである。祝部神はこれこそ神の試みとわれとわが心が心を制し、思はず知らず指を喰へ、遂には激昂してわれとわが指を喰ひ切り、始めて氣がつき、又もや聲張り上げて、「三千世界一度に開

く云々」の歌をうたひ始めた。

(大正一一・一一・一一 舊大正一〇・一二・一四 加藤明子録)

第三二章 波瀾重疊(一二三二)

神人らは強き酒にへべれけに酔ひつぶれ、ほとんど船中の客たる事を忘るる位であつた。このとき祝部神の「三千世界云々」の歌に神人らは何ゆゑか、頭を鐵槌にて打ち碎かれ、胸は引き裂かるるがごとき苦痛に襲はれた。

夜は深々と更け渡り、萬物寂として聲なき丑満頃となつた。聞ゆるものはただ神人らの酒に酔ひ潰れて呻く苦悶の聲のみである。折しも東北の空に當つて一團の黒雲が現はるよと見る間に、前後左右に電光石火の速力をもつて押し擴がり、満天墨を流したるがごとく、海上また咫尺を辨ぜざるに至つた。忽ち颯風吹き起り、さしも平和の海面は、ここに虎嘯き龍躍り、海馬は白き浪の鬣を振うて船體

に噛みつき始めた。船は木葉のごとく中天に捲き上げらるるやと見る間に、又もや浪と浪との千仞の谷間に突き落され、檣折れ、舵は「むし」られ、艦は中心より折れて進退の自由を失ひ、ただ風と浪との翻弄するに任すより外は無かつた。神人らは一度に酔も醒め、顔は眞青となつて、地獄より火を貰ひに來た餓鬼の相好の其儘となつて仕舞つた。鼻つままれても分らぬ眞暗な海上に潮を浴び、全身濡れ鼠となつて震ひ戦くその光景は、死線を越えて處の騒ぎでは無かつた。忽ち前方に當つて一道の光明が赫灼と放射するのを見た。これは高杉別の從者杉高の瑠璃光の玉の光であつた。船戸神は船體をその光の方に向けむとしたが、舵は千切られ、艦は折れ、檣は挫け、帆はむしられて如何ともするよしなく、ただ天を仰ぎ救助を乞ふのみであつた。酒のために空元氣を装うてみた數多の神人らは、恐怖心からられ、青菜に鹽か、蛭に鹽、しほしほとして辛い目に遇ふ事よと溜息を吐き、中には卑怯にも泣聲をしぼる者さへ現はれた。祝部神は此處ぞと言はぬばかり暗中聲を勵まし、荒れ狂ふ怒濤の浪音を壓するばかりの大音聲で、

三千世界一度に開く梅の花 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 牛雲別は浪に浚はれ死ぬるとも

酒を喰らうた神々は 海の藻屑となるとも

何と鳴戸や瀬戸の海 命の瀬戸のいまはの際に

神の恵も白波の 馬鹿者どもよ

命惜しくば天地に詫びよ 詫が叶へば許してやるぞ

一二三四五六七八九十百千萬 萬の罪咎さらりと海に

流してしまへ 涙ばかりを流すぢやないぞ

心の垢も身の罪も 流して泣かせて腹の中

泣かぬ日はなき時鳥 八千八聲の血を吐いて

へどまで吐いて今のさま 苦しいときの神頼み

それでも頼まにや助からぬ よいとさ、よいとさ

暗に鐵砲數打ちやあたる 何でも構はぬ神様祈れ

よいとさのよいとさ 生きるか死ぬかの瀬戸際ぞ

一つの命を瀬戸の海

一つの島なる一つ松

一つの玉の御光に

心を照して改めよ

荒浪如何に高くとも

荒風如何に強くとも

現はれ出でたる神島の

神の光に村肝の

心の空も凧ぎわたり

浪路も凧ぎて珍の島

よいさよいとさ

宵から喰うた酒の酔

一度に醒ませよ心の迷ひ

迷ひの果ては悟りの船よ

覺りは救ひの船と知れ

と止め度もなく、口から出まかせに歌った。祝部神の容貌は暗夜のため確と見ることとは出来なかつた。されどその謠ひ振りによつて、その相貌や手足の振り方など、歴然白晝を見るが如き感がした。忽ち船底がガラガラと音がした。見れば一つの島にうち上げられてゐた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一一・一一 舊大正一〇・一二・一四 加藤明子録)

第三三章 暗夜の光明（二三三）

一行は先を争うて暗中摸索、島に驅上つた。山頂には一道の光明暗を縫うてサーライトのごとく、細く長く海面を照らしてゐる。この島は地中海の一孤島にして牛島といひ、また神島、炮烙島と稱へられた。現今にてはサルヂニア島と云ふ。またこの海を一名瀬戸の海と云ふ。

かつて黄金水の靈より現はれ出でたる十二個の玉のうち、十個までは邪神竹熊一派のために、反間苦肉の策に乗ぜられ、龍宮城の神人が、その持玉を各自争奪されたる時、注意深き高杉別は、従者の杉高に命じ、その一個たる瑠璃光色の玉を、竊にこの島の頂上なる岩石を打ち破り、深くこれを祕藏せしめ、その上に標示の松を植ゑ、杉高をして固くこれを守らしめつつあつた。

しかるに天教山の爆發に際し、天空より光を放つて十一個の美はしき光輝を發せる寶玉、この瀬戸の海に落下し、あまたの海神は海底深くこれを探り求めて杉高に奉り、今やこの一つ島には十二個の寶玉が揃うたのである。かかる不思議の

現象は、全く杉高がこの孤島に苦節を守り、天地の神命を遵守し、雨の朝、雪の夕にも目を離さず、心を弛めず、嚴格に保護せしその誠敬の心に、國祖大神は感じ給ひて、ここに十一個の玉を下し、都合十二個の寶玉を揃へさせ、もつて高杉別および杉高の至誠を憫れませ給うたからである。これより杉高は高杉別と共に、この玉を捧持して天地改造の大神業に奉仕し、芳名を萬代に傳へた。この事實は後日詳しく述べることにする。

咫尺を辨ぜざる暗黒の夜に、辛うじてこの島に打上げられたる神人らは、あたかも地獄にて佛に會ひしごとく、盲龜の浮木に取着きしがごとく、死者の冥府より甦りたるがごとく、枯木に花の開きしがごとく、三千年の西王母が園の桃花の咲きしごとく嬉しさと感謝の念に驅られ、祝部神が暗中に立ちて、

三千世界云々

の歌を謠ふ聲を蛇蝎のごとく忌み嫌ひし神人も、ここに本守護神の靈威發動して、天女の音楽とも聞え、慈母の愛の聲とも響いた。神人らは一齊に聲を揃へて、祝部神の後をつけ、

三千世界一度に開く梅の花云々
と唱へ出した。

祝部神は、これに力を得て、
又もや面白き歌を謠ひ始めた。

世は烏羽玉の暗【深】く
罪さへ【深】き現世の

神の【不覺】をとりどりに
【深】くも思ひめぐらせば

海底【深】く棲む【鱧】の
餌食となすも食ひ足らず

邪曲を助くる神心
【深】く悟りて感謝せよ

海より【深】き神の恩
恩になれては又もとの

【深】き泥溝にと投げ込まれ
奈落の底の底【深】く

【不覺】をとるな百の神
神の恵は目の當り

邊り輝く瑠璃光の
光は神の姿ぞや

光は神の姿ぞや
【牛】雲別も角を折り

心の【雲】を吹き拂ひ
心の岩戸を押し【別】けて

神かみの光ひかりを稱たたへかし 牛雲うしくも別わけを始はじめとし

百ももの神人かみがみ諸もろ共ともに 心こころの暗やみを照てらせよや

心こころの暗やみの戸と開ひらけなば 朝日あさひ眩まばゆき日ひの光ひかり

汝なれが頭上づじやうを照てらすべし 朝日あさひの直刺たださす一ひとつ島しま

夕日ゆふひの輝かがやく一ひとつ松まつ 常磐ときはの松まつのそねの根もと

千代ちよも動うごかぬ巖いはの根ねに 秘ひめ置おかれたる瑠璃光るりくわうの

玉たまの光ひかりに【あやかり】て 心こころの玉たまを磨みがくべし

三千さんぜん世界せかいの珍寶うづたから この神島かみじまに集あつまりて

十二じふにの卵たまごを産うみ竝ならべ 松まつも千歳ちとせの色いろ深ふかく

枝葉えだはは繁しげり幹みき太ふとり 空そらに伸のび行ゆく杉高すぎたかの

功績いさををひらく目まのあたり 高杉たかすぎ別わけの誠忠せいちうも

共ともに現あらはれ北きたの島しま 蓬萊山ほうらいざんも畜ただならず

この神島かみじまは昔むかしより 神かみの隠かくせし寶島たからじま

寶たからの島しまに救すくはれて 跣はだはだか裸はだで歸かへるなよ

神かみより朽くちぬ御寶みたからを腕うでもたわわに賜たまはりて

叢雲むらくも繁しげき現世うつしよの萬よろづのものを救すくふべし

われと思おもはむ神等かみたちはわれに續つづけよ、いざ續つづけ

言觸ことぶれがみ神の樂たのしさは體主たいしゆれいじゆう靈從れいじゆうの小欲せうよくに

比くらべて見みれば眼めの埃ほこり埃ほこりの欲よくに囚とらはれて

眼まなこも眩くらみ村肝むらきもの心曇こころくもらせ暗やみの夜よに

暗路やみぢを迷まよふ海うみの上うへ心の波なみを【なぎ】立たてて

この世よを造つくり始はじめたる神かみの御息みいきの風かぜを【吸す】ひ

【酸す】いも甘あまいも辨わきまへてこの世よを【救すく】ふ神かみとなれ

神かみの力ちからは目まのあたり邊あたり輝かがやく瑠璃光るりくわうの

光ひかりは神かみの姿すがたぞや光ひかりは神かみの姿すがたぞや

東雲しのめ近ちかき暗やみの空そらやがて開ひらくる常磐樹ときはぎの

松まつの根ね本もとに神集かむつどひ千代ちよ萬代よろづよも動ゆるぎなき

堅磐かきは常磐ときはの松心まつしころこの松心まつしころ神心かみしころ

神の心に皆復れ

神の心に皆復れ

かへれよ復れ村肝の

心に潜む曲津神

大蛇や金狐悪鬼共

國治立の大神の

御息の氣吹に吹拂ひ

拂ひ清めて神の世を

待つぞ目出度き一つ松

心一つの一つ島

心一つの一つ島

一二三四五六七八九十

百千萬の神人よ

百千萬の神人よ

それ今昇る東の

空見よ空には眞圓き

鏡のやうな日が昇る

心の鏡明かに

照らして恥づること勿れ

ああ惟神々々

みたま幸はひまませよ

三千世界の梅の花

一度に開く松の世の

松に千歳の鶴巢喰ひ

緑の龜は此島に

泳ぎ集ひて神の代を

祝ふも目出度き今日の空

千秋萬歳萬々歳

せんしうばんざいばんばんざい
千秋萬歳萬々歳

ヨイトサ、ヨイトサ、ヨイヨイヨイトサツサツサ

と祝部神の歌終ると共に、東天紅を潮して天の岩戸の開けし如く、日の大神は東の山の上に温顔を現はし、一つ島の神人らをして莞爾として覗かせ給うた。

ここに牛雲別は、危機一髪の神の試練に逢ひ、翻然としてその非を悟り、斷然酒を廢し、かつ三千世界の宣傳歌を親のごとくに欣仰し、寸時も口を絶たなかつた。牛雲別は祝部神に歸順し、祝彦と名を賜はり、杉高はまた杉高彦と改名し、ここに三柱は相携へて、大神の宣傳使となつた。

しかして、この十二個の寶玉は、天の磐船に乗せ、玉若彦の神司をしてこれを守らしめ、地教山の高照姫命の御許に送り届けられた。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一一・一一 舊大正一〇・一二・一四 外山豊二録)

第三四章 水魚の情交（二三四）

天にも地にも只一つ、風光明媚の一つ島、類稀なる瑞祥の、光を照らす神々の、心の空も晴れ渡り、和氣靄々として心天清朗一點の隔てもなく、各自に得物を携へて、諸神人は手を揃へ足曳の、山の尾上の山口の、神に願ひを掛けまくも、畏き神の御許しを、忝なみて千仞の、谷間に下り檣に、匹敵したる杉の大木を伐り倒し、檣に代へ艫を新に造り、乗り來し船に艫装して、いよいよ音に名高き一つ島、一つの松に名残を惜しみ、眞帆を上げつつ悠々と、油を流せし波の上、船の動搖に圓き波紋を描きながら、心も身をも打解けし、救の船の一蓮托生、修羅も地獄も波の上、水に流してをちこちの、話にふける面白さ、實にも目出度き高砂の、尉と姥とが現はれて、心の空の雲霧を、伊吹の狭霧に吹き拂ひ、心の底の塵埃、雁爪や箒に掻き拂ひたる、年の始めの春心地、和氣靄々として西南指して歛乃面白く出帆したりける。

空には鷗の幾千羽、前後左右に飛び交ひて、一行の船を祝し見送るかと思はる

るばかりの心地よき光景なりき。祝部神は眞先に口の扉を捻ぢ上げた。そして船中の神人らに向ひ、

「見渡すところ、貴下らはいづれも由緒ありげの神人らしく思はる。何の目的あつてこの海を渡り給ふや」

と問ひかけたるに、神人の中に最も秀でて骨格たくましき男は、膝を立直し、
「實は吾々は小郷の酋長であります、先つ頃よりの天變地妖に對し、吾郷の神

人たちの不安は一方ならず、東北の天に當つて煙火のごとき火光天に冲するかと見れば、大空には金銀銅色の三重の橋東西に架り、南北に廻轉し、暴風吹き荒み、

強雨頻に臻り、五風十雨の順を破り、雷鳴地震非時鳴動し、火山は爆發し、地上の神人色を失ひ、未來を憂慮すること言辭の盡す限りではありませぬ。加ふるに

東北の天に當つて、此頃又もや十六個の光星現はれ、日を逐うてその星は金線のごとく地上に向つて延長し、そのうへ西南の天に當り銀色の十六個の星同じく現

はれて、地上に日々接近しつつ、吾々神人に向つて何事か天地の神の暗示さるるごとき心地がしてならないのであります。それ故吾々は其星の地上に垂下するに

先だち、西南に向つてその真相を確め、郷の神人をして覺悟する所あらしめむと欲し、酋長の役目として、はるばる西南に向つて進むのであります。酋長の言葉を終るや否や、次席にひかへたる一柱の神人は、直にその後をつけて、

「なほも吾々として訝しきは、宵の明星何時の間にか東天に現はれて非常の異光を放ち、その星の周圍には種々の斑紋現はれ、地上の吾々は何事かの變兆ならむと心も心ならず、郷の神人選ばれて吾もまた西南指して進むのであります。果して何の象徴でありませうか」

と云つて祝部神の顔をちよつと覗いた。

祝部神は膝立直し、諄々として説き始めた。

「この天地は決して地上神人の力によつて造られたものではない。大宇宙に唯一柱まします無限絶對無始無終の靈力體の三徳を完全に具有し給ふ天主、大國治立尊と云ふ絶對無限力の神様が、この廣大無邊の大宇宙を創造されたのである。そしてこの宇宙には其身魂を別けて國治立尊と命名け、わが大地及び大空を守護せ

しめ給うたのである。しかるに世は追々と妖邪の氣充ち、地上の神人は神恩を忘却し、體主靈從の惡風は上下に吹き荒び、かつ私利私欲に耽り、至善至美の地上を汚し、そのうへ大蛇と金狐と邪鬼の惡靈に左右されて、上位に立つ神人は、遂に大慈大悲の國祖國治立尊を根底の國に神退ひに退ひ、暴虐無道の限りを盡した。それ故この宇宙には眞の統率神なく、神人日夜に惡化して、修羅、餓鬼、地獄、畜生の世界と墮して了つた。それがために地は震ひ天は亂れ、天變地妖頻に臻る。世の災は是にて足らず、一大災害の今將に來らむとする象徴あり。それ故、吾々は慈愛深き野立彦命、野立姫命の神勅を奉じ、地上の神人を悔い改めしめ、この災害を救ひ、大難をして小難に見直し、聞直し、宣直さむと、八王の聖位を捨て、かくも見すばらしき凡夫の姿と變じ、山野河海を跋渉して、救の道の宣傳を爲すのである。諺に云ふ、袖振り合ふも他生の縁、躓く石も縁のはしとやら、今や同じ一つの船に身を托し、天來の福音を傳ふる吾も、これを聽く汝ら神人らも決して偶然にあらず、必ず深き大神の惠の綱に共に結ばれたるものなれば、吾一言を夢々聽き落す勿れ」

と云つて手を伸べて海水を掬ひ、唇を潤しながら座を頹した。

竝る神人らはいづれも緊張し切つた面色にて、首を傾げながら一言も聞き洩らすまじと耳を澄まして聞き入りにける。

(大正一一・一一・一一 舊大正一〇・一二・一四 井上留五郎録)

第六篇 聖地の憧憬

第三五章 波上の宣傳〔二三五〕

この教示を、首を傾けて聞き入つた彼の酋長は、吐息を吐きながら再び口を開いて云ふ。

「天地の間に、果して貴下の仰せのごとき獨一眞神なる大國治立尊の坐しますとせば、何故に斯のごとき天變地妖を鎮靜せず、地上の神人をして恐怖畏縮せしめ、傍觀の態度を取り給ふか。いづくんぞ全智全能の神力を發揮して、世界を救助し給はないのでせうか。吾々は眞の神の存在について、大に疑ひを抱くものであります」

と云つて祝部神の教示を待った。

祝部神は、事もなげに答へて云ふ。

「宇宙萬有を創造し給うた全智全能の大神の經綸は、吾々凡夫の窺知する所ではない。吾らは唯々神の教示に隨つて、靈主體從の行動を執ればよい。第一に吾々神人として、最も慎むべきは【貪欲】と【瞋恚】と【愚癡】である。また第一に日月の高恩を悟らねばならぬ。徒に小智淺才を以て、大神の聖靈體を分析し、研究せむとするなどは以ての外の僻事である。すべて吾々の吉凶禍福は、神の命じたまふ所であつて、吾々凡夫の如何とも左右し難きものである。之を惟神といふ。諸神人らはわが唱ふる宣傳歌を高唱し、天津祝詞を朝夕に奏上し、かつ閑暇あら

ば「惟神靈幸倍坐世」と繰返すのが、救ひの最大要務である。吾々はこれより外に、天下に向つて宣傳する言葉を知らない」と云つた。

折しも再び日は西山に姿を没し、半圓の月は頭上に輝き始めた。この時又もや東北の天に當つて一塊の怪しき雲片が現はれた。祝部神は神人らに向ひ、

「彼の怪しき雲を見られよ」

神人らは一齊に東北の天を仰いで視た。祝部神は尚も語をついで、

「すべて神のなす業は、斯くの如きものである。今まで蒼空一點の雲翳もなく、月は皎々として中天に輝き、星は燦爛として満天に列を正し、各大小強弱の光を放つてゐる。地上の吾々凡夫は、實に無知識無勢力である。何時までも天空に明月輝き、星光燦爛たるべきものと、心に期する間もなく、忽然として一塊の怪雲現はれしは、果して何物の所爲であらうか。變幻出沒窮まりなく、神機無邊の活動はこれ果して何物の所爲であらうか。すべて宇宙間一物と雖も、原因なく因縁なくして現はるるものはない。しかしてその原因、因縁は到底凡夫の究めて究め

盡す限りではない。諸神人の中に、果して彼の一塊の怪雲は如何に變化するかを
知れる者ありや。恐らく一柱として之を前知したまふ神人はあらざるべし。吾々
は天地の神の教を説く宣傳使の身としても、一分先の黒雲の結果いかになりゆく
かを覺ること能はず、かくのごとき暗昧愚蒙の知識力を以て、神明の聖靈を云爲
し、神の存否を論争するがときは、あたかも夏の蟲の冬の雪を知らざるがごと
き愚蒙のものである。視られよ、彼の黒雲を、次第々々に四方に向つて擴大する
に非ずや。其の結果は雨か、嵐か、果た雪か、地震か、雷鳴か、天地の鳴動か、
吾々の知識力にては、到底感知する事能はず、唯地上の神人は、宇宙の大原因た
る大國治立尊の意思に柔順に隨ふのみである』
と舌端火を吐いて諄々と宣傳した。

神人らは祝部神の教示に耳をすませ、今更のごとく、神の無限絶對の靈威と力
徳と、其の犯すべからざる御聖體の不可測なるを感嘆しつつ、『惟神靈幸倍坐世』
と一齊に高唱した。

前日の喧騒を極めたる此の船は、今は全く祝詞の聲清き祭場と化して了つた。

折しもまばらなる雨、ぼつぼつと石を投げることく船中の神人らの身體を打つた。
俄然、寒風吹くよと見る間に、雨は拳のごとき霰を混へて降り注ぎ、これに打た
れて負傷する神人さへあつた。このとき祝部神は立上り、又もや、

☐ 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも 誠の神は世を救ふ

誠の神は世を救ふ 勇みて暮せ、神の造りし神の世ぢや

神から生れた神の子ぢや 力になるは神ばかり

神より外に杖となり 柱となるべきものはない

雨風荒き海原も 地震かみなり火の車

何の恐れも荒浪の 中に漂ふこの船は

神の恵みの御試し 喜び勇め神の恩

讚めよ稱へよ神の徳 天地は神の意のままぞ

天を畏れよ地をおそれ 畏れといつても卑怯心

出してぶるぶる慄ふでないぞ 神の力を崇むることぞ

如何なる災難來るとも 神に抱かれし吾々は

神の助けはたしかなり たしかな神の御教の

救ひの船に身を任せ 任せ切つたる暁は

千尋の海も何のその 海の底にも神坐せば

たとへ沈んだところゝで どこにも神は坐しますぞ

讚めよ稱へよ祈れよ歌へ 歌ふ心は長閑なる

春の花咲く神心 神の心になれなれ一同

一度に開く梅の花 一度にひらく梅の花

と歌まじりの宣傳を、又もや手眞似、足眞似しながら、際限もなく説き立てる。

船は辛うじて西南の岸に着いた。ここを埃の宮と云ひ、また埃の港とも云ふ。

一行は勇んで上陸した。海面を見渡せば、山嶽の如き荒浪、見るも凄じき音を立

てて踊り狂うてゐる。

第三六章

言靈の響(一二三六)

昔の昔、其昔

國治立の大神は

天地四方の神人の

拗曲れる靈魂をば

直さむために神柱

四方の御國に遣はして

世の立替へを知らせむと

東や西や北南

千々に其の身を竄しつ

雪の晨や雨の宵

虎棲む野邊も厭ひなく

神の救ひの言の葉を

科戸の風に吹き擴め

四方の國々隈もなく

行き渡りたる曉に

天教山に現はれし

野立の彦の大神や

木花姫の御指揮

地教の山に現はれし

野立の姫の大神の

宣示を背にいそいと

めぐり車のいとはやく

變る浮世の有様を

心にかくる空の月

つきせぬ願は神人の

靈魂、靈魂を立直し

清き神代に救はむと

わが身を風に梳り

激しき雨を浴びつつも

三千世界の梅の花

一度に開く常磐樹の

常磐の松の神の御代

心も清き木花の

開いて散りて實を結び

スの種四方に間配りし

神の恵を白浪に

漂ふ神こそ憐れなり

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令天地は倒に

地は覆へり天となり

天はかへりて地となるも

何と詮方千秋の

恨を胎すな萬歳に

神の恵の言の葉に
眼をさませ百の神

耳を敬だて聞けよかし
聞けば香ばし長月の

九月八日のこの經綸
九つ花の開くてふ

今日九日の菊の花
花より團子と今の世は

體主靈從の神ばかり
世は常暗と鳴門灘

渦まきのぼる荒浪に
浚はれ靈魂は根の國や

底の國へと落ち行きて
消えぬ地獄の火に焼かれ

或は氷の刃もて
無限の艱苦を「なめくじり」

蛙に出會うたその如く
天地はかへる蛇の群

蛇に等しき舌劍を
振ふは大蛇の惡神ぞ

その惡神に取りつかれ
素より清き大神の

靈魂と生れし神人は
知らず識らずの其間に

體主靈從となり果てぬ
體主靈從となり果てぬ

この慘状を救はむと
國治立尊もて

百の神々天教の
山に集ひて諸共に

赤き心を筑紫湯
誠を盡す神々の

清き心も不知火の
波に漂ふ憐れさよ

暗路を照らす朝日子の
神のみことの隠れます

天の岩戸はいつ開く
この世は終りに近づきて

この世は終りに近づきて
鬼や大蛇やまがつみや

醜女探女の時を得て
荒振る世とぞなりにけり

荒振る世とぞなりにけり
あゝ神人よ神人よ

神の救ひの聲を聞け
耳を浚へてよつく聞け

眼を洗つてよつく見よ
眼を洗つてよつく見よ

と節面白く謠ひながら異様の扮装にて、數多の神人に取圍まれ謠ふ神があつた。

祝部神はこの聲を聞き、何となく心勇み、祝彦、杉高彦と共に、肩を揺りながら

その聲目蒐けて突進した。

激しき風に吹き捲くられて、地上の一切は、見るも無残に落花狼藉、神人は烈
風に遇ひし蚊の如く、蟻子のごとく中天に捲き上げられてしまつた。されど臍下
丹田に心を鎮め神力を蒙りし神のみは、大地より生えたる岩石の如くびくとも動
かず、悠々として烈風吹き荒ぶ廣野を、風に向つて闊歩しつつ、雄々しくも宣傳
歌を謡つた。その聲は風の共響きに送られて地教山の高照姫神の御許に達した。
眞澄姫神、祝姫神の耳にはことさらに痛切に響いたのである。果して何人の宣傳
歌であらうか。云はずと知れた月照彦神と祝部神の宣傳歌であつた。

高照姫神は黄金の幣を奥殿より取り出し、烈風に向つて左右と振り拂ひ給へ
ば、風は逆轉して東北より西南に向つて吹き捲つた。その時二神使はまたもや歌
をよまれた。その歌は地中海の西南なる埃の宮を通行しつつある夫神の耳に音樂
のごとく微妙に響いた。眞澄姫神は地教山の高閣に登り言葉涼しく謡ひ始めた。

☞ 仰けば高し久方の 天津御空に澄み渡る
月照彦の大神の 戀しき御聲は聞えけり

雨あめのあした晨あしたやかぜ風かぜのよい宵よい　　このよ世よをおも思おもふまごころ眞まごころ心まごころの
 君きみがみこゑ御みこゑ聲みこゑはあめ天あめのした下した　　四よ方ものくにくに國くに々な鳴なりな響ひびき
 響ひびきわた渡わたりいまていま今いまここここに　　地ちけう教ちけうのやま山やままとどでとど届とどきけりけり
 地ちけう教ちけうのやま山やままとどでとど届とどきけりけり　　鳴あ呼あたふと尊たふとしことやたま言こと靈たまの
 誠まことのひび響ひびきなはな鳴なりわた渡わたる　　雄を々をしこゑきい聲いはい雷いかづちか
 雷かみなりならかみぬかみ神こゑのこゑ聲こゑ　　そのこゑ聲こゑこよそよはすく世よをすく救すくふ
 神かみのみむね御みむね旨みむねにかな叶かなふべし　　神かみのみむね御みむね旨みむねにかな叶かなふべし
 妾わひははこゝ茲こゝにおほ大おほ神かみの　　みかこしとひ畏かしこみひ日ひによる夜よるに
 世よのかみがみ神かみがみ人かみがみらすくをすく救すくはむとむと　　思おもひおもあむらまきりもてむら村むら肝きもの
 心こころのそら空そらもか搔かきくも曇くもる　　心こころのそら空そらもか搔かきくも曇くもる
 曇くもるきよこのよ世よをきよ清きよめむとむと　　心こころもきよ清きよくみ身みもきよ清きよく
 光ひかり隈くまなつききて月つき照て彦ひこの　　神かみのみこと命みことのを雄を叫たけびにに
 四よ方ものくさ草くさ木きもなび靡なびきふ伏ふし　　伏ふしてつか仕つかへあめむあめ天あめ地つちの
 草くさ木きのかみ神かみもやま山やま川かはの　　正ただしかみききみ神かみはきみ君きみがへ邊へに

い寄り集ひて統神の 教へたまひし言の葉の

三千世界の梅の花 曇る心の岩屋戸を

一度に開く梅の花 月照彦の大神の

靈魂は照るとも曇るとも 神の依さしの神業に

はむかふ魔神は非ざらむ あゝ勇ましき月照彦の

神の命の功績や あゝ勇ましき祝部の

神の命の宣傳よ

と聲涼しく謠ひ始めた。風は涼しき聲を乗せて地中海の西南にいます二神の許に
送り届けた。二神は勇氣百倍して、さしも激しき烈風の中を撓まず屈せず、また
もや聲を張り上げて、山野河海の神人らに警告を與へつつ、エルサレムの聖地を
指して進む。

(大正一一・一・一二 舊大正一〇・一二・一五 加藤明子録)

(昭和一〇・三・三〇朝 於吉野丸船室 王仁校正)

第三十七章 片輪車〔二三七〕

烈風吹荒む埃及の野に現はれたる宣傳使の一行は、ここに東西に袂を別つた。
月照彦神は東方を指して膝栗毛の音高く、風に逆らひつつ長髪を振り亂し、つひに樹木の陰に姿を没した。祝部神は杉高彦、祝彦をともなひ、エルサレムをさして宣傳歌をうたひつつ道を急いだ。

さしもの烈風も強雨もカラリと晴れて、草の【そよぎ】も止つた。遙の前方より尾羽うち枯らし瘦せ衰へたる女人の「一柱は、松の大木を輪切にしたる車を曳きつつ北方に向つて進み來たる。よくよく見れば車の上には足【なへ】と見えて一柱の男子が乗つて居る。ちようど箱根山を【いざり】勝五郎を車に乗せて初花の曳いて來るやうな光景その儘であつた。

女人は細き聲を絞りながら、何事か歌ひつつ重たげに車を徐々と曳いて來る。

☐ 雨の降る夜も風の夜も

顯恩郷を出でてより

水瀨激しきエデン河

夫婦手に手を取り交し

渡るこの世の浮瀨をば

浮きつ沈みつ南岸に

着くや間もなく橙園郷

猿に似たる人々に

手負ひの身をば追はれつつ

深山の奥に分け入りて

星をいただき月を踏み

猿の千聲百聲に

心を痛め胸くだき

やつと遁れた鬼の口

大蛇の棲處も後にして

天の恵みか地の恩か

暗きわが身は白雲の

他所の見る目も憐れなる

夫婦の者は山奥に

飢と寒さに戦ひつ

昨日の榮華に引換へて

今日は朽木の成れの果

進むも知らず退くも

知らぬ深山の谷深く

落ち行くわが身を果敢なみて

涙の袖を絞りつつ

夫婦互に抱き合ひ

泣いて明かせし暗の夜の

草の枕も幾度ぞ

石に躓き足破り

破れ被れの二人連れ
痛み苦しみ堪へ難き
憶へば昔モスコ一の
娘と生れし身の冥加
海より深き父母の恩
戀路の闇に迷ひつつ
艱難辛苦の其の果は
常世の彦や常世姫
身に沁み渡り幾年も
その天罰は目のあたり
顯恩郷に救はれて
諸神人の崇敬一身に
月雪花の夫婦連れ
横さの道に迷ひたる

夫の病は日に夜に
思ひに沈む春日姫
八王神の最愛の
山より高く八千尋の
親を忘れて常世往く
鷹住別の後を追ひ
常世の國の八王神
夫婦の神の慈み
常世の暗にさまよひし
一度は神の御恵みに
南天王の妻となり
集めて榮華を誇りたる
天地の道を踏み外し
その身の果は恐ろしや

歩みもならぬ足【なへ】の 夫の身をば助けむと

因果は巡る小車の埃及に

はげしく野分と戦ひつ 秋の木の葉の木枯に

散り行くわが身の淺ましさ 霜の劍を幾度か

かよわき身魂に受けながら しのぎしのぎで今ここに

着くは着けども盡きざるは わが身の因果と過去の罪

積み重ねたる罪惡の 重き荷物は何時の世か

科戸の風に拂はめや つらつら空をながむれば

月日は昔のそのままに 天津御空に輝きて

四方の木草を照らせども 照らぬはわが身の不仕合せ

元の古巢へ歸らむと 心は千々に砕けども

いとしき夫のこの病 たとへ日の神西天に

昇りますとも龍宮の 海の底ひは干くとも

行末ながく誓ひてし 戀しき夫神を捨てらりよか

生きて甲斐なきわが生命
いのちの瀬戸の荒海に
身を投げ島田振りかかる
わが身の末ぞ恐ろしき
あゝ天地に世を救ふ
神はまさずや在さずや
あゝ天地に世を救ふ
神はまさずや在さずや
神はまさずや在さずや

と哀れげに謠ひつつ、こなたに向つて進みくる。

祝部神はこの女性の姿を見て、倒れむばかりに驚いた。祝部神はものを言はず、この窶れたる女性の面影をつくづくながめ、首を傾け何事か思案に暮るもの如くであつた。女人は堪へ兼ねたやうに祝部神の袖に縋りつき、頬やつれた顔を腹の臍の邊りにぴつたり付けながら涙を瀧のごとく流し、戯り泣きさへ聞ゆる。

祝部神は痛々しき面色にて、女人の背を幾度となく撫で擦つた。女人は漸く顔を上げ、

恥かしき今のわが身のありさま、思はぬ所にて御目にかかり、申し上ぐる言葉

もなし。妾は貴下の知らるごとく常世城に仕へ、常世會議の席上にて八島姫と共に、月雪花と謳はれしモスコの八王道貫彦の長女春日姫にて候。貴下は忘れもせぬ天山の八王齋代彦にましまさずや」と問ひかけた。

漂浪神は四邊を憚りながら、春日姫の口に手をあてた。春日姫はその意を悟り、これは失禮なことを申し上げました。妾は長の旅の疲れに精神衰へ眼くらみ、思はぬ粗忽無禮の段許されたし」と

と素知らぬ態を装うた。祝部神は改めて、

「何れの女人が知らねども、貴下の御様子を見れば、凡人ならぬ神人の御胤と見受け奉る。吾は天教山にまします木花姫命の命に依り、世界の立替へ立直しに先立ち、地上の神人に向つて、遍く救ひの福音を宣傳する枝神なり。貴下の言はるる如き尊き素性の者に非ず」と

と、態ととぼけ顔をする。祝部神は車上の神人を見て、

「やあ、貴下は」

と頓狂な聲を張りあげ、

「何ゆゑ車に召さるるや、合點ゆかぬ」

と眼を丸くし口を尖らせ、鼻をこすりながら問ひかけた。

車上の男子は、さめざめと涙を漂はし、両手をもつて眼を覆ひ頭を垂れた。

ア、この結果は如何になるであらうか。

(大正一一・一一・一二 舊大正一〇・一二・一五 外山豊二録)

第三八章

回春の歡(二三八)

祝部神は車上鷹住別がさめざめと男泣きに泣き出づる姿を見て、眉をしかめ、

「吾々は男子の癖に吠面かわく奴は、大大の大嫌ひで御座る」

と事もなげに云つて退け、且つ心中には鷹住別の今日の窮状に滿腔の同情を寄せ

ながら、態と潔く彼が心を引き立てむとして、またもや面白き歌をつくり、杉高

彦、祝彦と共に手を取り合せて巴のごとく渦をつくりて、くるくると左旋し始めた。その歌、

𩺰や諸鱗は止めても止まる 止めて止まらぬ鯉の道

どっこいしよ、どっこいしよ

鯉に上下の隔てはなかる 隔てがあれば鯉ならず

誰も好くのは色の鱧鮫 腰は𩺰々女の刺身で

鱧鮫とようがり嬉しがり 【れこ】の赤貝に夜晝蛤

この世の【せと】貝は緒々 さらさら【かます】で

穴子にうちこみ 他神に意見を齎しておいて

鰯とも【いかなご】とも薩張 飯蛸やなまくら海鼠に

ちやらくら口【さいら】 口に任して鰯々怒るな

目白もむかずに つ【ばす】を呑み込み

鯉のためなら【いかなご】の 辛抱も壽留女がやくだよ

赤鱒年あかえとしでもない身みで居ゐながら
【かざみ】に理屈りくつは鼈すつぼんの

間まには鮎あゆない屁理屈へりくつよ
鰐わにが悪わるけりや

尼鯛あまだひますから蟹かにして下ください
黄穎ぎぎ【しいら】ねば泥溝貝どぶがひなとしたがよい

お前まへに油女頭あぶらめあたまの數かずの子こ
探さがそとままだよ

一度死いちどしんだら二度にどとは死しなない
一層茅渟鯛いつそうちぬだひ

小鮎こふなうきよ浮世なまえびに生蝦なまえびしたとて
針魚さよりがないから命いのちは鱈さばりに

惜をしみはせないよ
黄螺ばいにし、黄螺ばいにし

白魚しらうをもやして海豚いるかより鱒ますだが
鹽魚しほつを【ぐし】には戸とが立たてられない

乾海鼠きんことなり隣てまへの手前はづも恥はづかし
ふんぷん香にほうた腐くさつた魚うをの

腐くさつた鯉こひに鼻はなぴこつかせて
春日かすがの狐きつね、油揚あぶらげさらへた鷹たか住す別の

窠やつれた姿すがたの【かます】面づら
鯉こひに上下じやうげの隔へだてはないと

エラソにエラソに小鹽鯛こしほだひいふ故ゆゑに
鯨このしろものは六ヶ敷むっかしきと神々かみがみにいやがられ

【こち】からより付つかぬが鯖さばりぬ神かみに
崇たりなしと逃腰にげこし【さごし】に

平家蟹へいけがに見みたよな鱈きすごい顔付かほつき
烏賊いかに【さごし】が鯖さばけて居ゐたとて

鯉こひの仕打ちしうちが繚このしるないゆゑ

鯉こひことばも言いはねばならない

さすれば榮螺さざえに散子はらこ太刀魚たちうを

春日かすがは刺身さしみよ鷹住たかすみは好きす身みよ

祝部神はふりべのかみが今いま「かます」

鼬いたちの最後さいご屁喰べくらつて見みよ

臭くさい臭くさいと夕月夜ゆふづきよ

月夜つきよを呪のろふ戀仲こひなかの

臭くさい仲なかではなかつたか

嗚呼ああ邪魔じやまくさい邪魔じやまくさい

四十九才しじふくさいの尻けつの穴あな」

と滑稽諧謔こつけいかいぎやく止め途ともなく、歌うたを謠うたつて踊をどり狂くるうた。車しやじやう上の上の鷹住たかすみ別わけはこの面白おもしろき歌うた

に靈魂たましひを抜ぬかれて、奇怪きくわいなる身振みぶり足振あしびりに感染かんせんしてか、足菱あしなへの身みも打うち忘れわすれ、車しやじ

上やうに忽たちまち立たち上あがり、共ともに手てを拍うち足踏あしふみ轟とどろかせ踊をどり狂くるふ。

春日かすが姫ひめはこの光景くわうけいを見みて嬉うれし泣なきに泣なき伏ふした。鷹住たかすみ別わけは始はじめて吾わが足あしの立たち

しに氣きがつき、またもや聲こゑを放はなつて嬉うれし泣なきに泣なき出した。祝部神はふりべのかみは又またもや、

泣なく奴やつは大大大だいだいだいの大嫌だいきらひ」

と謠うたひかけた。

「一寸待つて」

と春日姫は慌てて口を押へた。祝部神は鼻の上に拳を載せ、またその上に左の手の拳を重ね、漸次代るがはる抜いては重ね、抜いては重ね、鼻高神の眞似をしなから、

「壁が立つた、足立つた 立つた、立つたは「たつた」今

さあさあこの場を逸早く 聖地を指して立つて行かう」

と元氣さうに又もや踊り狂ひ、傍の細溝に足踏み外し、

「アイタタツタ、アイタアイタノタツタ」

と又もや氣樂さうに溝の中に落ちたまま踊り狂ふと、五柱の神司は一時にどつと

笑ひ轉た。

彌ここに心の岩戸は開け初めて、さしも難病の壁の足の立つたのも、笑ひと勇

みの効果である。神諭にも、

「勇んで笑うて暮せ」

と示されてある。笑ふ門には福來る。泣いて鬱いで悔んで暮すも一生なら、笑う

て勇んで神を崇めてこの世を楽しみ暮すも一生である。天地の間は凡て言靈によつて左右さるるものである以上は、假にも萬物の靈長として生れ出でたる人間は、この世を呪ひ或は悲しみ、或は怒り憂ひ艱みの禍津の心を取り直し、如何なる大難に遇ふも迫害に會するも決して悔み悲しむべきものでない。勇めば勇むだけの神徳が備はるべき人間と生れさせられて居るのである。

(大正一一・一一・一二 舊大正一〇・一二・一五 加藤明子録)

第三十九章 海邊の雑話〔二三九〕

西に高山を控へ東に縹渺たる萬里の海を控へたる濱邊に立ち、山嶽のごとき怒濤の荒れ狂ふ光景を眺めて雑談に耽る四五の男があつた。

甲「あゝ世の中は變になつて來たではないか、あの濤を見よ。海か山か判らぬではないか。この間も宣傳使とやらが遣つてきて、海は變じて山となり、山は變じ

て海うみとなると、大聲おほこゑに叫さけんで吾々われわれの度膽どぎもを抜ぬいた。されど「馬鹿ばかいへ、この深ふかい海うみが山やまになつてたまるものか」と冷笑れいせうしてゐた。それにあの濤なみは爺ぢぢの代だいからまだ見みたこともない。この間あひだもタコマ山の半腹はんぶくまで海嘯つなみが押し寄よせると云いつて、宣傳せんでん使しが呶鳴どなつてゐたよ。この邊へんも今いまに海嘯つなみで浚さらはれるかも知しれない。汝おまへらも一つ思しあ案んして、タコマ山の頂邊てつべんか、地教山ちけうざんへでも避難ひなんしたら「どう」だらうね」と首くびを傾かたむけて思案しあん顔がほに言いつた。乙おつは冷笑れいせうを浮うかべながら、

「【なに】、ソナ馬鹿ばかなことがあつてたまるかい。この間あひだの宣傳使せんでんしといふ奴やつは、ありや氣違きちがひだよ、星ほしが降ふるとか、洪水こうずゐが出でるとか、人ひとが三分さんぶになるとか、譯わけの判わからぬ、昇かいて走るやうな法螺ほらばかり吹ふきよつて、吾々われわれを【びつくり】させて喜よろこんで居ゐるのよ。この世よに神かみもなければ、又またソナ大變動だいへんどうがあつてたまるものぢやない、萬々まんまん一いちソナ事ことがあれば世間せけん竝なみぢやないか。この世よの神人かみがみが全部ぜんぶ死しんで了しまつて、僅わずかに二分にぶや三分さんぶ残のこつたつて淋さびしくて仕様しやうがない。ソナことを云いつてくれな、それよりもこの前まへに來きた宣傳使せんでんしのいふことあ氣きが利きいて居ゐたよ」

丙へい「氣きが利きいて居ゐるつて、ドンナことを云いつたのだい」

乙「ドンナ事をいつたつて、そりや大變な結構なことだよ。天來の福音といつたら、まあアンナことをいふのだらう」

甲「天來の福音て何か、「三千世界一度に開く梅の花」とか、「たとへ大地は沈むとも、誠の神は世を救ふ」と云ふことだらう」

丙「馬鹿いふない、この天地は自然に出來たのだ。雨が降るのも風が吹くのも浪が高くなるのも海嘯も、みな時節だよ。この世は浮世といつて水の上に浮いてゐるのだ。ソンナ「けち」臭い恐怖心を起すやうな、たとへ大地は沈むともなぞと、吾々はちつと氣に喰わないよ。アンナ歌を聞くと、吾々の頭はガンガンいつて、今の彼の浪よりも業腹が立つよ。吾々の聞いた福音といふのは、ソンナ「けち」臭い白癡おどしの腐れ文句ぢやない。古今獨歩、珍無類、奇妙奇天烈の福音だ。まあコンナ大事なこととはとつとこうかい。汝らに聞かしたら吃驚して癲癩でも起すと迷惑だからな」

乙「何だい、貴さまの云ふことあ一體譯が判らぬぢやないかい、偉さうに人の受賣を勿體ぶつて天來の福音だなぞと、おほかた駄法螺でも吹音だらう、癲癩の泡

吹音くらゐが關の山だ」

丙「だまつて聞いてゐるよ、たとへ大地が沈むとも間男の力は世を救ふのだ。弱蟲や腰拔蟲の前でコンナことを云つたら、冥加に盡て天罰が當るかも知れぬ。やつぱり却つて汝らの迷惑になるから止めておこかい」

丁「あまり勿體ぶるない、三文の大神樂で口ばかりだよ、こいつな、この間も自分の小悴が井戸へはまりよつただ。その時に狼狽へよつて矢庭に手を合せて

「お天とさま、お天とさま」と吐かしてな、吠面かわきよつて拜み伏してゐたのよ。その間にその小悴がぶくぶくと泡をふきよつて沈んでしまつたのだ。その時

に自暴糞になりよつてな、この世に神も糞もあるものか。全智全能の神だつて、尻が呆れて雪隠が踊る、小便壺がお出で、お出でをすると吐かして怨んでゐたよ

丙「要らぬことをいふない、人の缺點までコンナとこで曝け出しよつて、貴様の嬢が死んだ時どうだつたい。男らしくもない、冷たうなつて踏ん伸びて、石の様

に硬うなつた奴を……こら女房、お前は儂を後に遺してなぜ先に死んだ、も一度夫といつてくれ……ナンテ死んだ奴に物をいへと吐かすやうな没曉漢だからね」

丁「馬鹿云へ、俺の嬢、神さまだ。貴様の嬢のやうな蜎の缺伸したやうな變な面付した嬢とは種が違ふだよ。死んでからでも毎晩々々おれの枕許へきて介抱する、そりやホントに親切だよ。そして天人の天降つたやうな立派な装束を着てゐるよ」
丙「一遍手水を使うて来い、そりや幻だよ、すべた嬢にうつつ三太郎になりよつて、毎日日息のある間はお嬢大明神と崇めよつて、朝晩に屁つぴり腰をしよつて、嬢のお給仕に涎を垂らしてをつたお目出度い奴だからね」
一同轉げて笑ふ。このとき海鳴ますます激しく浪は脚下まで襲うてきた。これは大變と眞蒼な顔して一丁ばかり山へかけ登つた。
丁「偉さうに太平樂のへらず口ばかり竝べよつたが、そのざま何だい。浪が來たつて眞蒼な顔しやつて、腰を抜かさぬ許りに山へ驅登つたその「ぶざま」つたらないぢやないか。見られた「ざま」でないよ、ソナ「ざま」して天來の福音なんて福音が聞いて呆れらあ、呆れ入谷の鬼子母神だ。それもつと早く意茶つかさずに癩癩の泡吹音とやらを、吾々御一統の前に畏み畏み奏聞仕るが後生のためだよ」

丙へい「その後生ごしやうで思おもひだした、この間あひだもな、ウラル彦ひこの宣傳使せんでんしだと云いつて五升樽ごしやうたるを
供ともに擔かつがして大道だいたうを吠鳴どなつて來きたのだ。それだ、天國てんごくの福音ふくいんといふのは」
丁てい「何なんの事ことだい、べらべらと序文じよぶんばかり竝ならべよつて、おほかた酒さけを喰くらふことだ
らう。まあ【こいつ】らの福音ふくいんといふのは樽たるさへ見みせたらよいのだ。口くちに唾つば一いつぱ
い溜ためよつて、蟹かにのやうな泡あわをふきよつてな、喉のどをぢりぢり焦こげつかして、餓鬼がき
が飲のみたい水みづを飲のまれぬ時ときのやうな憐あはれな面付つらつきをして、その宣傳使せんでんしの後あとから跟つき
まはつて、犬いぬが猪ししの後あとをつけるやうに鼻はなばかりぴこつかして歩あるいていつたという
ことだ。こいつ等の福音ふくいんといふことは、酒さけの匂におひを嗅かぎつけて、よう飲のみもせず、
【けなり】さうに指ゆびをくはへて、宣傳使せんでんしの臭くさい尻しりからついて歩あるきよつて、宣傳使せんでんし
が廁かはやへでも這はい入いつてゐるまに、樽たるのつめをポンと抜ぬいて、長ながい舌したを樽たるの中なかへ入れ
べそべそやつて居をると、雪隠せつちんの窓まどから宣傳使せんでんしに見みつけられて平謝ひらあやまりに謝あやまつて、そ
の代償だいしやうとして立派りつぱな美うつくしいお尻けつを拭ふかしてもらつた臭くさい奴やつがあるといふ評判ひやうばんだつ
た。大方おほかたこいつ等とうのことだらうよ。天國てんごくの福音ふくいんでなくつて糞放くそこきの尻しり拭ふ音いんだよ。馬ば
鹿か々々ばしい、糞くそが呆あきれらあ」

丙へいは拳こぶしを握にぎり、むつとした顔かほつ付きで、

「貴きさま様アよい頬ほほただなあ」

丁てい「頬ほほたより桐きり下げ駄たがよいのだ、あまり穿はきちがひするなよ」

丙へい「穿はきちがひは貴きさま様のこつた、人ひとの下げ駄たで人ひとを踏ふみつけやうとしよつて、泥どろ足あしで三さん千せん世せ界かい泥どろの海うみなんて、泥どろ棒ぼうの言いひ草くさみたいなこと吐ぬかしてな、馬ば鹿からしい、それよりも酒さけの代かりに泥どろ水みづでも飲のんだら、ちつと天てん來らいの福ふく音いんが聞きけるだらう。

飲のめよ騒さわげよ一寸いっすん先さきや暗やみよ

暗やみのあとには月つきが出る

ヨイトサ、ヨイトサ」

丁てい「酒さけもないのに酒さけを飲のんだ氣きになりよつて、踊をどる奴やつがあるものかい」

丙へい「ごてごて」いふない、早はやう歸かへつて嬢かかあの幽いう霊れいになと會あつてこい、かまふない、とたがひに腕うでを捲まくりあげ格かく闘とうを初はじめたとたんに、はるか前ぜん方ほうより三み柱はしらの宣せん傳でん使しは、

「三千世界一度に開く梅の花、開いて散りて實を結ぶ」
と謡つてくる。丙は矢庭に眼を塞ぎ、顔を顰め、両手に頭を抑へながら、
「こいつはたまらぬ」

と大地にしやがんだ。

折しも暴風ますます激しく、浪は脚下へ襲うてくる。一同は先を争うて又もや
山上めがけて逃げ出した。

(大正一一・一一三 舊大正一〇・一二・一六 井上留五郎録)

第四〇章 紅葉山(二四〇)

露の彈霜の劍を幾たびか、受けて血潮に染むる紅葉の、丹き心を照らしつつ、
錦の機はこの經綸、織りなす絲の小田卷や、眞木の柱のいと高く、高天原の神國
に、築き上げむと神人の、四方に心を配りつつ、苦しき悩みを物とせず、沐雨櫛

風數かさね、草の枕の悲しげに、天津御空の月星を、褥に着つつ進みくる。心も
丹き紅葉山の、紅葉の大樹のその下に、腰うち掛けて宣傳の、神の姿の殊勝にも、
彼方こなたの山の色、日々に褪せ行く有様を、見る目も憂しと青息や、吐息を月
の大神に、祈る心の眞澄空、忽ち吹きくる木枯しの、風に薄衣の身體を、慄はせ
ながら又もや起つて出でて行く。行くはいづくぞモスコの、都をさしてさし上
る、東の山の端出る月の、影も圓かなその身魂、月照彦の宣傳使、春日の姫の生
れたる、道貫彦の神館、息急き切つて進みける。

折から降りしく村雨に、草鞋脚祥に身をかため、菅の小笠や草の蓑、この世の
末をはかなみて、涙の雨の古布子、袖ふりあうも多生の縁、つまづく石も縁のは
し。

走つて馳け来る三柱の神人は、この宣傳使の謠ふ宣傳歌に引きつけられ、たち
まち前に現はれて、大地に頭を下げながら、

貴下は地中海の西南岸にて御目にかかりし月照彦神にましまさずや、吾らはそ
のとき天地の神の懲戒を受け、道踏み外す璧の、旅に徜徉ふ折からに、天地も動

ぐ言靈ことたまの、三千世界さんぜんせかいの梅うめの花はな、一度いちどに開ひらくと言こと擧あげし、東ひがしを指さして御姿みすがたを、隠かくし
たまひし現うつし神かみ、吾われらは御後みあとを伏ふし拜をがみ、その再會さいくわいを待まつほどに、天てんの時節じせつの到たう
來らいか、思おもはずここに廻めぐり會あひ尊顔そんがんを拜はいするは、盲龜まうきの浮木ふぼく、浮木ふぼくはまだおるか、
枯木かれきに花はなの咲さきしが如ごとく感かんきはまりて言ことの葉はの、散ちり布しく紅葉顔もみぢかほあからめて、恥はぢ
を忍しのびつつ出いで迎むかへ申まをしたり。わが父道貫彦ちちみちつらひこは幸さいはひにして今いまに健全けんぜんに月日つきひを送おくり候さふら
へど、素もとより頑迷不靈ぐわんめいふれいにして、天教山てんけうざんに現あらはれし神かみの教をしへをうはの空そら、空吹そらふく風かぜと
聞きき流ながし、塞ふさがる耳みみは木耳きくらげの、氣苦勞きくらくおほき吾われらが夫婦ふうふ、いかに教示けうじを諭さとすとも、
ただ一言ひとことも聞きかばこそ、日ひに夜よに荒すさぶ酒さけの魔まの、擒とりことなりし兩親たらちねの、心淺こころあさまし常とこ
暗やみの、岩戸いはとを開ひらき救すくはむと、朝あさな夕ゆふなに身みを盡つくくし、心こころを竭つくし諫いさむれど、馬耳東ばじとうぶ
風うの淺あさましさ、鳥とりは歌うたへど花はなは咲さけども吾わがこころ心こころ、父ちちの心こころを直なほさむと、暗路やみぢを辿たどる憐あは
れさを、推おし測はかられれて一言ひとことの、教示けうじを頼たのみ奉たてまつる』
と涙なみだと共に嘆願たんぐわんしたりける。

モスコ一の奥殿おくでんには、道貫彦みちつらひこあまたの侍者じしやと共に、八尋殿やひろどのにおいて大酒宴だいしゆえんの眞まつ
最中さいちゆうである。神人かみがみらは一統いっとうに聲こゑを揃そろへて、

☞ 飲めよ騒げよ一寸先や暗よ

暗のあとには月が出る

暗のあとには月が出る

とさうざうしく謠ひ狂ふ聲は、殿外に遠く響き渡りける。

たちまち道貫彦は顔色蒼白と變じ、座上に卒倒した。數多の神人の酔は一時に

醒め、上を下への大騒ぎとなつた。道貫姫は大いに驚き、鷹住別は何處ぞ？ 春

日姫……と、狂氣の如くに叫び狂ふ。

神人らは二神司の所在を探さむと、鵜の目鷹の目になつて、城内くまなく驅け

廻つた。されど何の影もない。

このとき城門外にどやどやと數多の神人の囁く聲が聞えた。そして三柱の怪し

き宣傳使は、涼しき聲を張りあげて、

☞ 飲めよ騒げよ一寸先や暗よ 暗のあとには月が出る

月が出るとは何事ぞ 月は月ぢやがまごつきよ

息つきばつたり力つき
今に命もつきの空

空行く雲を眺むれば
東や西や北南

酔うた揚句は息つきの
道貫彦の憐れなる

最後を見るは眼のあたり
冥加につきし今日の月

曇る心は烏羽玉の
暗路を照す月照彦の

神の命の宣傳使
月は御空に鷹住別や

長閑な春の春日姫
命の瀬戸を救はむと

心一つの一つ島
神の鎮まる一つ松

堅磐常磐の神の法
法を違へし天罰の

報いは忽ちモスコ一の
道貫彦の身の果か

果しなき世に永らへて
果なき夢を結びつつ

心の絲の纏れ合ひ
亂れに亂れし奇魂

照れよ照れてれ朝日の如く
澄めよ澄めすめ月照彦の

神の教に目を覺まし
再び息を吹き返し

救ひの司と現はれよ

救ひの司と現はれよ

と門前に佇み、數多の神人に圍まれて大音聲に呼ばはつてゐる。

この聲は胸を刺すが如く道貫姫の耳に入った。姫は從臣に命じ、三柱の神司を招いて奥殿に進ましめた。

三柱の神司は蓑笠のまま遠慮會釋もなく奥殿に進み入り、又もや三千世界の宣傳歌を謠ひ、手を拍つて踊り始めた。

息も絶えだえに卒倒しゐたる道貫彦は、俄然として起ち上り、兩手を拍ち踊り始めた。神人はあまりの不思議さに、アフォンとして開いた口も塞がらなかつた。

三柱の神司は目配せしながら、身に纏へる蓑笠を脱ぎ捨て、宴席の中央に三つ巴となつて鼎立した。見れば大八洲彦命初め鷹住別、春日姫の三柱である。

是よりさしも頑迷なりし道貫彦も前非を悔い、月照彦神の教示に従ひ、顯要の地位を捨て、月照彦神の從者となり、天下救濟のために諸方を遍歴する事となりたり。

(大正一一・一一・一三 舊大正一〇・一二・一六 井上留五郎録)

第四章 道神不二(二四一)

千年の老松杉林 紅葉雑木も苔むして
神さびたてる青雲山の 空に煌めく黄金橋
朝日に輝くその色は 常世の闇の烏羽玉の
暮き浮世を照すなる 玉守彦の仕ふる玉の宮
空澄み渡り久方の 星も冴え切る雲の上に
屹立したる此山は 神の御稜威も彌高く
高天原と稱へられ 上と下とはよく睦び
親しみ守る神の道 御稜威は四方に三千年の

神の光を照さむと

朝夕祈る太祝詞

天地四方に言靈の

響き轟く勇ましさ

天地の道を諭すてふ

天道別の宣傳使

さしもに高きこの山を

谷打ち渉り磐根樹根

踏みさくみつつ登り來る

男々しき姿はまたと世に

荒浪猛る和田津見の

國の守りとあれませる

神素盞鳴の大神の

清き姿にさも似たり

嗚呼太平の御代なれば

青雲山の八王と

世に仰がれし生神の

今ははかなき青雲の

行方定めぬ神澄彦

同じ心の天道別は

天ヶ下の諸神人の

深き悩みを救はむと

黄金の宮の表門

案内もなしに潜り入る

世は常闇となるとても

堅磐常磐の神心

心に照れる月影は

宇宙を照らす朝日子の

神の姿ぞ勇ましき
身は照妙の薄衣

荒ぶる風に揉まれつつ
雲路を分けてのぼり来る

天道別のこの姿
見るより早く神澄彦は

飛び立つばかり勇み立ち
神澄姫や東彦

吾妻の姫を伴ひて
いと慇懃に出で迎ふ

案内につれて宣傳使
天道別の生神は

奥殿深く進み入り
別れて程經し千萬の

苦しき宿世を語りつつ
夜の更くるまで話し合ふ

その言の葉のさらさらと
秋の木の葉の冨に

吹かれて囁くばかりなり。

神澄姫は黄金の宮の大前に拜跪し、恭しく天津祝詞を奏上し、御饌神酒御水種々

の海川山野の珍物、八足の机に横山のごとく置足らはし、祝詞の聲も涼やかに、

天道別の來場を、黄金の宮の大前に恭しく奏上し、終つて居間に立ち歸り、ここ

に嬉しく直會の清き酒宴は開かれぬ。

黄金の宮の宮司、玉守彦は黄金の幣を右手に持ち、左手に鈴を携へながら、この酒宴に現はれきたり、宣傳使に對して祝歌を歌ひ始めたり。その歌、

久方の天津御空にふさがれる 雲押し開き天の原

道押し別けて降りくる 天道別の宣傳使

心も清き神澄彦の 神の命の永久に

うしはぎいます青雲の 山より高き神徳は

流れながれて楊子江 千尋の海に注ぐ如

五つの海を隈もなく 洗ひ清むる神の教

天道別の言靈は 天地四方の雲霧を

伊吹き拂ひて後の世の 月より清き玉守彦の

宮の司や村肝の 心もはるる秋の空

雪より清き神澄彦の 神の命と諸共に

天地の闇を照さむと
天教山に現れませる

野立の彦の神の徳
一度に開く木の花の

姫の命の功は
青木ヶ原に満ち足らひ

足らひ餘りて和田の原
波も静かに治まりて

御世安らけきこの瑞祥
嗚呼されど、嗚呼されど

空に叢雲地に泥の
漂ふ國を荒磯の

深き悩みを白浪の
四方の神人救はむと

手足は岩に傷つきて
血潮染めなす紅葉の

黑白も餘處に天道別の
神の命の眞心は

天地の神も嘉すらむ
この世は末に近づきて

虎狼や獅子大蛇
威猛り狂ひ八洲國

ただ一口に呑まむとす
野立の彦の大神は

この常暗の世を救ひ
百の神人助けむと

草木の片葉戦ぐ間も
忘れ給はぬ御恵みは

青雲山の峰よりも
海より深き大慈心
荒き浮世を平かに
立直さむと皇神の
天道別や神澄彦の
司の心ぞ尊けれ。

高くましまし龍宮の
酌み取るものは荒浪の
いと安らけく神の世に
心を開く宣傳使
司の心ぞ尊けれ

三千世界の梅の花
堅磐常磐の松の世を
今目のあたり松の國
天教山の御恵みに
嗚呼さりながら鹽沫の
鬼や大蛇のはびこりて
涙の雨の降る時雨

一度に開く常磐木の
まつは昔の夢ならで
大和島根の神人は
千代も八千代も榮ゆべし
凝りて成るてふ島々は
救はむよしもないじやくり
しぐるる後に霽れ渡る

冷^ひえたる月^{つき}のさやさやと
 心^{こころ}を研^{みが}け唐^{もろこし}土^この
 百^{もも}の神^{かみ}たち從^{みとも}神^{かみ}たち
 天道^{あまぢのわけ}別^いの出^いでましは
 曇^{くも}り切^きりたる常^{とこ}闇^{やみ}の
 天^{あま}の岩^{いはと}戸^との開^{ひら}き主^{ぬし}
 神^{かむすみひこ}澄^{せん}彦^{でん}の宣^し傳^し使^し
 神^{かみよ}代^よに坐^まし皇^{すめ}神^{かみ}の
 深^{ふか}き思^{おも}ひを四^よ方^もの國^{くに}
 山^{やま}の尾^をの上^へも河^{かは}の瀨^せも
 荒^{あらの}野^のの果^はての隈^{くま}もなく
 伊^い吹^ぶき度^{わた}會^わ神^{らひかみ}の德^{のり}
 伊^い吹^ぶき渡^{わた}れよ神^{かみ}の德^{のり}

長^{なが}袖^{そで}を振^ふりながら大^{おほ}幣^{ぬさ}鈴^{すず}を兩^{りやう}手^てに持^もち、節^{ふし}面^{おも}白^{しろ}く歌^{うた}ひ納^{をさ}めて、この祝^{しゆくえん}宴^{えん}に錦^{きんじやう}上^{じやう}
 花^{はな}を添^そへにける。これより神^{かむすみひこのかみ}澄^{せん}彦^{でん}神^{かみ}、東^{あづま}彦^{ひこのかみ}神^{かみ}の夫^ふ妻^{さい}は、天^{あまぢ}道^{わけ}別^{のみこと}命^{こと}と共^{とも}に天^{てん}教^{けう}山^{ざん}の
 神^{しんじ}示^しと宣^{せん}傳^{でん}歌^かを謠^{うた}ひながら、溷^{こん}濁^{たく}の世^よを救^{すく}ふべく、青^{せい}雲^{うん}山^{ざん}を後^{あと}に見^みて、何^{いづこ}處^ことも
 なく出^{しゆつ}發^{ぱつ}した。

(大正一一・一・一三 舊大正一〇・一二・一六 藤原勇造録)

第四二章 神玉兩純〔二四二〕

雪は翩翻として降りしきり、地は一面の銀世界、南高山の鐘の音は、諸行無常と鳴り響き、黄昏告ぐる寂寥の、山路を辿る蓑笠も、宣傳使は唯一人、雪押分けて上り来る、冷酷無殘の浮世をば、天地の神の暖かき、その懐に救はむと、身の苦しきも打忘れ、神澄彦の宣傳使は、雲つく山を上り来る、南高山は大島別の管掌する聖地なり。

ここに神澄彦は、舊知の神人を救はむと、見るも淋しき蓑笠の、浮世を忍ぶ假姿、漸う山頂に上りつき、表門に立つて力限りに門戸を打叩いた。華胥の國に遊樂せる門番は暖かき夢を破られ、目をこすりながら、佛頂面して出で來り、殊更寒き冬の夜の、この眞夜中に門戸を叩くは何者ぞ。御用あらば明日來られよ

と膠も杓子もなき挨拶なり。
神澄彦神は、已むを得ず門外に立ちて聲を限りに、

三千世界一度に開く梅の花
南高山は高くとも

天の星より未だ低い
大島別は偉くとも

蚤に喰はれる浅ましさ
蚤に喰はれる弱蟲の

門戸を守る弱蟲は
雪隠の蟲か糞蟲か

と歌ひ始めた。門番は聲荒らげて、

この眞夜中に、漂浪の身を持ちながら、雪に鎖され、降り積る門を叩いて救ひをねだるその弱蟲は何蟲ぞ。蚤より弱い大島別に、助けて呉れと吐す奴、蚤の糞から湧き出す糞より弱い弱蟲の、身の分際も辨へず、何の詮方涙の果は、乞食となつた今のざま、この門開くこと罷りならぬ

と門内より唳鳴りつけたり。

この聲は寢殿に眠れる玉純彦、八島姫の耳に雷の如く轟いた。二神司は夢を破られて、むつくとばかり起上り、

熊若、々々

と呼ばはれば、門番は、

□ ハイ □

と答へて寢殿指して一目散に驅入りぬ。神澄彦は雪の門前に立ちながら、大音聲を張り上げて、

□ 常世の國に現はれし

八島の姫の身の果は

流れながれてエデン河

流れの果は道彦の

國の命に助けられ

恵みも深き顯恩の

郷に隠れて世を送る

雪より白き玉純彦の

従者の神に救はれて

今は全く妻となり

南高山に立歸り

大島別の禿八王

八王の位を奪りはがれ

今は僅に大島別

世の諸神人は理知らず

大神様と敬へど

誠の神に非ずして

顔色黒き澁紙か

あらの 荒野に 猛る狼か

もんばん 門番までが嗅ぎつける

はな「がみせぶ」が「かみ」
鼻紙澁紙奴神

「かみ」がみぬ
神々吐かすは狼か

もしも 違うたら 貧乏神

よわ 弱みにつけこむ 風の神

それに 引換へ 吾々は

てんち 天地に 恥ぢぬ 神の裔

「かむ」すみひこ
神澄彦の神なるぞ

しやうじいちまい
障子一枚ままならぬ

やぶ「かみ」
破れた神の分際で

ばか 馬鹿にするにも程がある

たますみひこ
玉純彦や八島姫

とこよ 常世の 會議の 泥田圃

よく だまされた 恥を知れ

いは さは云ふものの 吾々も

おな 同じ 泥田の 奴狐に

なかま だまされ切つた 仲間ぞよ

たますみひこ
玉純彦は何處に居る

やしま 八島の 狐は 未だ 來ぬか

こんこん こんと 寒狐

くわいくわいくわい
怪々々と 寒狐

きつね 狐の 嫁入り 尾も 白く

あたま 頭も 白い 古狐

とくち 口から 出任せに 歌つてゐる。

たますみひこ 玉純彦、やしまひめ 八島姫はみみ 耳を澄す、ひとことひとことむね 胸を躍らせ、かほ 顔を顰めくび 首を傾げて、この聲に聞き入りぬ。たますみひこ 玉澄彦はもんばん 門番にげんめい 嚴命しただち 表門を開かしめ、うた 歌へるかみ 神人を導きてわが寝殿に伴はしめた。

かむすみひこのかみ 神澄彦神はにしん 二神司を見るなり、

「ヤア久し振りです」

むざむざ 無雑作に言葉をかけた。

にしん 二神司はおどろ 驚いて、つくづくかほ 顔を見詰めた。かむすみひこ 神澄彦は、たちま 忽ちあまぢわけのみこと 天道別命よりぶんよ 分與さ

れたるくろ 黒のひめんぷ 被面布をむざむざ 無雑作には 剥ぎ取り「これ見よ」と云はぬばかりに、くろ 黒い顔を

にしん 二神司のまへ 前にさし出した。にしん 二神司は、

「ヤア、きか 貴下はせいうんざん 青雲山のやつわうかむすみひこ 八王神澄彦ならずや。やちう 夜中といひ、おも 思はぬごらいはう 御來訪といひ、

しつれい 失禮いたしました」

とおど と恟々として、ふたり 二人はて 手を座に突き詫び入る。かむすみひこ 神澄彦ははる 春のゆき 雪の如く、たちま 忽ちうちと 打解

けててんけうざん 天教山のしんじ 神示をてんか 天下にせんてん 宣傳すべく、せいうんざん 青雲山をあとにしてさうせつ 霜雪をしの 凌ぎ、かんなん 艱難と戦

ひしよしん 諸神人をきうさい 救済せむため、さんや 山野河海をばつせふ 跋渉遍歴するむね 旨をこた 答へた。

二神司は大に驚き、奥殿に神澄彦を導き鄭重に歡待し乍ら、天教山の神示を畏敬の態度を以て一言も洩らさじと聽問し、且つ其の勇氣を激賞した。神澄彦は諄々として、世の終りに近づける事を説き諭し且つ改悛を迫つた。時しも奥殿に當つて騒々しき聲が聞えた。さうして母の聲として、

「玉純彦、八島姫」

と呼ばはつてゐる。

玉純彦は、

「暫く失禮致します」

と云つて、八島姫を側に侍せしめ置き、急いで奥殿に入りぬ。

見れば大島別は、年古く憑依せし荒河の宮の邪神の神澄彦の宣傳歌に怖れて脱出したその刹那、老衰の大島別は、身體氷の如くなつて歸幽した。これより玉純彦、八島姫は、神澄彦の誠心に感じ、宣傳使となつて、南高山の城内は云ふに及ばず、諸方を遍歴し、神の福音を傳ふる事となりける。

(大正一一・一一三 舊大正一〇・一二・一六 外山豊二録)

第七篇 宣傳又宣傳

第四三章 長恨歌〔二四三〕

心も清き玉純彦の

神の命は世を救ふ

神澄彦と諸共に

この世の泥を滌がむと

草鞋脚絆に身を固め

心も軽き蓑笠の

この世を忍ぶ二柱

雲路をわけて降り來る

南高山も夢の間に

霞みて進む膝栗毛

栗毛の駒はなけれども

心の駒に鞭打ちて

進み行くこそ雄々しけれ

八島の姫は門外に

見送り來る溜め涙

涙はげしき夕立の

雨にはあらぬ鹿島立ち

立ち別れむとする時に

纏れ絡みし戀絲の

解くべきよしも泣いじやくり

泣いて明石の濱千鳥

百鳥騒ぐ波の上

穩かならぬ思ひなり

嗚呼玉純彦の宣傳使

何處を當てと定めなき

深山の奥の草枕

旅の疲れも厭はずに

三千世界の梅の花

一度に開く神の世を

堅磐常磐に立てむとて

君の御影のとぼとぼと

虎伏す野邊も厭ひなく

出でます姿思ひ出の

名残は深き山奥の

雪積む山の八島姫

必ず忘れてたもるなよ

忘れがたきは顯恩郷

日の出神の慈み

常世の國の巡り會ひ

會うて嬉しき相生の

松の緑の色深く

契り初めたる夫婦仲

空を隔つる黒雲の

叢がり渡る今の世を

晴らさむ爲のこの門出

一日も早く片時も

夙く速やけく歸りませ

戀しき君に生別れ

後に淋しき獨り寝も

夢路は通ふ君の側

守り参らす八島姫

必ず獨りと思ほすな

蔭身に添ひて吾魂は

汝が御側に仕へなむ

汝が御側に仕へなむ

南高山に残されし

いとしき妻のあることを

雨の晨や雪の宵

必ずともに念頭に

かけさせ給へよ吾夫よ

世は紫陽花の七變り

たとへ天地は變るとも

千代に八千代に變らぬは

汝が身を思ふ吾心

心をつくしの八島姫

夢々忘れ給ふまじ

夢々忘れ給ふまじ

老少不定會者定離

浮世の常と聞くからは

これがお顔の見納めか

深き縁のあるならば

またもや會はむ相生の

松も目出度き高砂の尾の上に立ちて玉純彦の
 神の命を松風や草の片葉に至るまで
 心を注がせ給へかし心にかかる冬の空
 馳せ行く雲の果しなき海の彼方に度會の
 神の御徳を解きわくる心も赤き奇魂
 久延毘古神の力にて寄せ來る曲津を打ち拂ひ
 言向け和せ天教山の宮に坐します木花姫の
 神の命の御前に雄々しき功を奉り
 地教の山を守ります御稜威も高き高照姫の
 神の命の御前に功を立てよわが夫よ
 朝な夕なに神の前眞心こめて八島姫
 祈る誠の太祝詞皇大神は平けく
 いと安らげく聞し召し君の御幸を守り坐さむ
 折角會ひは相生の松の生木の生別れ

かひなき思ひも神の爲かみのかみのため この世の爲の苦しきと

思ひは深き神の恩おもふかかみのおん 高き功をヒマラヤのたか いさを

山より高く天教のやま たか てんけう 山の尾の上に現はれてやま をへ あら

この世を造りし大神のこのよをつく おほかみ 國治立の神勅くに はるたち みことのり

世にも稀なる宣傳使よ まれ せんでんし 玉純彦と謳はれてたま すみひこ うた

その名を千代に萬代にな ちよ よろづよ 留め給へよ、いざさらばとど たま

さらばさらばの今のきはさらばさらばのいま 諸行無常と鳴り渡るしよぎやうむじやう な わた

南高山の鐘の音もなんかうざん かね ね 勝利々々と響くなりしょうりしやうり ひび

勝利々々と響くなりしょうりしやうり ひび 嗚呼なつかしき吾夫よあ あ わがつま

嗚呼いとほしき吾夫よあ あ わがつま

斯の如く歌ひて八島姫は名残を惜しみける。神澄彦、玉純彦の二神司は、何處かくのごと うた やしまひめ なごり を 神むすみひこ たますみひこ にしん 何ところ

ともなく宣傳歌を聲高らかに謠ひながら、エルサレムをさして脚を速めける。せんでんか こゑたか うた かしき わがつま

(大正一一・一一・一三 舊大正一〇・一二・一六 藤原勇造録)

第四四章 夜光の頭〔二四四〕

ロッキー山の山風、世を良と吹く風に、スペリオル湖の水面は、忽ち怒濤を捲き起し、小船を前後左右に翻弄した。ここに少彦名神は數多の神人とともに漂うた。風は刻々に唸りを立てて激しくなつた。空は一面の暗雲に鎖され、船の前後に數限りもなく出沒する海坊主の姿は實に凄じき光景である。少彦名神は忽ち祝詞を奏上し、聲爽かに、

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

スペリオル湖の浪高く 吾らの船は覆るとも

變らぬものは神心 神の心を胸にもち

寄せくる怒濤を言靈の 息吹の狭霧に吹き拂ひ

拂ひ清むる神の道 浪も鎮まれ風も凪げ

されどもされど常暗の 心の暗き魔神は

慄^{ふる}ひ戦^{をの}き顔^{かほ}の色^{いろ} 土^{つち}と鳴^{なる}門^との渦^{うづ}卷^{まき}や

嗚^あ呼^あ呬^なげよ呬^なげなげ科^{しな}戸^ど彦^{ひこ} 科^{しな}戸^どの風^{かぜ}の永^{とこ}久^{しへ}に

吹^ふくなら吹^ふけよ吾^{われ}々^{われ}が この湖^{みづ}水^{うみ}を安^{あん}全^{ぜん}に

渡^{わた}つた後^{のち}に「どつと」吹^ふけ 今^{いま}は吹^ふくなよ「ふく」の神^{かみ}

今^{いま}は吹^ふくなよ「ふく」の神^{かみ}

と暴^{ぼう}風^{ふう}に向^{むか}つて謠^{うた}へば、不^ふ思^し議^ぎにもこの聲^{こゑ}の止^とまると共^{とも}に、さしもの暴^{ぼう}風^{ふう}もびたりと止^とまり、浪^{なみ}は俄^{には}かに風^なぎ、海^{かい}面^{めん}は恰^{あた}も疊^{たた}を敷^しき詰^つめたるが如^{ごと}き平^{へい}穩^{おん}に歸^きしてしまつた。

青^あ瓢^を箏^{ふく}が寒^{さむ}さに怖^おぢけた時^{とき}のやうな面^{つら}構^{がま}へをした常^{とこ}世^よ國^{くに}の人^{ひと}々^{びと}も、にはかに蘇^そ生の思^{おも}ひをなし、少^{すくな}彦^{ひこ}名^な神^{のかみ}に向^{むか}つて、異^い口^く同^{どう}音^{おん}に嬉^{うれ}し涙^{なみだ}と共^{とも}に感^{かん}謝^{しゃ}する。

少^{すくな}彦^{ひこ}名^な神^{のかみ}は節^{ふし}面^{おも}白^{しろ}く、例^{れい}の宣^{せん}傳^{でん}歌^かを唱^{とな}へた。神^{かみ}人^{がみ}の中^{なか}に秀^{ひい}でて逞^{たくま}しき、色^{いろ}淺^{あさ}黒^{くろ}き背^せの高^{たか}き男^{をとこ}は口^{くち}を尖^{とが}らせながら、少^{すくな}彦^{ひこ}名^な神^{のかみ}に向^{むか}ひ、

貴^き下^かは何^{いづ}れの宣^{せん}傳^{でん}使^しなるぞ、貴^き下^かの言^{こと}靈^{たま}の威^{あり}力^{よく}に風^{かぜ}も海^{うみ}も皆^{みな}従^{したが}ひたり、願^{ねが}はく

は御名を吾らに聞かせたまへ」

と云ふ。少彦名神は、

「吾こそは、この世の寶その物にたいして、凡夫の如き無限の欲望は少彦名神なり」

と枕言葉を澤山に竝べて名乗り、而してそろそろ大神の御徳を説き始めたりける。

「總てこの廣大無邊の宇宙間は、無限絶對無始無終の全智全能を有し給ふ、一

柱の大國治立の大神御座しまして萬有を創造したまひ、その至粹至純の神靈を伊

都の千別きに千別きたまうて、海河山野などの神人を生みたまうたのである。故

にこの世界は神の御座さぬ處は一寸の間もない。神を讚美し、かつ神に頼らねば、

吾々は片時の間もこの世に生存へることは出来ない。いま吾々が呼吸する息も皆

神の御息であつて、決して自己のものでなく、昆蟲の端に至るまで、皆神の慈を

うけざるはない。ゆゑに天地間において最も敬すべく親しむべく信ずべく愛すべ

きは、第一に世界の造り主なるただ一柱の眞の神なる大國治立尊の尊さを措いて

外にはないのである。この大神の聖靈によつて分派出生したる海河山野の神人も

また尊敬しなくてはならない、何事も皆このごとき弱き凡夫は、神の力を借りるより外にはないのだ」

と説示した。船中の神人らは各自に口を開いて、

「果して宣傳使の言はるる如くならば、今このスペリオル湖の水中にも神はいますか」

と尋ねける。少彦名神は、

「海には海の神、河には河の神、また船には船の神がある。決して吾々は神を汚してはならないのだ」

船はだんだんと進んで西岸に近づいた。湖邊に明滅する漁火の光は、あたかも夏の夜の暗に螢の飛び交ふごとく、得も云はれぬ光景なり。船中は暗の帳に包まれて眞黒である。

このとき頭のピカピカと光つた神は頓狂な聲をふりあげ、
「ヤア殺生な、オレを馬鹿にするない」

といふ。船の片蔭にはクスリ、クスリと笑ふ聲さへ聞えてゐる。

第四五章 魂脱問答（二四五）

誠の齡を保つ神國は、世も久方の天津空、壽ぎ合ふ眞鶴の、東や西と飛び交ひて、世の瑞祥を謠ひつつ、縁の龜はうれしげに、天に向つて舞ひ上る、目出度き齡の萬壽山、主の神と現はれし、この美はしき神國を、堅磐常磐に守るてふ、名さへ目出度き磐樟彦は八洲國、神の救ひの太祝詞、遠き近きの隔てなく、唐土山を踏越えて、雲に浮べるロツキーの、山の嵐に吹かれつつ、さも勇ましき宣傳歌、心も輕き蓑笠や、草鞋脚絆に身を固め、何處を當と長の旅、愈々來る常世城、今は間近くなりけり、磐樟彦の宣傳使、磐戸別の神司と、名も新玉の今朝の春、雪搔きわけて行詰り、塞がる道を開かむと、日も紅の被面布を、押別け來る紅葉の、赤き心ぞ尊けれ。盤古大神八王の、曲の暴威を振ひたる、堅磐常磐の常世城、名のみ残りて今はただ、常世の城は大國彦の、曲の醜夫のものとなり、時めき渡る自在天、常世神王と改めて、輝き渡るその稜威、隈なく光り照妙の、城に輝く金色の、十字の紋章をうち眺め、溜息吐息を吐きながら、風雨に竄れし宣傳使、

今はなんにも磐樟の、神の果なる磐戸別、心の岩戸は開けども、未だ開けぬ常世國、常世の闇を開かむと、脚に鞭つ膝栗毛、さしもに廣き大陸を、やうやく茲に横斷し、濱邊に立ちて天の下、荒ぶる浪の立騒ぎ、ウラスの鳥や濱千鳥、騒げる百の神人を、神の救ひの方舟に、乗せて龍宮に渡らむと、草の枕も數かさね、今や港に着き給ふ。

磐戸別の神は常世の國の西岸なる紅の港に漸く着いた。ここには四五の船人が舟を繋いで、色々の雑談に耽つてゐた。

甲「オイ、このごろの天氣はちつと變ぢやないかい、毎日毎夜引き續けに大雨が降つて、河は氾濫し、家は流れ、【おまけ】に何とも知れぬ、ドンドンと地響きが間斷なくしてをる。初めの間は、吾々は浪の音だと思つてゐたが、どうやら浪でもないらしい。地震の報らせかと思つて心配してゐたら、今日で三十日も降り續いて、【いつかう】地震らしいものもない。この間も宣傳使とやらがやつて來よつて、地震雷火の雨が降つて、終末には泥海になると云つて居つたが、或ひはソナ事になるかも知れないよ」

と心配さうに首を傾けた。

乙「何、火の雨が降る、ソナ馬鹿なことがあるかい。雨【ちう】奴は皆水が天へ昇つて、それが天で冷えて、また元の水になつて天降つて來るのだ、水の雨は昔からちよいちよい降るが、火の雨の降つた例はないぢやないか」

「それでもこの前に、エトナの火山が爆發した時は、火の雨が降つたぢやないか」
馬鹿云へ、あれは火の岩が降つたのだい。萬壽山とやらの宣傳使が、天から降つた様に偉さうに宣傳して居つたが、是も【やつぱり】天から降つた岩戸開けとか、岩戸閉めとか云ふぢやないか」

「火の雨が降らぬとも限らぬよ。この間も闇がり紛れに柱に行當つた途端に、火の雨が降つたよ、確に見たもの、降らぬとは言へぬ」

「そりや貴様、柱に【ぶつつかつ】て、眼玉から火を出しやがつたのだ。降つたのぢやない、打つたのだらう。地震雷と云ふ事あ、吾々神人は神様の裔だから、吾々自身そのものが神だ。それで自身神也といふのだ、さうして自身神也といふ貴様が、眼から火の雨を降らしたのだ。【まあ】世の中に、不思議と化物と誠の

ものはないといつても【ゑい】位だくらゐ」

丙へい「ソナ話ははなしどうでもよいが、このあひだうみ間海の向ふに大變な戦争があつたぢやない

か」

丁てい「ウン、ソナことを聞いたね。其時の音おとだらうよ、毎まい日にち々まい々にちドンドン云ふの

は」

「戦たたかひが終すんでから、まだドンドン音が聞えるが、そりや何かの原因げんいんがあるのだ

らう。龍宮島とやらには、天あまの眞澄ますみの珠たまとか潮満潮干しほみつしほひるの珠たまとかいふ寶たからが昔むかしから隠かく

してあるとかで、ウラル山さんのウラル彦ひこの手下てしたの奴やつらがその珠たまを奪とらうとして、澤たく

山さんの舟ふねを拵こしらへよつて、闇くらがり紛まぎれに攻め付けよつたさうだ。さうすると沓島くつじまの大おほ

海原彦神なばらひこのかみとやらが、海原うなばらとか向腹むかつばらとかを立ててその眞澄ますみの珠たまで敵てきを惱なやまさうとし

た。しかしその珠たまは何なんにもならず、たうとう敵てきに取とられてしまつたさうだよ。そ

して冠島かむりじま一名龍宮島りうぐうじまには潮満潮干しほみつしほひるの珠たまが隠かくしてあつたさうだ。それもまたウラル

彦ひこの手下てしたの奴やつらが攻めかけて奪とらうとした。ここの守護神しゆごじんさまは、敵てきの襲來しふらいを惱なや

ます積りつもりで、また潮満しほみつとか潮干しほひるとかいふ珠たまを出だして防ふせがうとした。これも亦薩張またさつぱり

役に立たず、【とうたう】冠島も沓島も、敵に奪られて仕舞つたと云ふぢやないか。珠々というても、なにもならぬものだね」

「そりや定まつた話だよ、よう考へて見よ。眞澄の珠と云ふぢやないか。【マスミ】つたら、魔の住んで居る珠だ。それを澤山の魔神が寄つて来て奪らうとするのだもの、合うたり叶うたり、三ツ口に眞子、四ツ口に拍子木、開いた口に牡丹餅、男と女と會うたやうなものだ。ナンボ海原とか向腹立とかを立てた海原彦神でも、内外から敵をうけて、内外から攻められて、お溜り零しがあつたものぢやない。また潮満とか潮干とかの珠も、役に立たなかつたと聞いたが、よう考へて見よ、鹽は元來鹹いものだ、そして蜜は甘いものだ。鹹いものと甘いものと一緒にしたつて調和が取れないのは當然だ。また潮干の珠とか云ふ奴は、鹽に蛭といふ事だ。ソナ敵同士のを寄せて潮満の珠とか、潮干の珠だとか一體わけがわからぬぢやないかい。負けるのは當然だよ。その珠の性根とやらを、どつと昔のその昔に嚴の御靈とかいふどえらい神があつて、それをシナイ山とかいふ山の頂上に隠しておいた。それを竹熊とかいふ悪い奴がをつてふんだくらうとして、

偉い目にあうたといふこと。しかしながら、聖地の神共は勿體ぶつて、一輪の秘密とか一輪の經綸とかいつて威張つてをつたが、とうとうその一輪の秘密が「ばれ」て、ウラル彦が嗅ぎつけ、第一番に龍宮島の珠をふんだくつて、直にその山の御性念を引張り出さうと一生懸命に攻めかかった。その時シナイ山とやらを守つてゐた貴治別とかいふ司が、敵軍の頂邊から、その御性念の神徳を現はして岩石を降らした。ウラル彦の幕下は「とうとう」これに屁古垂れよつて、何にもしないので、逃げ歸つたと言ふことだ。それで攻撃を一寸もシナイ山といふのだ」

甲「馬鹿にすな、人に落話を聞かせよつて、もうもう行かうかい。コンナ奴に相手になつてゐると、日が暮れてしまふワイ。それぞれ、またど偉い聲が聞えてきた。脚下の明るいうちに何處なと逃げようぢやないか」

乙「逃げようたつて、吾々の乗つてゐる大地が動いてをるのだもの、何處へ逃げたつて同じことぢやないか」

雨は益々激しく、地鳴りは刻々に強烈になつて來た。一同は眞青な顔して、四方八方に眼を配り、忽ち不安の雲に包まるる折しも、林の茂みを別けて、蓑笠脚

絆はんの輕装けいさつをした宣傳使せんでんしが涼すずしき聲こゑを張はり上あげて、

☐ 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 千尋ちひろの海うみは干かわくとも

世界せかいは泥どろに浸ひたるとも 誠まことの力ちからは世よを救すくふ

といふ宣傳歌せんでんかが聞きえ始はじめたり。一同いちどうは耳みみを澄すましてその宣傳歌せんでんかを聞き入りいにける。

(大正一一・一・一四 舊大正一〇・一二・一七 藤原勇造録)

第四六章 油斷大敵 (二四六)

アーメニヤの野のに神都しんとを開ひらきたるウラル彦ひこは大蛇をろちの身魂みたまの猛威まうゐを借かり、ウラル姫ひめは金狐きんこの惡靈あくれいの使し噉そによつて天下てんかの神人かみがみを歸從きじゆうせしめ、一時いちじ衰退すゐたいに歸きしたる神しん政せいは日ひに月つきに降盛りうせいの域みきに達たつした。

世よの終はりに近ちかづきしこの際さい、かくも勢力せいりよくとみ頓くはに加くはるのは、恰あたかも燈火とうくわの滅めつせむとする時ときその光ひかり却かへつて強つよく輝かがやきわたるやうなものである。

アーメニヤを中心として集まり来る數多の神々は、孰れも體主靈從の行動を取り、自由を鼓吹し天地の神明を無視し、利己一遍に傾き、ここに天地の律法は全たく破壊されて了つた。

ウラル彦は勢を得て、遂に氷炭相容れざる盤古神王をウラル山上より驅逐せむとし、暗夜に乗じて八方より短兵急に攻め寄せた。

然るに盤古神王は天地の大恩を悟り律法を遵守し、敵の襲來に對して天運と諦め、少しも抵抗しなかつた。

元來ウラル彦は盤古神王の肉身の子なる常世彦の子にして、云はば神王の孫に當るのである。されど大蛇の靈に左右せられたるウラル彦は五倫五常の大道を忘却し、心神常暗となつて、遂に天位の欲に絡まれ、かくの如き惡逆無道の行爲に出でたのである。實に邪神位恐ろしきものは世にないのである。如何に善良なる神と雖も、その心身に空隙または油斷あるときは、たちまち邪靈襲來して非行を遂行せしめ、大罪を犯さしむるものである。

傀儡師胸にかけたる人形箱

鬼を出したり佛出したり

善になるも悪に復るも皆精神の持方一つにあるを思へば、精神位恐ろしきものはない。

ここに盤古神王は覺悟を定め、ウラル彦の蹂躪に一任し、無抵抗主義をとるこ
ととなり、天を拜し地を拜し、一切の結果を大神の命に一任し奉つた。

奥殿に賓客として留まり居たる宣傳使日の出神は、盤古神王を勵まし、鹽長姫
および鹽治姫と共に夜陰に紛れてウラルの深林に隠れ、辛うじて聖地エルサレム
に難を逃れ、荒れ果たる聖地に形ばかりの假殿を造り、ここに天地神明を祀り、
世界の混亂鎮定の祈願に餘念なかつた。

天上の星は常規を逸して運行し、地は絶えず震動して轟々たる音響を立て、空
行く諸鳥は残らず地に落下し、日月は光褪せ、雨頻りに降り來つて諸川氾濫し、
地上の神人は日夜塗炭の苦しみを嘗むるに至りぬ。

第四七章 改言改過〔二四七〕

ウラル彦、ウラル姫は、一時地上の神界を意の如くに掌握し、權勢竝ぶものなく、遂に盤古神王を排斥して自らその地位になほり、茲に盤古神王と自稱するに致つた。

盤古神王は再び常世城を回復せむとし、數多の勇猛なる神人を引率し、大海を渡つて常世の國に攻寄せ、常世神王に向つて歸順を迫つた。常世神王を初め大鷹別は、その眞の盤古に非ざることを見破し、一言の下に要求を拒絶し、俄に戦備を整へ防戦の用意に取りかかつた。

ここに兩軍の戦端は最も猛烈に開始された。天震ひ地動き、暴風怒濤百雷の一時に轟く如き慘澹たる修羅場と化し去つた。地上の神將神卒は、或は常世神王に

或は盤古神王に隨從して極力火花を散らして、各地に戰鬪は開始された。

時しも連日の雨は益々激しく、暴風凄まじく、遂には太平洋の巨浪は陸地を舐め、遂に常世城は水中に没せむとするに到つた。茲において盤古神王は一先づその魔軍を引返して、ウラル山に歸らむとした。されど海浪高く暴風吹き荒みて、一步も前進することが出来なかつたのである。さすが兇惡なる大蛇の身魂も金狐の邪靈も、これに對しては如何ともするの途がなかつた。

凡て邪神は、平安無事の時においては、その暴威を逞しうすれども、一朝天地神明の怒りによりて發生せる天變地妖の災禍に對しては、少しの抵抗力もなく、恰も龍の時を失ひて蠨蛸、蚯蚓となり、土中または水中に身を潛むるごとき悲惨な境遇に落下するものである。これに反して至誠至實の善神は一難來る毎にその勇氣を増し、つひに神力潮の如くに加はり來つて、回天動地の大活動を爲すものである。

天は鳴動し、地は動搖激しく海嘯しきりに迫つて、今や常世城は水中に没せむとした。常世神王は大に驚き、天地を拜し天津祝詞を奏上し、東北の空高く天教

山の方面に向ひ、

三千世界の梅の花
一度に開く兄の花の

この世を救ふ生神は
天教山に坐しますか

あゝ有難や、尊しや
この世を教ふる生神は

地教の山に坐しますか
御稜威は高き高照の

姫の命の神徳を
仰がせたまへ常世國

常世の城は沈むとも
水に溺れて死するとも

神の授けしこの身魂
【みたま】ばかりは永遠に

助けたまへよ天地の
元津御神よ皇神よ

と讚美歌を唱へた。忽ち中空に例の天橋現はれ、銀線の鉤、常世神王始め大鷹別
その他の目覺めたる神々の身體の各所に觸るると見るまに、諸神の身體は中空
に釣り上げられてしまつた。

ウラル彦ひこの魔軍まぐんは大半水たいはんみづに溺おぼれて生命いのちを落おとし、その餘よは有あゆる船ふねに身みを托たくし、あるいは鳥船とりぶねに乗じやうじ、ウラルの山頂さんちやう目蒐めがけて生命いのちから遁走とんそうした。

(大正一一・一・一四 舊大正一〇・一二・一七 外山豊二録)

第四八章 彌勒塔みろくたふ(二四八)

國治立尊くにはるたちのみことの退隱たいいんせられ、天使長てんしちやう大八洲彦命おほやしまひこのみこと以下の神人かみがみもその責せめを負おひて各自配かくじはい所の月しよつきを眺ながめ給たまふ事ことになり、後のちには八王大神やつわうだいじん天下てんかの諸神人しよしんを集あつめて神政しんせいを樹立じゆりつし榮華えいぐわを誇ほこりたるも、槿花きんくわ一朝いつちやうの夢ゆめの間ま、注意周到ちゆいしゆうたうなるその神政しんせいも天地神明てんちしんめいの怒いかりに觸ふれて怪事百出くわいじひやくしゆつし、遂つひには居ゐたたまらなくなつて、アーメニヤの野のに神都しんとを移うつしたのは既すでに前まへに述べた通りとほである。それより聖地せいちエルサレムは統率者とうそつしやなく、殆ほとんど荒廢くわうはいに歸きし、僅わづかに昔むかしの名殘なごりを留とどむるのみの薄野すすきのとなり變かはりたる聖地せいちは、武藏野むさしのの哀あはれを秋あきの蟲むしの音ねに止とどめ、雪ゆきの晨霜あしたしもの夕ゆふべ、爐邊ろへんわずかに物語ものがたりを殘のこすのみであ

つた。

ここに眞心彦命の從神なりし國彦、國姫より生れ出でたる眞道知彦、青森彦、梅ヶ香彦は、天教山の神の教を宣傳使祝部神より聞き傳へ、ここにいよいよ意を決し、聖地エルサレムに神政を復古せむとし、その兄弟三神の男神は心を協せ、力を一にして神政の端緒を開き、父母二神をして聖地の主管者と仰ぎ、三柱の兄弟のみがその神政を補佐する事となつた。諸方に散亂したる神人は、この吉報を聞きて山の谷々、野の末より雲霞の如く集まり來り、國彦、國姫の神政に再生の思ひをなして奉仕したのである。しかるに國彦、國姫は第三卷に略述して置たるが如く、放縱にして節制なく、三柱の神人の諫言をも聞かず、再び聖地は混沌の域に立ち歸つてしまつた。

三重の金殿は、前述の如く、際限なきまでに金色の兩刃の劍となつて天上に延長してしまつた。これを天の浮橋といひ、その兩刃の劍の形をなして天に冲するときを三口ク塔といふ。

天教山の宣傳使祝部神は、晝夜の區別なくエルサレムを中心に、遠近の山河原

野を跋渉して盛に宣傳歌を傳へ、かつ非常に備ふるため、各自に方船を造らしむる事を命じた。諸神人はあるひは信じ或は疑ひ、宣傳使の教を心底より信ずるものは、殆ど千中の一にも當たらぬ程の少数であつた。眞道知彦は二柱の弟と共に、橄欖山の大神を伐り、神人を救はむために數多の方船を造り始めた。國彦、國姫の二神司は、極力これに反對し、怪亂狂暴の詭言となし、方船政策を嚴禁してしまつた。

この時ウラル山を逃れ、山野河海を跋渉して漸くここに辿り着きたる盤古神王始め日の出神の一行は、欣然として數多の正しき神々を引率して聖地に到着した。さしも閑寂なりし聖地エルサレムは、ここに殷盛を極る事となつた。時しも天地は震動し、星は空中に亂れ散り、怪しき音響は晝夜間斷なく四方に響き、雨は沛然として瀧のごとく連日連夜降り頻り、さしもに高き蓮華臺上の聖地も半水中に沒せむとした。あゝこの結果は果してどうなるのであらうか。

(大正一一・一・一四 舊大正一〇・一二・一七 加藤明子録)

第四九章 水魚の煩悶（二四九）

盤古神王は、心身ともに解脱して玲瓏玉の如く、威風堂々あたりを拂ひながら、聖地エルサレムを指して、最も謹嚴なる態度を持しつつ、日の出神に導かれて、數百の從神と共に安着した。

ここに眞道知彦命、青森彦、梅ヶ香彦の三柱の兄弟神は、心の底より之を歓迎し、煎豆に花咲き出でたる如く、欣喜雀躍して、手の舞ひ足の踏むところを知らなかつた。然るに一方國彦、國姫は、その三柱の肉身の父母に坐ませども、放逸邪慳にして少しも天則を守らず、殘虐の行動日に月に甚だしく、爲に妖邪の氣四邊に満ち、再び怪事百出、暗黒界とならむとしつつありし際とて、三柱は暗夜に光明を得たるごとく隨喜渴仰したのも無理はない。梅ヶ香彦は形ばかりの假宮に、盤古神王を始め、日の出神を導き、酒肴を供へて遠來の勞苦を慰め歌ふ。

常世ゆく世は烏羽玉の暗くして

萬の禍の雄叫びは

五月さ蠅ばのごとく群むれ起おこり

天あめが下したなる神しん人じんの

闇路やみぢを辿たどる【あはれさ】を

國くに治立はるたちの大神おほかみは

助けたすむものと現世うつしよを

照てらす日ひの出での神様かみさまや

萬古ばんこ不易ふえきに世よを守まもる

盤古ばんこ神王しんわうを現あらはして

地ちの高天原たかあまはらに宮柱みやばしら

太ふとしき立たてて神かみの世よの

聖きよき祭まつりををさめむと

神かみの中なかよりエルサレム

選えらみに選えらみし誠神まことがみ

現あらはれますか有難ありがたや

眞まことの道みちを知る彦ひこの

嬉うれしき神代みよに青森あもりや

梅うめヶ香か清きよきこの園そのに

三柱みはしら神がみの現あらはれて

神かみの律法おきてを守まもりつつ

堅磐かきは常磐ときはの本もとの世よの

礎いしずかたく搗つき固かため

高天原たかあまはらに千木ちぎ高たかく
吾あが【たらちね】の國彦くにひこや

仕つかへまつりて治をさめむと

心こころ荒すびし兩親たらちねの

國くに姫ひめ司がみに言問こととへど

耳みみに等ひとしきかなしさよ

吾われらが諫いさめ木耳きくらげの

耳みみに等ひとしきかなしさよ

この世を照らし助けむと 日の出神の計らひに
盤古大神あれまして 治め給はば幾千代も
世は常久に安からむ 浦安國の浦安く
治まる御代を松風や 大木の枝の葉も茂り
千年の鶴の舞遊ぶ 聞くも目出度き松の代の
聞くも目出度き松の代の 名も高砂と響くらむ
名も高砂と響くらむ

と謠ひて歓迎の意を表したり。國彦、國姫の二神司は、三柱の吾が子の心底より
盤古神王の到着を歡び、神王を奉じて、ふたたび聖地を回復せむとするを見て、
心中快からず、極力親の威光を笠に着て、妨害を加へむとした。されど三柱の神
司は、神明に背反し、律法を攪亂する父母を奉じて、ますますこの上に父母に罪
を重ねしめ、かつ天下萬人の禍を坐視するに忍びず、涙を呑んで、大義親を滅す
るの態度に出で、盤古神王を奉じて總統神と仰ぎ、日の出神を補佐として、神務

と神政とを復活したのである。されど天地は暗澹として前述のごとく曇り霽れず、日夜覆盆の雨は、ザアザアと瀧の如く降りしきりける。

(大正一一・一・一四 舊大正一〇・一二・一七 藤原勇造録)

第五〇章 磐樟船〔二五〇〕

生者必滅、會者定離、榮古盛衰は世の習ひとは云ひながら、一時は聖地エルサレムの神都において、大八洲彦命と共に天使の職の就きたりし機略縦横の神人も、今は配所の月を見る、苦しき憂きに大足彦の、神の命の成れの果、この世を忍ぶ足眞彦、神と現はれ荒れ狂ふ、魔神の荒びを鎮めむと、神國を思ふ眞心の、心の駒に鞭打ちて、山野河海を駆け廻り、天教山の神示をば、四方に傳ふる常磐木の、松の心ぞ勇ましき。足眞彦は、

三千世界一度に開く梅の花、開いて散りて實を結ぶ。時鳥聲は聞けども姿は見

えぬ」

と世を忍ぶ幽かな聲に四方を逍遙ひながら、漸うここに歩みくる。

淵瀬と變る假の世の、昨日や今日の飛鳥川、彼岸に渡す彌勒の世、彌勒神政の成就を、深く心に掛卷くも、畏き神の宣傳使。

ここは常世の國の紅の郷である。紅の館には蓑彦といふこの地方を治むる正しき神人があつた。

足眞彦は門前に立ち現はれ、この宣傳歌を小聲に謠ひつつ、淋しげに通り過ぎた。

少し前方に當つて、頻に木を伐る音が聞えた。足眞彦は不知不識その音のする方に歩みを運びつつあつた。

數十柱の神々は一生懸命に汗「みどろ」になつて、この山林の樟の樹の伐採に餘念がなかつた。棟梁神と覺しき圖體の長大なる色の黒き神は、神々に向つて、

「オーイ皆の神たち、モウ休息してもよいぢやないか」
と呶鳴る。數多の神々は鶴の一聲に、得物をその場に捨て、一所に集まり、倒し

た木に腰を掛けながら、四方山の話に花が咲いた。

甲「オイ皆の者、昔から紅の郷の名物といはれたこの樟樹山を、毎日々々伐採するなんて、一體、こりや何のためだらうな。蓑彦神さまも、ちつとこの頃はどうかして居りはせぬかな」

と邊りを憚る様な手付きをして、そこらを「きよろきよろ」見廻しながら口を切った。

乙「ナンダとー。【くすくす】云ふに及ばぬ、凡夫の分際として、蓑彦様の御精神が判つてたまるか。只お前たちや黙つて仰の【まにまに】俯向いて働いて居りやよいのだ。大神さまの爲さることを【くすくす】批評するのは、【みの】彦、おつと、どつこい、身の上知らずといふのだよ」

丙は澄ました顔をしながら立ち上り、

「そもそもこの山は遠き神代の昔より」

丁「おいおいそらなに吐すのだい、遠きも糞もあつたかい。とぼけ人足に昔からの事が判つてたまるか。俺が眞正の事あ知つてらー。この頃それ、蟻が行列す

る様にドンドンと海を越えて東の國へ渡る奴があるだろう。彼奴はな、宣傳使とやらと言つたことに膽を潰しやがつて、蟻のやうな小さい神どもが、「ユルサレル」とか、「ユルサレム」とか、何だか妙な名の付いた都へ助けて貰ひに行きよるのだと云う事だよ。蟻の行列の様に澤山に竝んで、有難いも糞もあつたものぢやない。それよりも船を澤山に持つてをる神人こそ、澤山な船賃を取りよつて、それをホントに有難がつてをるから、蓑彦さまも酢でも、蒟蒻でも、おつとどつこい誠に立派な、お賢い、智慧の深い、利益に敏い、氣の利いた、賢明な、敏捷な……」

甲「そりや何を吐かすのだい。同じことばかり竝べよつて、早く次ぎへ切り上げて先きを言はぬかい」

丁「切り上げて言へつたつて、コンナ大樹がさう早速に伐り上げられるかい」

甲「馬鹿、その次ぎを早く申せと言ふのだ」

丁「その次ぎはその次ぎかい。それでな、蓑彦さまは身の得を考へて、澤山に立派な船を造つて、蟻のやうな凡夫を澤山に乗せて駄賃を吸ひあげる積りだよ。吾々

は汗水垂らして毎日日木を伐らされて、「ホント」に氣が利かないよ」

戊「馬鹿いへ、蓑彦はソナ欲な神さまぢやない。「よくも」無い神人さまだよ」

丁「欲ないから悪いのだ。ソナナこと言つてみると、今にそれ勝彦のやうに、ま

た「どえらい」目玉を剥かれて、縮み上つて吠面かわいて謝まらねばならぬ事が

出来てくるワ」

乙「眞正の事は、お前たちも確乎せぬと大洪水が出るのだよ。蓑彦さまは吾々を

助けるために、昔から秘藏のこの山を伐つて、立派に樟の船を造つて、サア世界

の大洪水といふ時に、お前たちも助けてやらうといふ御精神ぢや。そりやもう、

ちつとも間違ひはないよ。吾々は堅くかたく信じてゐるのだ。堅いといつたら石

に證文、岩に判を押したやうなものだよ」

丁「ソナナ大洪水が實際あるものだらうかな。俺もこの間から、何だか氣に掛る

のだ。毎日日、今日で四五十日も雨は「ざあざあ」と降りつづくなり、大河小

川の堤が切れるなり、低いとこの家はみな流されて了ふなり、この調子で二年も

三年も降り續くものなら、それこそ事だ。きつと山も何にも沈んでしまふに違ひ

ない。マア、マア、一生懸命に蓑彦さまの仰せに従つて働かうかい」
一同「それが宜からう、それが宜からう」
といつてまた起ち上り、樟の伐採に着手せむとする時、低い聲にて宣傳歌を謠ひながら出て来る神人があつた。

「朝日は照るとも曇るとも

常世の暗は晴れぬとも

大地は泥に浸るとも

誠の力は世を救ふ」

と謠ひつつ此方に向つて進み来る。神人らはこの宣傳使の歌に耳を傾けた。後より又もや、

「おーい、おーい」

と呼ばはりながら、宣傳使の後を追つかけて来る威厳ある男ありき。即ちこれは

蓑彦みのひこなりける。一同いちどうは大地だいちに拜跪はいきした。

蓑彦みのひこは宣傳使せんでんしにたいし、鄭重ていじゆうに挨拶あいさつをなし、かつ地上ちじやう神人しんじんの爲ために千辛萬苦せんしんばんくを排はいし、世界せかいを遍歴へんれきし警告けいこくを與あたへ給たまふその至誠しせいを感謝かんしゃしつつ、紅くれなゐの館やかたに伴ともなひ歸かへつた。

足眞彦だるまひこは蓑彦みのひこに導みちびかれ、館やかたに立たち入いり、奥殿おくでん深く進すすみ入いりぬ。

そこには幾丈いくぢやうとも知しれぬ大岩石だいがんせきがあつて、數多あまたの神人かみがみの姿すがたが天然てんねんに現あらはれて居あた。

よくよく見みれば王仁おにの身みは、高熊山たかくまやまの岩窟がんくつの前まへに、何時いつの間まにか靈れいより覺さめて、
兩眼りやうがんを「ぱつちり」開ひらいてその岩窟がんくつを眺ながめいたりけり。

(大正一一・一・一四 舊大正一〇・一二・一七 井上留五郎録)

(昭和一〇・三・二〇 於瀬戸内海航海中 王仁校正)

~~~~~

靈界物語 第五卷 靈主體從 辰の巻

終り